菅江真澄資料センター

真　澄　研　究

29号

真澄を追った旅の思い出……柄　澤　照　文・永　井　登志樹　1

現代語訳《ふでのまにまに》第五巻……嵯　峨　彩　子　25

菅江真澄資料センター所蔵の柳田国男書簡……松　山　　修　61

資料『蝦夷錦』の現代語訳……松　山　　修　79

令和７年３月

秋田県立博物館

真澄を追った旅の思い出

ペン画家・柄澤照文
文筆業・永井登志樹

（角崎）それでは、さっそく講話会をはじめたいと思います。本日の進行は秋田県立博物館・菅江真澄資料センターの角崎が務めます。よろしくお願いします。正面にスクリーンを準備しました。参加者の皆さんはスクリーンを見ながら、お二人のお話を聞いていただければと思います。

本日は「真澄を追った旅の思い出」というテーマで柄澤さん、永井さんにお話ししていただきますが、参加者の中には、実は菅江真澄についてあまりよく知らない、という方もいらっしゃるのではないかと思います。はじめに菅江真澄について簡潔に紹介します。

菅江真澄は宝暦四年、一七五四年に三河国で生まれた、とされております。三河国は、本日の講師である柄澤さんがお住まいの愛知県岡崎市を含む、愛知県の東部にあたります。真澄は江戸時代後期の紀行家です。各地を旅して歩き、自ら見て、聞いて、体験した様々なことを記録しました。また国学や本草学をはじめ、様々な学問に精通し、和歌も詠みました。真澄の容貌を伝える肖像画を見ると、頭に黒い頭巾をかぶっています。真澄はいつも頭巾をかぶっていたため、秋田の人たちからは「常かぶりの真澄」と、親しみを込めて呼ばれていました。

菅江真澄肖像画（館蔵）

それでは紀行家・真澄はどこを旅したのか。ルートでいうと、生まれ故郷の愛知県を出立し、一路、北を目指しました。愛知県、長野県、新潟県、山形県、秋田県、青森県、岩手県、宮城県、北海道といった、東日本・北日本を旅して歩き、最終的には秋田の地に定住します。

旅の目的はなんだったのか。真澄自身の言葉を借りると、著作の中でこんなことを言っています。「各地を巡り歩いて見た中で、心に残った珍しい場所、珍しいもの、珍しい風習を図絵に描いて故郷の人々に見せたい」この言葉通り、真澄は旅の中で心に残った珍しい場所、もの、風習を数多く記録しています。また「図絵に描いて」とあるように、真澄の記録の大きな特徴が、図絵を描いたことです。本日の講話では、真澄の描いた図絵もスクリーンに映してご紹介できればと思っています。

さて、それではいよいよお二人にお話を伺っていこうと思います。まず最初に、お二人が菅江真澄を知ったきっかけについて、いつ頃、どういう経緯で真澄に出会ったのかを教えていただければと思います。柄澤さんからお願いします。

（柄澤） よろしくお願いします。正直、菅江真澄については、当初は全く知らなかったんです。僕は女房と結婚して「おかざきしんぶん」というミニコミ誌を発行していて、岡崎の町の歴史を調べていたんです。それで一九八五年のことですが、岡崎市文化協会の編集委員もやっていまして、岡崎は大正五年から市になっていますから、ちょうど岡崎市七十周年記念ということで、岡崎の文化史年表を作ることになりました。八ヵ月くらい調べものをしていたんですけれども、そのときに、大正九年に柳田国男が岡崎に来て、講演をしていたことを知るんです。そして柳田の著作に『秋風帖』というのがあって、その中の「還らざりし人」という文の中で、柳田が真澄について「岡崎では曾て其様な人が生れ、且つ去つたことを知つて居る者さへも無いやうであつた。実に怖ろしいのは百年の力である」と書いていたんです。岡崎の人間にとって、この柳田の言葉は、何だか真澄という人物について、自分たちが関わらなければならないような、何かとてつもなく大きな力を持っていて、この言葉を聞いたときに、真澄という人物が、自分の中に広がってくるような、彼にとらわれてしまうような不思議な感覚を覚えました。だから真澄の著作そのものから僕は入ったわけではなくて、実は柳田国男からのメッセージを受け取って、そこから、真澄に関わるきっかけになったというわけです。

（角崎） 「三河生まれの菅江真澄という人物について、岡崎の人は誰も知らないのか」という柳田の言葉に、ある種、触発されて、といったところから真澄との関わりがスタートしたんですね。

続いて永井さん、真澄との出会いについて教えてください。

（永井） ここにいらっしゃる皆さん、それぞれが違う出会いをしていると思いますが、私は男鹿市の椿というところの生

まれなんですが、小学校・中学校で学校の先生や大人たちから菅江真澄という名を聞いた覚えはないんですね。真澄は椿を通って、図絵も描いているんですけれども。ですから、私がはじめて真澄のことを知ったのは、たぶん高校一年生くらいのときだったと思います。

昭和四十二、三年、一九六七、八年の頃に平凡社の東洋文庫から『菅江真澄遊覧記』という現代語訳が出たんです。皆さんもすでに読んでいらっしゃるでしょうけれども、その本をなにかの拍子に図書館で手に取って読んだら、はまったんです。その頃柳田国男も読みはじめていて、柳田国男から菅江真澄を知ったのか、菅江真澄を読んで柳田国男を知ったのか、もうよく覚えていないんですが、いずれ一緒に読みはじめて、この『菅江真澄遊覧記』五冊本を、自身のバイブルみたいにして過ごしていました。高校卒業後、大学に入った最初の夏休みに「菅江真澄の足跡をたどる旅をしよう」と思って、最初はですね、真澄の著作でいうと『外が浜風』のルートを歩きました。五能線沿線の八森から青森県の深浦、そして鰺ヶ沢、弘前までです。リュックを背負って歩いて、五能線の各駅の待合室で寝る。また起きて歩くという感じです。暗くなってからも歩いていると、車が停まって、「どこに行くの。乗せてやるよ。どこに泊まるんだ」と声をかけてくれた人もいて、泊めてもらったこともありました。この最初の旅がすごく印象に残っています。真澄と出会ったことで、こんな風に私自身も旅をするようになったんですね。

(角崎) お二人とも実は真澄との出会いに柳田国男が関わっているということで。柳田は真澄を広く世に知らしめた人物の一人であるとも言われますが、不思議な縁ですね。

続けて、真澄の足跡を追う旅にお二人とも出ていらっしゃいますが、そのあたりを詳しくお聞かせいただければと思います。柄澤さんからお願いします。

(柄澤) さっきの続きでいうと、岡崎市の文化史年表を作った後に、岡崎市在住の新行和子先生が「真澄と岡崎」というテーマで、サブタイトルが「旅・学問・人生」でしたかね、三回ほど講座を行ったんです。それに私も参加して、はじめて真澄について、どういう意図でどのようなことをした人かが少しわかってきました。そのときに岡崎図書館から『菅江真澄遊覧記』を五冊借りて読むことができたんです。

(角崎) 永井さんのお話の中で出てきた「バイブル」ですね。

(柄澤) そうですね。それから新行和子先生から内田武志著『菅江真澄の旅と日記』という本もいただきました。

そのあたりから、真澄の足跡を追った旅をしようという話が具体的に動いてきました。当時の私は菅江真澄をまだよく

知っているわけではなかったんですけれども、朝日新聞岡崎支局の方からも「真澄を追った旅をした記録を、県内版でよかったら連載しませんか」という話がちょうどあったもんですから、だんだんそんなことで旅の計画がはじまったんです。まず自分自身の中で旅のルートをどういう風にするか考えたときに、今日、皆さんのお手元にもあると聞いていますが、「菅江真澄双六」という、真澄の旅を双六にしたものを、ちょっと遊び心で作ってみたんです。そんなのを作りながら自身の旅の計画を練ってみて、真澄を追った旅に出ました。それが一九八七年、三十八歳のときです。

当初は一人で旅に出る予定だったんですが、女房も一緒についてきてくれることになりまして、旅の様子を記録した文章、新聞に掲載する文章は、女房が書いてくれて、僕はスケッチに専念できたもんですから、スケッチ画を自身の旅日記として、ずっと描きながら旅をしたんです。

（角崎） 今、ご自身から紹介していただきましたけれども、今日みなさんのお手元にある「菅江真澄双六」は、柄澤さんが制作されたものです。柄澤さんのご厚意で印刷して参加された皆さんにお配りしておりますので、今日のおみやげにお持ち帰りいただければと思います。

それから、柄澤さんの三十七年前の旅は、奥さんの恵子さんと一緒だったんですね。朝日新聞の愛知県版への連載では、全二十回の連載だったそうですが、柄澤さんがペン画を描き、文章は奥さんの恵子さんが担当されたとのことです。恵子さんは今日も会場に一緒にいらしていただいていますが、当時もご夫婦で協力しながらの旅だったんですね。

それではお待たせしました、永井さん、実際に真澄を追った旅についてお聞かせください。

（永井） 『菅江真澄遊覧記』を読んで、実際に真澄の足跡を旅してみようと思ったのは、もともとそういう旅をするのが好きだったということもありました。

真澄を追った最初の旅がさきほど話した津軽の西海岸で、その次に、今度は青森県の下北半島の東海岸、三沢の方から半島を北上するルートの旅をしました。これは『おぶちの牧』という著作のルートですが、真澄とは逆の方向から歩きました。六ケ所村から東通村、むつ市田名部を通って恐山まで行きました。

その次は、大学二年生のときの北海道渡島半島の西海岸の旅。これは松前から江差を通って太田山まで、真澄の『えみしのさえき』という著作のルートを歩いたんです。歩いたといっても徒歩にこだわったわけでなくて、途中で車が停まって「乗せてやる」というと、それに乗ることもありました。

太田山の頂上付近には洞窟があって、そこは円空が籠って円空仏を彫ったという場所なんですが、そこまで登って行きました。とても印象深かったですね。渡島半島の西海岸は独特の雰囲気があるんです。私は男鹿半島の生まれで日本海は見慣れていますが、江差から太田山までのルートを歩くと、霊的なものが感じられるというか、雰囲気が違いましたね。

それからまあ、若かりし頃のことで、ちょっと道を踏み外しまして。あまりにも真澄にはまってしまい、大学を出てからも定職につかないで、「真澄」になろうと思ったんです。どういうことかというと、日本各地を旅しながら暮らしていこうと。その頃はもう、わけもなく旅に出たくて、それも真澄とは全く関係ない土地、よく知らない西南日本を旅しようと思って。最初に行ったのは四国の高知県高知市でした。それから次に九州の長崎県長崎市に行きました。

全く知り合いもツテもないところに行って、部屋を借りて仕事を見つけるのは大変でした。それでもなんとか三年ほど過ごしましたけれども、やっぱり続かなくてですね、甘かったんですね。真澄になろうと思って始めたことでしたが、日々の暮らしさえもままならず、それで挫折して秋田に帰ってきたんです。

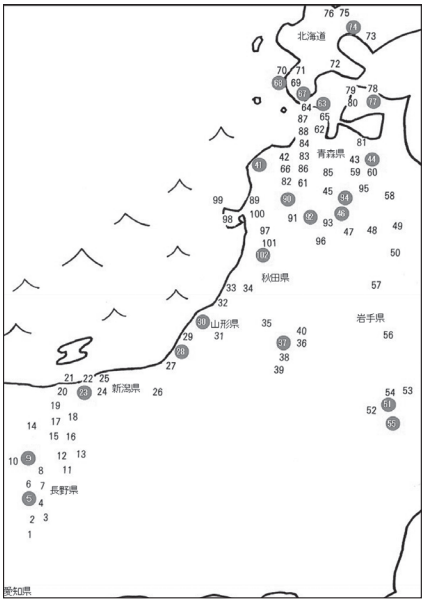
秋田に帰ってきてからは、秋田市の手形でバーをやったんですが、その店の後ろに、たまたま地元の出版社が事務所を構えていて、そこの社員さん方が店に来てくれて知り合いになったんです。それである時、その出版社の社長から「永井さん、なにか本を書かないか」と言われたんです。その時に書いたのが、秋田県の温泉のガイドブックでした。それが現在の仕事、この道に入るきっかけとなりました。

その後、店を閉めて、店のお客さんだった人から紹介されたのが、県内の文化施設などを設計、施工する空間デザインをやってる会社でした。そこで展示の解説文、説明文を考える、いわゆる「コピーライター」の仕事を嘱託でやるようになって。そうしたら思いがけず、その会社が博物館の菅江真澄資料センターの展示を請け負うことになったんです。不思議なつながりです。

（角崎） 柳田国男に触発されて真澄を知り、とにかくまずは旅に出よう、ということで旅に出られた柄澤さん、真澄にあこがれて、自身も真澄になるべく旅に出られた永井さん、それぞれの真澄の足跡を追った旅のお話をお聞きしました。

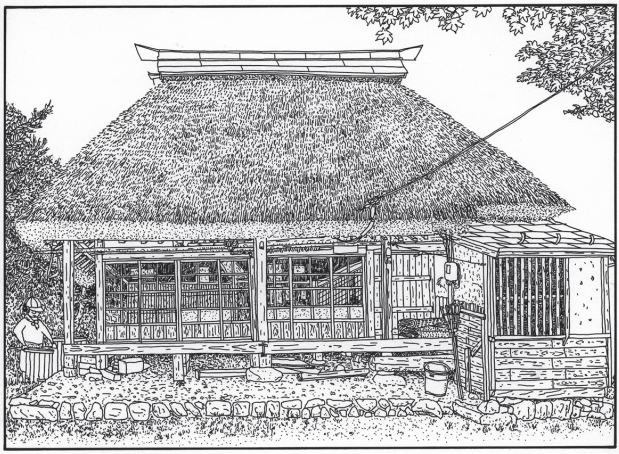
もうずいぶん話も進んできたんですが、ここで改めて、お二人の真澄の足跡を追った旅について、いろいろとスクリーンに映しながら見ていきたいと思います。まずは柄澤さんの旅から参りましょう。こちちがですね、柄澤さんの三十七年

前の旅の簡易マップです。愛知県からスタートして、だいたい真澄と同じように長野・新潟・山形・秋田・青森・岩手県と、それから北海道まで旅をされています。



時系列で順番にご紹介していきたいと思います。まず最初がこちらです。長野県塩尻市本洗馬というところにある「釜井庵」という建物ですね。柄澤さん、少しお話ししていただけますか。

（柄澤） はい。当時、僕たちが行ったときはですね、真澄が泊まった釜井庵のそばで、地元の青年団の人たちが焼肉パーティーをやっていて、それに誘われて僕もビールを飲んだんですけど、酔っぱらって、ござの上でひっくり返って寝てしまったんです。



1987年５月24日　はれ　長野県塩尻市大字洗馬（あらま）　釜井庵　5

日が当たるので傘をさしてすわる。真澄が１年ほど暮らした釜井庵前の広場。地元の青年団の人たちに声をかけられ、焼肉パーティーに仲間入り。ソフトボールの帰りとかで、奥さんや子どもも加わってにぎやか。久々のビールに酔っぱらう。夕方までゴザの上でぐっすり。

そんな思い出話で申し訳ないですが、実は今回、秋田に来る途中、寄り道して、久しぶりに釜井庵に行ってみたんです。今は立派な資料館が傍にできていて、学芸員の方もみえ

て、あの当時とは少し違って、真澄の評価が高まっているのかな、昔とはちょっと変わったんだなと感じました。釜井庵の雨戸が閉まっていたのをわざわざ開けて、学芸員の方が中まで案内してくださったんです。三十七年前も感じたんですが、真澄が一年間滞在したこの地で、真澄が過ごした建物がまだ残っていること自体がすごいことだと思うし、真澄の関わったものに直に触れた思いがしました。それから三十七年前、この近くに田村さんという、真澄研究会の方がみえて、そこで真澄直筆だという短冊を見せていただいたんです。そのときにも真澄に直接手を触れた、一層そういう思いをしたんです。旅をするというのは、本の中の架空の世界ではない、実際の世界がそこにあることを感じること。そう考えるきっかけになった出来事でした。

（角崎） 真澄は『伊那の中路』という著作で、この釜井庵の図絵を描いています。真澄が釜井庵を訪れたのは七月六日で、当地では七夕の準備をしていました。このあたりでは、七夕には人形を軒先にかけるという風習があったようです。

（柄澤） はい。学芸員の方に話を聞くと、現在は真澄の図絵をもとにして、同じように七夕飾りをして、机の上にお膳を並べて、再現しているんだそうです。ああ、真澄のこの一枚の図絵というのは、この地域の人たちにとっては宝物のような、ふるさとの原点になるような図絵だったんだなと思って、すごく感慨深いものでした。

釜井庵『伊那の中路』（館蔵写本）

（角崎） 実際にですね、ご夫婦の旅の様子もご紹介したいなと思って、柄澤さんからお借りした写真をスクリーンに映しますね。軽トラの荷台に乗ってるのが恵子さんですね。柄澤さん、ご説明をお願いします。

（柄澤） はい。上の衣装ケースの中にはコンロや衣類、それから真澄の資料も。そういうものを六つに分割して入れてあるんです。その下に布団をまるめて押し込んでやって、そこで寝泊まりするという生活を繰り返して百六十日やってきた

んです。天気が良ければいい旅の仕方だと思うんですけれども、当時はキャンピングカーとかそういうものは全然なかった時代ですから。北海道の若い人たちに「すごいナウいね」といわれたような車でしたね。ただあの幌の間から蚊がすごく入ってくるんですよ。だからそう快適というような旅ではなかったですね。

（角崎） 洗濯なども大変だったのでは。

（柄澤） 洗濯はもちろん大変でしたが、それよりも大変だったのがお風呂。まず銭湯が見つからない。信州の方には温泉はたくさんあると思うんですけれど、旅人が簡単に利用できて、泊まらないで湯に入るってことが当時はとても難しくて。三日も四日もお風呂に入らないとさすがに疲れとか気持ち悪さを感じて。こういうところが、本当に一軒の家の中で暮らしているのとはまったく違う。やっぱりトイレの問題とか、それから食べること、寝ること。そういうことがとても大変なものですから。真澄という人は本当にどうやって旅をしていたのか。安心できる決まったルートがあって、宿を予約して、ここに泊まれますっていう旅ではなかったはずですから。旅という時間を過ごしていくことの強さというか、僕自身も旅してみて、改めて真澄の意志の強さみたいなものが感じられたんですね。

（角崎） いろいろと大変だったんですね。それからやっぱりペン画ですね。柄澤さんが描いていると、その周囲に人が集まってきたそうですが。

（柄澤） はい。写真を撮って記録を残していくというのはよくやられることだと思うんですけれども、ペン画のいいとこ

ろは、描くのに二時間か三時間かけてずっと時間を過ごしていくところなんです。僕はこういうことを「耳を立てて描く」といっているんですけれども、いろんな人の会話がどんどん入ってくるんです。やりとりがすごい。絵を描いて腕が疲れるより、喉が疲れることの方が多かった気もしています。

見ている人たちが僕たちについていろいろと聞いてくる、それからその町の移り変わりのことなんかをいろいろ話してくれる、そういうことが貴重な情報源というか、こういうことをしていることによって、たくさんのことが、目で見た以上に自分の絵の中に入ってくる。僕、絵の裏側にね、会話したことを全部えんぴつで書いてるんですよね。僕は絵はそんなに上手じゃない。上手な絵を描けるわけじゃないもんですから、絵と裏側に書いたノートみたいなのを合わせて、ひとつの僕の旅の記録になっていました。

(角崎) なるほど。土地の人たちと話をしながらペン画を描いたんですね。トータルで百二枚のペン画を描かれているということですので、本来であれば一枚一枚ご紹介したいのですが、今日は限られた時間ですので数枚でご容赦ください。先に進みます。柄澤さんたち、長野県から新潟県に入ります。

(柄澤) これは寝屋の海岸ですね。真澄はもうちょっと違う場所ですけど、このあたりを歩いていて「はんこたんな」っていう、幅の狭い布みたいなのを男女問わずに頭から被っていた様子を見たようです。僕らが旅をした時はちょうど羽越本線ですかね、電車が通っていて。近くに集落があって、畑があって、そこに行き来する人たちの写真を撮らせてもらったり、絵を描かせてもらったりして。真澄の記録したものと

は少し違うかもしれないけれど、「はんこたんな」の実物がここに、目の前にあるんだっていう、ひとつの感動がこう、旅っていうのは唐突に現れるんですよね。このときの喜びは自分の中ではすごかったですね。

1987年6月13日　くもり時々こさめ　新潟県岩船郡山北町（さんぽく）　寝屋の海岸　28

海に面した墓地のはずれ。遠くかすかに粟島の影、向こうに鉾立岩が見える。紺の頭布と覆面をつけたおばさんが何人か通る。長靴や地下足袋に、鎌を入れたカゴをかけている。野良仕事への行き来の道なんだ。日が暮れ、すぐ下のきれいな磯も夕闇に包まれた。

奥の方に遠く見えるのが、鉾立岩だと思うんですけど、あれは新潟地震のときに、先の方が落っこちたという話も聞きました。風景は徐々に変わる中で、残っていくものというのは、なにか合理的なものだからこそ残って来たのかなと思うんですよね。

(角崎) 三十七年前、当時はまだこういう格好をしている方が残っていたということで。

(柄澤) そうです。今回、秋田に来る時、長野県から新潟県を通って探したんですよ。だけどもうさすがに誰もいないんですよ。でも自分の中では、まだいるはずだと思って。そうしたら黒い頭巾のようなものをかぶった人が手押し車を押してくるんですよ。思わず窓を開けて「あ、はんこたんなだ」といったら、ただ単に髪の長い男性だったんですよね。そのことにとらわれると、思い込んでしまう怖さがありますね。

(角崎) 令和の現代にはもうなくなってしまったものかもしれませんね。

(柄澤) 近くのガソリンスタンドで聞いたらそんなことをいってましたね。

(角崎) 実際に柄澤さんが三十七年前に撮られた写真、これが「はんこたんな」をかぶった女性ということですけれども、一般的には頬かむりというんでしょうか。それとはまた少し違うのかもしれませんが、いずれ真澄も新潟・山形周辺で記

録した人々の格好だということです。

さらに柄澤さんたちは新潟県から北上して山形県を通って、いよいよ、秋田県に入ります。最初は象潟ですね。

（柄澤） はい。にかほ市象潟の蚶満寺というお寺に最初に行きました。それで、この時は雨がすごく降っていて、雨の中、お寺の前の駐車場で寝泊まりしていたんですが、なにかやっぱりあの九十九島っていうんですか、島がたくさんあった、真澄が訪れた際に見た風景の痕跡みたいなのがないだろうかと思って、高台の方に上がって行ったんです。そこで見た田んぼの風景と日本海の風景を合わせて描いてみました。雨がフロントガラスに当たってすごく描きづらかったんですけれども、実際には見えない、雨粒の間に見える往時の風景を、と思って描きこんだんです。

ただ、象潟に着いたあたりは、もう二人とも疲れ切っていて。真澄は舟に乗って象潟の島めぐりをするんですけれども、そのときに中橋というあたりで宿に泊まったというので、僕も中橋のあたりで絵を描いていたんです。女房はもう疲れて横で寝てるもんですから、地元の方が、女性がね、声をかけてくれて、「家へ来てお茶でもどうぞ」と誘ってくれて。きっと自分たちが疲れ切っていたのが見えたんでしょうね。旅ということで人のそういう心づかいみたいなのが本当にありがたくて。ああ、旅に出てきてよかったなというようなことがありました。それは真澄もきっと旅の中で感じていたことだと思いました。やっぱり人の優しい心っていうのに、すごく敏感になってくるんですよね。そういう意味ではこの旅に出て、つらくなればつらくなるほど、人の心がみえてくるというか、そういう体験をしましたね。

（角崎） 長く旅しているとやはり疲れも出てきますが、大変なところで人の優しさにふれる。柄澤さんが実際経験されたことですが、もしかしたら真澄も同じで、そんな人の優しさ

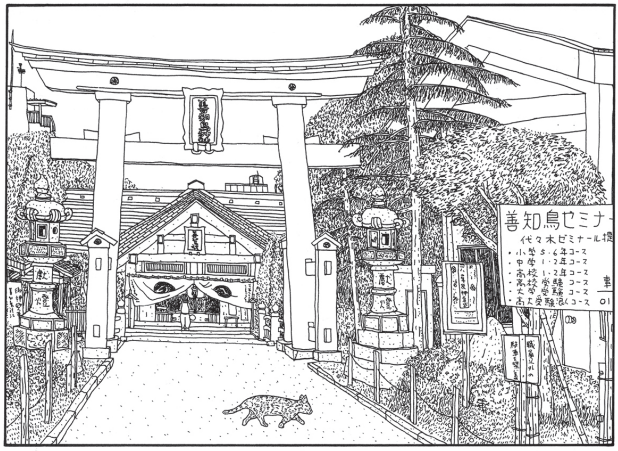
が、また旅を続ける支えになったのかもしれませんね。

それでは再び柄澤さんの旅に戻ります。象潟からそのまま東の方へ、羽後町、湯沢市の方を目指していきます。

（柄澤） はい。真澄は山の方に入っていったんです。なんでここで山の方に入っていくんだろうかと、正直ちょっとわからない行動だったんです。もしかしたら、新潟からずっと海岸線を来て同じような風景を見てきたので、海を見飽きて山の方に行ってみようと思ったのかなと。実は僕たちも旅をしながらちょっとそう思っていたんです。

（角崎） 真澄が海沿いから急に山の方に向かった理由について、以前、永井さんとも話したことがあるんですが、湯沢方面に行きたい理由があったんじゃないかなと私も永井さんも同じ意見でした。もしかすれば小野小町の足跡をたずねて行きたかったのかもしれないし、院内銀山への興味が真澄にはあったんじゃないか、ということも考えられます。さて、皆さんはどう考えるでしょうか。

話を戻します。真澄の足跡でいうと、その後、湯沢で年を越して、春になって北上して阿仁の鉱山を見ながら、男鹿に向かいます。男鹿から八森へ、そして現在の青森県に入ります。著作でいうと『外が浜風』です。柄澤さんのペン画は、これはちょうど青森市に入ったところですね、青森市の善知鳥（うとう）神社ですね。



1987年7月5日　はれ　青森県青森市安方　善知鳥（うとう）神社　44

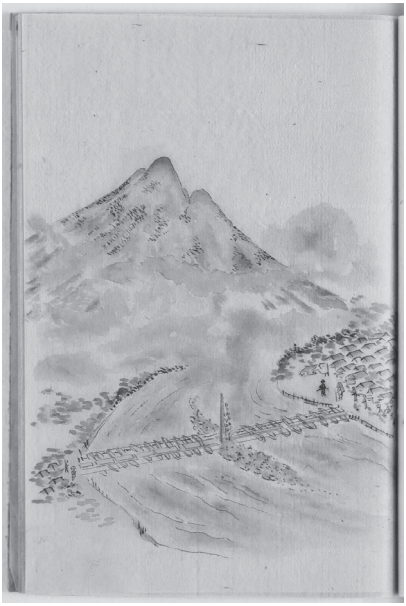
真澄が占いをし、北海道へ渡るのを3年後に延ばしたという神社。境内には学習塾。早朝、神主さんが外車で 出掛ける。町の人たちが参拝に来る。若者もいる。近代的な建物に囲まれていく。町も宗教の役割も変わりつつあるようだ。

（柄澤） はい。真澄は秋田を出て津軽半島の付け根あたりを歩いているときに、当時は天明の大飢饉で、人間の死骸の上を歩いたりとか、人の死肉を食べた話を聞いたりしながら、

善知鳥神社のところまで来てるんですよね。真澄もうすうす感じていたんでしょう。こういう状況で蝦夷地へ行けるんだろうかと。秋田で沢田利八から紹介状を書いてもらって、蝦夷地まで行くとっかかりができたみたいでしたけれど、蝦夷地に行きたいという気持ちと、やめた方がいいという気持ち、両方の気持ちの葛藤があったんだと思います。そして善知鳥神社で占いをしてもらう。真澄にとっても大きなポイントになった場所だと思います。

（角崎） そうですね。真澄はこの善知鳥神社で占いをしてもらいます。「蝦夷地（北海道）に渡るべきかどうか」と。すると、その結果は「三年待つべし」ということで。それを受けて真澄は蝦夷地に渡らずに南下して、現在の岩手県の方に入っていくんですけれども。柄澤さんの旅もですね、同じようなルートをたどります。一度岩手県を南下して前沢のあたりまで行き、再び北上して、盛岡にきました。

柄澤さんが撮られた写真の中にですね、盛岡市内を流れる北上川の写真がありまして。ちょうど川の中に中洲が見えるんです。この写真を見た時に、ああ、真澄の描いた図絵と重なるところがあるなと思いました。真澄が描いたのはこの図絵です。『岩手の山』という著作です。描かれている山は岩手山で、下に北上川が流れてます。



北上川の舟橋『岩手の山』（館蔵写本）

川にかかる橋は舟橋といって、小舟をいくつもつないで橋にしたものです。北上川の大水で橋が流されてしまうので、そうであれば小舟をつないで橋にしようという発想だったようです。川の中洲に柱を立てて、鎖で小舟とつないでいます。この舟橋は、明治になって立派な橋が架けられるまで存在していたそうです。写真の場所は、まさにここだろうと。

（柄澤） 最初にもお話ししましたが、僕はこの旅に出てくる前にほとんど真澄についての勉強をしてないんです。『菅江真澄遊覧記』を半分くらいまで読んで旅に出て、道中、時間

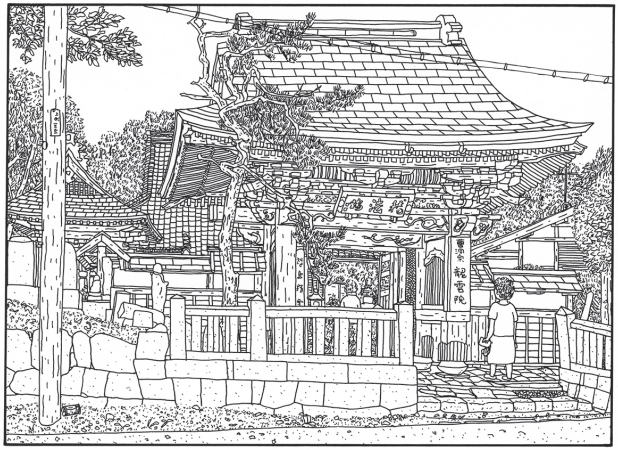
があったときに少しずつ読んで。旅も終わる頃になって、やっと読み終えるといったようなありさまでしたから、その舟橋のあたりは、実はあまり僕は見てなかったんですよ。だからここに気がついてなかった。事前勉強がもっとできてれば、気がついたんでしょうけども。偶然、写真だけは撮っていたんですね。

（角崎） 知らず知らず真澄に導かれていたのかもしれませんね。柄澤さんたちはその後、そのまま北上して、青森県に入り、竜飛岬の近くにある三厩まで行きます。真澄はこの三厩にある宇鉄の港から舟に乗って蝦夷地に渡っていきます。柄澤さんたちもいよいよ北海道に向かうわけですが、ただ真澄のルートとは少し違うルートだったようで。

（柄澤） はい。三厩から青森市に戻って、そこから青函連絡船に乗って北海道に行きたかったんです。もうその年で運航をやめるということだったので。ただ、軽トラックは許可しないっていうんですね。仕方ないですから、民間のフェリーに乗って、それで函館に行きました。

（角崎） そして函館から松前に。これは松前の風景ですね。

（柄澤） そうです。ここが龍雲院です。ここに真澄は滞在することになるんですけども、この手前の方がもう松前城なんです。高台の一角がお城なんです。いい場所に真澄は滞在しているんですよね。なんだか真澄がいかに大切にされていたかを思わせる立地にある、立派なお寺でした。



1987年8月19日　くもり　北海道松前郡松前町　龍雲院　67

真澄が滞在した龍雲院は、明治維新の際の大火を免れている。松前藩時代の墓所がある法憧寺や阿吽寺など、松前城跡の高台には寺社が多い。一帯は公園となり、いろんな種類の桜が数千本咲き競うという。三河ナンバーの車に出合う。懐しくて声をかけた。

（角崎） そして松前から、いよいよ真澄のルートと同じように北上していきまして、江差の方に入られるということで。

（柄澤） はい。実は今日、北海道の江差町からもわざわざ秋

田に来てくれた方たちがいて、とても感激しております。どうもありがとうございます。

姥神神社という江差の中心的な神社がありまして、そのすぐ上のところに法華寺というお寺があります。そこに真澄は最初泊まったんですね。僕たちもそこに泊めていただいたんですが、翌日の朝食に、いかそうめんが出てきたんです。お寺さんで朝からいかそうめんを食べるということにびっくりしました。それから、法華寺の上のところに正覚院というお寺があって、そこにも真澄は泊めてもらっていて、僕たちも泊めていただきました。

それから江差の町中でスケッチしていると、若いお母さんが赤ん坊を抱いてきて、「私この町が大好きなんです」って言うんですよね。そんな風に自分の町を好きだって言う人を今まで見たことがなかったものですから、ここの町のひとはなんて明るい人なんだ、いい人たちが多いのかなって。江差の第一印象がそれだったんですね。

（角崎） 素敵なところなんでしょうね。私は行ったことがないので、機会があればぜひ行ってみたいです。それからまた北上して、現在八雲町と呼ばれているあたりですね。

（柄澤） はい。あの当時は熊石町でした。それで熊石町教育委員会の方が僕に、町史を作るので、その表紙に「雲石」を、熊石町の語源になっている石があるんですが、その石の絵を描いてくれないかって頼むんです。それで、半日ぐらいでこの絵を描いたんです。

1987年８月29日　はれ　北海道爾志郡熊石町　雲石　71右

熊石の町名の由来となったといわれる雲石。炎天下の海岸でスケッチする。その３日後、台風12号のため、雲石の上の祠が大波でこわされたという。町小史の表紙に使いたいとの申し入れを受け、予定を一日延ばして描いただけに、不思議な縁を感じた。

２枚組の右側

不思議なもので、この絵を描いた三日後に、大きな台風が

来まして、雲石の上の部分のほこらがみんな壊されてしまうんです。それで、台風の去った後に大工さんがほこらを再現する時に、私の絵を元にして再現したそうで。後からお聞きしました。記録しておくことの大切さというか、それが何か役に立つこともあるんだなと。普段は絵を描いて役に立つことはないと思い込んでるんですけども、役に立つことがあったなと思いました。でもおもしろい形の岩でしたね。

（角崎） それから、柄澤さんたちは太田山に到着します。真澄が訪れた霊山、太田山ですね。柄澤さんが写真を撮られています。海に面した、急峻な山だということなんですが、柄澤さんの後ろにロープが見えますね。これから登ろうという柄澤さんは、素敵な笑顔をされていますが。

真澄の図絵には、太田山登頂の様子が描かれています。『えみしのさえき』という著作です。真ん中で登ろうとしている青い服が真澄かと思われます。そしてその後ろにいる、お坊さんの装束を着ているのが同行の超山法師というお坊さんです。ずいぶん急なところを登っているのがわかります。一番上にいるのは案内人でしょうか。

太田山『えみしのさえき』（館蔵写本）

柄澤さんたちはこの後も、真澄のルート同様、虻田の方に行かれて有珠山や洞爺湖周辺を訪れます。そして、再び本州、青森へ。今度は下北半島の方に行かれるんですが、だいぶ時間が押してきましたので。申し訳ありませんが、割愛させてください。

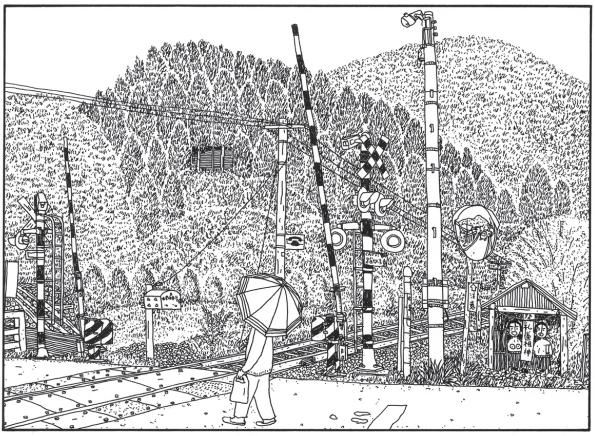
下北半島から津軽の方へ来た柄澤さんたちは、西目屋の暗門の滝にも行かれたということですが、これは三の滝ですね。

（柄澤） はい、そうです。真澄の記録だとこんなところへ冬の時期に来るなんて地元の人も驚いたといわれるような行動をしてますね。僕たちが行った夏のこの時期、当時はもうハイキングコースになっていて、わりと簡単に暗門の滝まで行けました。そのことに驚きましたね。

（角崎） 実際に真澄は川上の方から回るルートだったので、一の滝、二の滝は見てるんです。『雪のもろ滝』という著作です。ですが、柄澤さんが見た三の滝を、実は真澄は見てないようです。

そして青森から再び秋田に入ることになりますが、今回の講話会の告知ポスターにも使ったペン画です。大館市雪沢にある道祖神です。柄澤さんいかがですか。

（柄澤） はい。あの、ちょうど大館から十和田湖へ向かう途中だったんです。真澄研究会の田口さんに案内していただいて。行く途中に道祖神があるよといわれて、寄り道したんですね。



1987年10月12日　あめのちはれ　秋田県大館市雪沢字新沢　道祖神　94

2時間余りの間にこの踏み切りは一度も降りなかった。小屋の中の道祖神は南洋の原住民といった感じ。男の方はなまはげみたいに包丁を、女の方は棒を腰に差している。赤く塗られて腰みのをつけ、足はあるが手はない。変な人形だ。小坂町からの樹海ラインの紅葉に感嘆。

思ったよりも小さかったんですけど、ただ赤い色が塗ってあるもんですから、なんだかあの、南方の島の人たちの格好に似てるなあ、なんて思いながら。少しこのあたりの風習と

は違うんじゃないかな、と勝手に違和感を感じながら見た記憶がありますね。

（角崎） ペン画だと赤い色はわからないかもしれませんが、真澄が著作『おがらの滝』で描いた図絵では赤い道祖神が描かれています。

さて、その後、いよいよ旅の最終目的地、秋田市に入ります。秋田藩主佐竹家の菩提寺、天徳寺にも行かれたようで。真澄も描いております。図絵集『勝地臨毫秋田郡一』の中にですね、江戸時代の天徳寺の様子を描いております。

そして柄澤さん、最後、百二枚目のペン画は、真澄のお墓ということですね。

（柄澤） はい。立派な墓碑が立っていて、本当に真澄が周囲の人たちから慕われていたことを感じましたね。ただ、墓碑は真澄が亡くなってから三年くらいはなかったでしょう。はじめ埋葬された頃はきっと土饅頭だったんじゃないかと思うんです。そうであれば、真澄は文字通り土に戻っていったことになる。そのことに僕はすごく安らぎを感じたんですよね。真澄は秋田の地に安らかに眠っている。そう思って、最後、近くに生えていた草花を集めて真澄に手向けて手を合わせて、僕たちの旅の報告をしてこの旅は終えたんです。とても感慨深いものがありました。

（角崎） ありがとうございます。急ぎ足で大変申し訳ありませんでしたけれども、柄澤さんの三十七年前の真澄の足跡を追った旅についてご紹介しました。

そしてお待たせしました、永井さん。永井さんの若かりし頃の旅については、先ほどお聞きしたんですけれども、秋田に戻ってきて、それからいよいよ、当館菅江真澄資料センター創設に関わる取材の旅のお話をお願いします。

（永井） 平成八年オープンの菅江真澄資料センターをつくるときに、私含め撮影クルー数人と博物館の先生方二人、計七、八人で、展示室で流すＶＴＲと展示パネルや図録に用いる写真を撮影するために、愛知県から北海道まで真澄ゆかりの地を回ったんです。撮影クルーの写真を一枚紹介します。真ん中にいるのがディレクターの工藤雅人さん。会社の責任者です。向かってその右隣が、後に博物館の館長も務めた髙橋正先生で、そしてその右隣が私です。

そうした取材旅行の時に撮った写真がいくつかあります。これは、先ほど柄澤さんのお話であった「はんこたんな」です。正確には、撮影した新潟県の山北（さんぽく）地区では「丸帽子」といいます。庄内に入ると「はんこたんな」というようです。真澄が記録している、この土地らしい習俗だということで撮影したものです。この時同行していた、博物館の嶋田忠一先生のご指示でした。

私の主な仕事はＶＴＲのシナリオを書くことでしたが、ロケ地をめぐるスケジュール管理も担当しました。例えば、北海道の渡島半島をルート別に何日で回れるか、ホテルのある函館にはいつ泊まるか、最終地は有珠山にするか、というように日程を考えて、手配するわけです。あらかじめ単独で訪問地をロケハンすることもありました。

北海道の旅のハイライトはやっぱり太田山ですね。太田山の頂上付近の洞窟の中に太田権現が祀られているので、それを目指して登っていくのですが、本当に急なんです。その洞窟の真下にある鎖場で、鎖を伝って登ろうとしているのは、彫刻家の皆川嘉左ヱ門さんです。菅江真澄資料センター展示室の中央にある真澄像を作った方です。

展示室の木彫の真澄像を制作するために、皆川さんはロケ

に同行したんですが、この太田山に登った時に大変な思いをしたので、「真澄っていうのはすごい体力のある頑丈な人なんだな」というイメージを持ったみたいなんです。展示室の像をみればわかるんですけども、すごいがっちりした真澄なんですね。ちょっと真澄のイメージとは違うんじゃないかなと私は思っていますけども……。

それから、実は柄澤さんと私は以前から交流がありまして、私が秋田市でバーをやっていたときに、真澄の足跡を追って秋田にやってきた柄澤さんが秋田魁新報の取材を受けたんです。その時、知り合いの記者から、「こんな人が三河から真澄のあとを追って来てるけど、会わないか」という電話がかかってきたんです。私は店で真澄の話をよくしていて、その魁新報の記者は店の常連だったんです。それで、当時まだ大町にあった魁の本社に行って柄澤さんとお会いしたら、意気投合して、柄澤さんが私の店に来てくれたんですね。これはその時の写真です。左が柄澤さん、真ん中が私です。

それ以来、柄澤さんにはすごくお世話になって。北海道の江差に柄澤さんが別の仕事で滞在していたときには、遊びに行きました。岡崎にもこれまで八回くらい行っているんですけども、そのたびにお世話になっています。食事をごちそうになったり、三河・岡崎のいろんなことを教えてもらったり。

それからみなさんの右側に展示してある、岡崎の街並を描いた素晴らしいペン画。これを私に無償でくださったんです。本当に貰って良いんだろうかと思いながらも、とてもうれしくて、感激しました。

（角崎） 今日は永井さんからお借りして展示しております。岡崎の街の雰囲気を皆さんにも知ってもらえればと。

（永井） 折々にイラスト入りの葉書も送ってくださってね。今もこんな風に柄澤さんと交流できているのも、真澄がつないでくれた縁ですね。あのとき真澄を追う旅に柄澤さんが出て、秋田に来ていなかったら、出会うことなく過ごしたんだろうなと。

（角崎） ありがとうございます。最後にいくつかお二人に質問して終わりたいと思います。真澄を追った旅をしてうれしかったことはなんでしょうか。柄澤さんお願いします。

（柄澤） うれしかったことはやっぱり人との出会いですね。次から次へと、さまざまな人との出会いが多かったことです。秋田でも永井さんや田口さんに会って、いろいろ助けてもらったし。それから大館市の図書館ではね、真澄の自筆原本を実際に見ることができたんです。真澄が書いた実物を手に取って見ることができる機会なんて、この先もうないんだろうなと思っています。そういう出会いを強く感じましたね。

（角崎） 人との出会いがやっぱり大きかったと。もうお亡くなりになられてしまいましたけれど、菅江真澄研究会の元会長さんでいらっしゃった田口昌樹さん。それから鹿角市では、鹿角の茜染、紫根染の栗山文一郎さんのお宅にもお邪魔したということで。

（柄澤） はい。事前になんのアポイントもしないで行ってしまったんですけれども、夕食食べていけって誘ってもらって。おみやげまでもらって。染めの道具なんかも全部見させていただいた。職業は獣医さんで、家業は古代染、染物屋ですっていう言い方をされていましたね。

（角崎） それから今日もわざわざ北海道の江差からたくさんいらしていただいてますけども、江差での交流もすごく忘れられないとお聞きしてます。

（柄澤） はい。懐かしいです。もう亡くなられたんですけれども、小林優幸先生、それから松原さんとか、江差の人たちには本当に誰がっていうのを言えないくらいたくさんの人にお会いして、交流してきました。真澄のおかげでこういう形の旅が味わえたというのはすごくラッキーでしたね。

（角崎） それでは永井さん、反対に、旅をして大変だったことについて教えてください。

（永井） まあ若い頃の、学生時代の旅は、歩き通しでも野宿しても特別大変だとは思いませんでした。そんな旅が楽しかったんです。ただそのあとにちょっと道を踏み外して、真澄になろうとしたときはですね、やっぱり大変つらかったですね。特に経済的な面で。ずっと貧乏だったので。まあそれ

は全部自分が求めてそうなったので、つらいことはつらいんですけれども、自身の中では受け入れていたことではありました。それに比べると菅江真澄資料センターを開設するための取材の旅は、もう本当に楽しかったですね。若い時からずっと真澄のことばかり考えてきた私が、偶然そういった機会に恵まれたというのは、本当に幸運でした。普段は見ることができない真澄ゆかりの遺構や資料などを、直接目にする機会に恵まれたんです。若いときの旅は、真澄のルートをただ追うだけの旅でしたが、この旅では各地で真澄を慕う人に出会うことができ、貴重な資料に触れる機会を持てました。本当に私の宝物です。大変だったことよりもうれしかったことばっかりですね。

（角崎） お二人ともありがとうございます。それでは、本当にこれで最後です。真澄を追った旅は、ご自身に何を残してくれたのか。それからぜひ、今日いらっしゃっている皆さんに伝えたいことがあれば、お話ししていただければと思います。柄澤さん、よろしくお願いします。

（柄澤） 真澄は四十六年間あまりの旅なのに、僕はたった百六十日の旅。そして真澄のことをほとんど知らずに追いかけて旅をしたことで、僕自身、すごくおこがましいような気もするんです。今回こうしてお話しする機会をいただけたことには、とても感謝しますけれども、実はこの旅の後、あえて僕は真澄を追わなかったんです。なぜかというと、研究の世界は、真澄の書いた文章ひとつ読むにしても、とても難しいもので、ある程度勉強しないととても手に負えないだろうと。それでも僕は絵を描くことによって、それでひとつ、少しだけかもしれないけれど、真澄に触れられたような気がしたんです。ひとつ自分の中で、真澄とのつながりを持てたから、それでいいかなと思っています。真澄を追った旅の後は、江差の町に半年間滞在して絵を描かせてもらったり、その次は松浦武四郎のあとを追いかけて三年くらい北海道をまわったり、それから九州の方にも行ったりしました。いっぱい旅をしたことで、旅をすることの意味を考えました。それから旅をしたからこそ、自分のふるさとについても考えました。参加者の皆さんに伝えたいのは、真澄が書き残したものを読むことで、自分たちの住んでいるふるさとを知ることができるということです。特に秋田の皆さんは、真澄の記録によって、ふるさとを手に入れたんではないかな、という気がしています。

（角崎） ありがとうございます。永井さんお願いします。

（永井） 真澄を追う旅をして、その足跡が残る場所の風景を見ていると、ふいに真澄が隣にいるような、真澄の気配を感

じることがあるんです。特にどういう場所かというと、水辺です。清水、湧水、滝、洞窟、川、全部水と関係あるところなんですね。この写真は岡崎市を流れる菅生（すごう）川、別名、乙（おと）川です。

はじめて岡崎に行った一九九一年だったでしょうか、この川のほとりに立ったら、ここに真澄はいたんだと直観的に感じたんです。間違いなく真澄は若い頃に、ここ岡崎にいたんだと。岸辺で物思いにふけっている真澄の姿が見えたような気がしました。こんな風に真澄のあとをたどっていると、真澄が確かにここにいたと思える場所があるんです。

ツイン・タイム・トラベルという言葉があります。これはイザベラ・バードの研究家である京都大学の金坂清則名誉教授が提唱したものです。二つの時の旅。たとえば、イザベラ・バードがたどった当時の旅に思いをはせながら彼女のあとを追いつつ、自身は現在進行で旅を楽しむ。つまり両方の時を楽しみながら旅をするというようなことです。しかし、日本では昔から古人のあとをたどって旅するということが行われてきています。真澄自身も芭蕉のあとをたどって象潟や松島に行っていますし、歌枕の地をたずねる旅もまたツイン・タイム・トラベルでしょう。

真澄の旅は、二つの旅を同時に味わうこのツイン・タイム・トラベルと親和性が高いんです。私は『菅江真澄遊覧記』を読んでから旅に出ましたが、柄澤さんのように、真澄を読んだことがあまりなくても旅を始めるというのも、実はすごくいいことなんです。事前に読んでなくても、旅の中で『真澄

遊覧記』を読めばいいんです。かえって旅先で読んだ方が実感がわきます。私も必ずリュックの中に『真澄遊覧記』を入れて旅に出ました。列車の中とか、待合室とか、宿で寝る前とかに読むんです。するとすごく沁みるんです。真澄の著作は旅をしながら読むのにぴったりなんです。そして、そこで見えてくるものがある。ですから皆さんも、ぜひツイン・タイム・トラベルの旅、すでにしてる方も多いとは思うんですけれども、それを楽しんでもらえたらなと思います。

私はこれからですね、ツイン・タイム・トラベルじゃなくて、真澄の旅、そして自身の若い頃―五十年前の一九七〇年代の旅、そして現代の旅、このトリプル・タイム・トラベルを、元気なうちに、まだ歩けるうちに、もう一度真澄のあとを追って旅をしたいと思っています。

(角崎)ありがとうございます。もっとじっくり聞きたいこと、質問したいことがたくさんあったんですけれども、進行の不手際で時間が足りませんでした。申し訳ありません。

柄澤さん、永井さん、今日は貴重なお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございました。

※本稿は令和六年六月三十日、秋田県立博物館講堂における講話をもとに、適宜、加除修正しながら文章化したものです。

講話会当日の様子。左側が柄澤氏、右側が永井氏

現代語訳『ふでのまにまに』第五巻

嵯峨彩子

本誌二十五号からひきつづき、菅江真澄の随筆『ふでのまにまに』の現代語訳を収録する。同書の概要については二十五号の解題を参照されたい。

さて、今回の第五巻で目を引くもののひとつに、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』からの引用がある。『ふでのまにまに』の中で同書が引用されるのは今回がはじめてである。同書は【8】しゃりまさこ【10】あかがね【15】あまきつゆの三つの章段で引用されており、かなりの紙幅が割かれている。おそらく第五巻執筆当時、真澄はこの『本草綱目啓蒙』を入手したことで、これを紐解きながら自らの体験の記憶を呼び起こし、考証を随筆にまとめる作業を行っていたと考えられる。なかでも真澄の興味をひいたものは、鉱物に関する記述であったようである。特に【10】あかがねでは、自らが鉱山で見聞きした知識も存分に披露されており、真澄がいかに高い関心を持って各地の鉱山を訪れていたのかがうかがい知れる。

さらにもうひとつ、この第五巻で特筆すべき章段は【31】あさひ川である。このひときわ長い章段は、その大部分が真澄の日記である『あさひ川』からの引用で成り立っている。引用部分があまりにも長いため、引用というより転載といった方がいいかもしれない。そして、この日記『あさひ川』は現在未発見であるため、この章段は真澄を研究する上でより貴重な資料となっている。未発見本『あさひ川』については、随筆『久保田の落穂』「あさ日川」の章段にもその名がみえ、そこには泉村から仁別の山里にいたる道中のことを記したと書かれている。

考証随筆の中で、日記からここまで長い引用を行った動機はなんだったのであろうか。特に気に入っていて、より多くの読者に読んでほしいと思ったからなのか、あるいは、いずれ自分の手元から離れていくことを想定して、写しとして残しておきたかったのか。そして、これだけ写せるのであるから、当時真澄の手元に日記『あさひ川』があったのは間違いないが、その後、どういう変遷をたどってこの日記は失われたのか。そうした謎にも思いがめぐる章段である。

（秋田県立博物館非常勤職員）

凡例

ア　書名には『　』を、原文の割註には〔　〕を、和歌や俳句などの解釈部分には〈　〉を、訳註には（　）を用いた。

イ　検索の便のため、全三十一の章段に記事番号を付し、【　】内に示した。また、原文との照合がしやすいよう、章のタイトルのみ原文のままとした。

ウ　原文における人名、地名など固有名詞の表記で、現在の表記と異なるものがあっても、解釈上誤解の生じない限りにおいて、原文の表記をそのまま用いている箇所がある。

エ　ふりがなは原文にあるものと訳者によるものを区別せず、ひらがなに統一して付している。ただし、真澄がアイヌ語としている部分はカタカナで表記した。

オ　原文では、古代東北の蝦夷（えみし）もアイヌ民族も、同様に「蝦夷」と表記している部分がある。近世以降、蝦夷とアイヌが同一視されていたためであるが、ここでは文章を理解しやすいよう、古代東北の蝦夷を指している場合は「蝦夷」とし、それ以外は「アイヌ」と訳した。

カ　文献の引用部分もすべて現代語訳し、引用部分が長い場合は、真澄による文章との区別がしやすいように、点線で区切った上で、引用部分全体を二字下げとした（【31】あさひ川をのぞく）。

キ　現代語訳にあたっては、未来社刊『菅江真澄全集』第十巻所収の翻刻を底本とした。また、校正のため、大館市立図書館ウェブサイト「菅江真澄著作集」画像データを参照した。

ク　現代語訳にあたって、できる範囲で引用文の原典にあたり、その上で文言を改めたところがある。

ケ　度量衡についてはm、㎝、㎏などの単位記号を用いる。

筆のまにまに五　めやす

【1】はだかしま【2】つかろ【3】うとほの社
【4】あらはゞきのみや【5】とみのみやしろ
【6】とらふ竹【7】より木【8】しやりまさこ
【9】ひないのせう【10】あかがね【11】あきた山
【12】ひめがたけ【13】てむぐだけ【14】かつひらやま
【15】あまきつゆ【16】銭幣の物語【17】徳治のゑり石
【18】しろおもてむら【19】をとひめのかんざし
【20】かうろぎばし【21】うぶやの火たき【22】こばかま
【23】りりんものかたり【24】石ばなむら【25】あまちこ

【26】ゆきのやしろ【27】あしな沢のほさち【28】さゐ川
【29】よこざといふ事【30】のりの月【31】あさひ川

筆のまにまに　五巻　菅江真澄しるす

【1】はだかしま

松島にあるたくさんの島の中に、はだか島という小島がある。塩釜の藤塚式部知章（1）は「その島は鎧島に並んでいるので裸島ではなく旗島（はたが）だろう。それに裸島という名も下品だ」と、誰彼みなと議論した。しかし、この島は松もほかの木も草も生え育たず、むなしく波だけが打ちかかる様子は、本当に裸島を名として持っているのにちがいない。

津軽の浅虫の浦にも裸島というのがある。そこで謡う臼曳唄に〈名所名所と、浅虫は名所、前に大島、裸島〉とある。また肥後国にも裸島がある。古歌に〈肥後国の宇土の中にある裸島は、戯れる波が衣なのだろう〉とある。やはり裸島は世の中に多い島の名である。

【2】つがろ

津軽（つがろ）は、「津刈（つがろ）」、また近頃は「東日流（つがろ）」などとも書く。津軽は「積狩（つむかり）」の端折った名であるという。また「津」は物が集まるところを指す。「かる」は雁のことである。古い時代は雁がとても多く子を産んだところなのだろうか。

松前の奥黒崎（くしちし）〔くなしりと今いっている島である〕の離れ島に、マカムルルという広大な島（マカンル島）がある。この島でアイヌが雁の子を獲った物語がある。「軽」は「雁」のことを指した名だろうか。

阿波国古市郡に軽の墓（2）がある。大和国高市郡に法軽寺がある。丹波国桑田郡宮脇村に軽野神社がある。それを菅神（菅原道真）の御子、あるいは軽の大臣とも申し上げる。ここに関係のないことだが、「かる」の名がついているので記す。

【3】うとほのやしろ

津軽の青森に善知鳥（うとう）神社がある。この神社は、古くは山の木林という地にあったのを、慶長の初年、安潟町の近くに遷した。この神社に祀っている神は三女神で、宗像の神と申し上げるという。昔、善知鳥という鳥が田畑に栽培しているものを踏みしだいたので、仕方なく狩り尽くし、その鳥の死骸を埋め、塚の上に神社を建てて、のちに善知鳥神社と申し上げている。

その鳥は空（うつほ）にのみ棲むので、空鳥（うつぼ）と呼ぶべきところを、「うとう」とだけいっている。穴のある木を空木（うとうぎ）、穴のある坂を

うとう坂といっている。私の書いた『うとう考』(3)という一巻にこのことをくわしく載せている。

宗像神社は筑前国、大和国、また山城国にある。『歌枕名寄』に〈筑紫にある宗像山の西に住む翁の君。私のことをそう呼びなさい〉と詠んだ歌がある。また、三河国にある菟足(うたり)神社を、訛ってうとう神社といっている。そこは宇頭村といって、宿場である。三河にもうとう神社の名がある。

【4】あらはばきのみや

津軽の青森の茶屋町から堤川という流れを左にしてさかのぼれば、河崎(シリベツ)〔アイヌ語である〕の林というのがある。そこの古いサイカチのもとに社がある。九郎判官義経のあらはばき(粗く編んだ脛巾)を祀っているという。今は観音を安置して祀っている。

また、松前の西、江差の浦の近くに小山というところがある。そこに小山判官(おやまはんがん)(4)のあらはばきを祀っているという社がある。今は観音を安置して祀っている。

さらに三河国宝飯(ほい)郡長山村の砥鹿(とが)大明神の末社の神に、あらはばき明神がおいでになる。足を患う人は脛まきを藁で作って神前に掛けて祈る。

このあらはばきの神というのは、あちこちで申し上げる神号である。このことは第一巻にも記した。

【5】とみのみやしろ

昔、とみ神社というのが松島にあったが、今は観世音を祀っていて、富山の観音として世間によく知られている。

また、神武紀(『日本書紀』)に「鳥見(とみ)山中に神を祭る祭場を設けて、皇神天神をお祭りしたことがあった」と書いている。

このように陸奥だけなく、鳥見、あるいは土見(とみ)、砥見(とみ)、戸見(とみ)、跡見(とみ)などという名があちこちにあるが、みなとみというのは、自分の心のままに国が栄えていくことを祈って、富山などのように書いたものであろう。

この松島の富山は風情のある眺望で、そこのことわざで「松島の景色は富にあり」という。近頃は「とみの山」などと歌に詠まれている。

【6】とらふ竹

前段と同じ国(陸奥国)にある石巻の湊の日和山は葛西家の古城の跡である。そこに斑竹がある。また、同じ国の江刺郡黒石村の正法寺のそばにもある。さらに、松前の東蝦夷(正しくは西蝦夷)の国積丹(しゃこたん シャクコタン)〔夏地という意味である〕にもこの竹が多い。これは唐筆の管にして日本に渡ってくる斑竹(5)

と同じである。

『和漢三才図会』(6)の豊後国の産物の条に「虎彪竹〔姥カ嵩(大分県・宮崎県にまたがる祖母山)に出る。煙筒を作るのに適している〕」とある。とらふ竹もあちこちにあるものである。

【7】より木

前段と同じ国(陸奥国)南部糠部郡〔この郡を糟部と、どの本も間違って記している〕左井の浦の西、牛滝村の源右衛門の家の床縁(7)は、唐桑のとても大きなものである。寄木(流木)であるという。沖にヤンキシという島があり、唐桑の木の林があるという。その島などから流れてきたのだろう。また、違う唐木(8)もたびたび打ち寄せられるという。

『譚海』(9)二巻に「遠江の相良などの海辺に、時々変わった木、珍しい木が漂着することがある。相良の名主某の座敷は黒檀の床柱であるという。漂着したものだという」とある。同じような話である。

【8】しやりまさこ

世間には舎利石(10)というものが多い。私が拾った場所は、南部宇曾利山(恐山)の湖畔、舎利浜のあたりである。この舎利は黒光りしていて、中にものが入っている。とても細かく、粟粒のようである。

また、同じ南部の脇野沢の浦に近い木波(寄浪)の磯の白舎利、これは真白で雪のようである。さらに泊の浦山にも舎利があり、舎利母石(11)がある。

津軽外ヶ浜の袈月の地蔵前の舎利石、これは有名である。離れ磯のような小島があり、この小島の東面の岩に舎利母石があって、そこから生まれ落ちたのを、波が打ち上げるのである。昔、空が荒れて、舎利が諸国に降ったことがあったという。その舎利の様子は、津軽の袈月〔ホロヅキはアイヌ語で大きな盃のことである。沖に盃に似た岩があるのでそういう〕の舎利に似ていたという。当時の人が次のような戯れ歌を詠んだ。〈お舎利さま、降らしゃりますとおしゃります。出しゃしゃりまして拾わしゃりませ〉。石弩(12)が降ったことが『三代実録』(13)〔四十六巻元慶八年〕にも書かれているので、舎利も降ったのだろうか。

また、同じ津軽の雨生(安入)の坂というところで、舎利を二十粒ばかり拾ったことがある。ここは舎利などがあったという人はいなかったが、しばし足を止め、砂をかき分けてみたところ、一つ二つの舎利を得た。他の人たちも今日はじめて拾ったという。とすれば、どこにでもあるもので、みな

細かい砂のたぐいである。

小野蘭山の書いた『本草綱目啓蒙』(14)四巻の宝石の章の「津軽舎利の種類」という項目に、次のように書いている。

津軽舎利について。奥州津軽の今別袰月の海中に舎利オヤという石がある。瑪瑙のたぐいである。舎利はこれから生まれ出て石の全体につく。舎利の形は丸く小さくて透明である。その色は白、白っぽい黄色、紅色、まだらなど、数種類ある。波にゆられて海底に落ちるもの、また波で磯辺にうちあげられたものを拾得して蓄え、しまっておくと、年月を経て子が生まれる。つまり瑪瑙の花である。寺の舎利塔の中に収められているものの多くはこれである。

また、宝石のことは『天工開物』(15)に詳しく書いている。その玫瑰(16)というのは津軽舎利のことである。他の本にある玫瑰というのは赤い玉のことである。ハマナスを玫瑰花と書くのは、実の色が赤い玉のようだからである。真の宝石は坑井(17)の中から採りだすという。種類が多く、さまざまな色とともに数々の名がある。『典籍便覧』(18)および『輟耕録』(19)に詳しく書いている。

舶来品に葡萄石(20)というものがある。これは『物理小識』(21)の蜻蛉頭である。津軽舎利のたぐいで、大きさは葡萄の実くらいで、そのため名前がついた。今別の海辺の津軽石も葡萄石のたぐいであり、つまり瑪瑙である。

また、宝石の一種に石榴石(22)というのがある。あるいはジャクロ砂ともいう。これは西洋から来た。その形は石榴の小さいもののように色が赤い。また、黒色を帯びるものもある。盆栽に用いてとりわけ美麗である。これはつまり「集解」(23)にある石榴子(石榴石)である。しかしガラス製の偽物が多く、本物はまれである。奥州の舎利浜、総州(上総・下総二国の総称)の銚子口、および蝦夷地などに外国産に似た品質の劣るものがある。さらに、舶来品にトンボ玉というものがある。これは黄白色で真ん中に猫の瞳のような点がある。これは「集解」にある猫睛石(猫目石)である。また、淡青色のガラスで緒締め(24)のようなものを作り、桜花の絵が描かれたものがあり、俗にクスリ玉という。これをトンボ玉というのは正しくない。これは西洋人の衣服のボタンである。猫睛石のことは『典籍便覧』『物理小識』に詳しく書いている。『物理小識』には次のように書いている。「宝石は粗玉(25)の中に隠れていて、水中に生まれるものがある。中に煮酒色(26)をした一筋の動く光を含むものを猫

睛という。大きいものは虎睛といい、焔のような光が閃き輝く。また、菫青は湖水色、黒色で、動く光がないのを、裸子、蜻蛉頭、走水石という」。

「集解」瑟瑟（トルコ石）は宝石が碧色のものをいう。奥州松前から出る。虫巣というのがこれに似ているが、違うものである。虫巣は奥州の方言でアオダマ、また松前玉ともいう。みな練物(27)である。しかし本物は少ない、云々。

花形のトンボ玉を西洋人の衣服のボタンといっているのは、少し違う。花形はトンボ玉と同じ作り（描いているのではなく、そう見えるように練って作ったもの）で、大小数種類ある。その玉が欠けても花形が現れるのは、能代産のおたふく飴のようである。

西洋のボタンは種類がとても多い。金銀や鏡（物が映る）にして作った物もある。

【9】ひないのせう

出羽国秋田郡に比内荘がある。ヒナイを比内、また樋打などとも書いたものがある。それはアイヌ語でヒルナイという言葉が変化したものであろう。ヒルは良いことをいい、ナイとは沢のことをいって、良い沢のことである。この比内という名はあちこちで山の名、沢の名、田畑の名としても知られている。そのアイヌ語の変化した比内を、火内、檜内、樋内などと書いた。読みを変えて樋内と読んだのを、樋打と書き写したのだろう。

今その比内というあたりは、板沢・仁井田・扇田・十二所など、上津野川〔今でいう南部の鹿角川である〕（米代川のこと）の南にある地を南比内といい、この上津野川の北にある麻生・小繋・下田平・今泉・前山・坊沢・綴子・河口・大館・釈迦内・長走のあたりをさして北比内という。上津野のことは『三代実録』に記載されていて、秋田の賊地十二村とあったのを考証して別の本に記した。

また、釈迦内というのもアイヌ語の転じたものである。釈迦内という名は山・沢・田畑の名にもとても多い。シャカナイはもとはシャクナイである。シャクは夏である。ナイは沢である。夏沢である。今、松前の東蝦夷地（正しくは西蝦夷地）にシャコタンといって、斑竹（竹のアイヌ語）を産する場所がある。好事家は遮胡丹竹、あるいは鷓鴣丹、砂古淡などのようにも書いている。

夏とは、春・秋・冬は漁もなく、夏はもっぱら鱒網曳に人がやってくるので、夏を名に持って夏といい、コタンは浦も

村もみなコタンである。そういうわけで夏沢（シャカナイ）または夏地（シャクコタン）はあちこちにあるのだろう。津軽路にも南部路にも釈迦内がある。釈迦内という名があるから、そこに釈迦仏の像を安置するのも法師の道理であろう。

【10】あかがね

銅（あかがね）の漢名は蜀山居士〔事物異名〕、黄鉄〔名物法言〕、丹陽〔石薬爾雅〕ということである。また自然銅があり、その漢名は金山力士〔薬譜〕、金力士〔事物異名〕、散佐里〔郷薬本草〕という話である(28)。

そもそもこの銅は、天武天皇（正しくは文武天皇）の御代二年という年に因幡・周防の両国からその銅鉱（あらかね）を献上し、また元明天皇の御代に武蔵国から銅を慶雲五年に献上したので、年号が変わって和銅元年といった。

『本草啓蒙』金石の部に、次のようにある。

> 今の世の銅の産地は摂州（摂津）多田、奥州南部、仙台、羽州秋田、最上、越前、肥前、予州（伊予）、日州（日向）、備中、濃州（美濃）、そのほか諸州であり、おおよそ四十八か国ほどである。越前産が上等品であるとする。「集解」には、銅で造作するものが多いとある。李時珍の説に「白銅は雲南で産出する。青銅は南蛮（南方）で産出する」とあり、これは自然のものである。舶来はない、云々。

> 鉱石（あらかね）をまぶ石と呼ぶところがある。一般にはこれを鉛（はく）という。同じ書に次のようにある。

> 銅鉱石。銅（あかがね）の粗金（あらかね）、鉛石（はくいし）。金星があって、紫色の光があるのを紅鉛（べにぱく）という。青い光があるのを蜥蜴鉛（とかげぱく）という。みな上等品である。黄色くて光るのを黄鉛といい、また、菜種鉛（なたねぱく）ともいう。これは品質の劣るものである。色の淡いのを早天鉛（そうてんはく）という。上等品の銅鉱を火にかけて溶かし、採りだした銅からは、銀が多く採れる。品質の劣る銅鉱から採ったものには銀は少しである。銅の長さ二尺半ばかり（『本草綱目啓蒙』では「一尺半許」とある）、幅五六寸（約十五～十八㎝）に平たくしたのを平銅という。『天工開物』で述べられている方長板銅である、云々。

> 鉛の名、石油の名は、その坑道、山ごとに特有のことばがある。この鉱石を砕くことをからむという。そのからむのも、女性たちが金槌で鉱石をうちつつ唄をうたう。これを石から

み節といって、山ごとにうたうのを、人はこの上なくめでながら聞く。

その砕いた石を焼く釜を覆うのを輪屋（わや）という。上舎（うわや）ということかと思ったが、みなその形が両下（まや）おろし（切妻造り）に作っており、両下のようである。これは両下を輪屋と訛っていったのだろう。

この焼き釜に鉱石を入れて三十日ほども焼く。この鉱石を焼く匂いが不快で耐え難く、鉱山などの焼き釜の煙にあたる者は短命であるとのことである。

銅の鉱石を焼くために、その釜ごとに張木といって、たくさんの木を積み、大炭といって炭を大量に入れておき、さらに衣といって、稲わらを覆いかぶせる。衣は稲わらをはじめ、萱、蕨を刈るが、塵塚に捨ててあるもの、特に穢れたものとして、産屋に敷いた藁、また葬式に使って捨てた藁にしろ、莚にしろ、それを衣として覆うと、山々では吉例で、銅がよく産出するという。

その焼き釜の口から入る風を呼ぶのに、さまざまな呼び方がある。その名を何々嵐という。それは惣輪嵐、直嵐、両嵐、鳥足嵐、轡嵐のたぐいである。

また釜の名は数多い。旭釜、大旭、下旭、部月（ふつき）〔歩付である〕、見立釜、彦釜、新釜、重釜（かさね）、五月釜（さつき）、東釜（ひがし）、直有釜（なおり）、二月釜、横釜、新横釜、二つ釜、三月釜、新栄活釜（しんなおり）、古貉釜（ふるむじな）、末広釜、新貉、上荻（うわおぎ）、中荻、正月釜、二十一釜、新重（しんかさね）、幸釜である。この一釜に鉛石を四百八十匁（約一・八kg）ほど入れて焼くというが、はっきりしたことはわからない。

【11】あきたやま

出羽国秋田郡大阿仁荘にある森吉が嶽に、薬師仏の御堂を造営したはじまりは、四十四代元正天皇の御代霊亀二〔丙辰〕年四月八日で、神事も同じ御代にはじまったとのことである。また、十二天を祀った麓の寺がある。森吉山竜王寺という。

さて、六代の御代を経て五十一代平城天皇の御代、男鹿の島にあやしい鬼が籠っていて、人々を悩ませたので、人々はみな憂い、このことを朝廷に訴え申し上げた。それで大同〔丙戌〕年の春の頃、坂上大宿祢田村麿を大将軍として、籠っていた鬼を討ち平らげた。

その帰りに境というところで野営なさると、出羽陸奥の国境に、高清水といって、高さ十四丈（約四十二m）の落ちる滝があった。そのあたりは木々が深く枝を垂れていて、昼さえ暗かった。そこに岩倉が嶽といって、大きな岩屋があった。その岩屋の中に、大桑打という者がいて、その身の丈二丈（約六m）、顔が十六面、左右の手も十六本あった。

この大桑打は荒々しい乱暴者で、将軍はこの大桑打に立ち向かうことが容易ではなかった。「自分も他の者もみな、大桑打に討ち取られてしまうだろう。神の助けがなければ無事で帰ることは難しいだろう」と幣をとり、森吉の神にお祈りされたところ、峰から風が立ち、白鷹が一羽、霞を分けて飛び下ってきて、将軍の腕にとまった。またどこからか白馬がいなないてやってきたので、将軍は敬い、畏れ多く思い、額ずいて、この神馬に乗って野山も大きな岩も問題にせず馳せ巡られた。

ちょうどその時に土ぼこりを吹き上げる風が起こって、空が暗くなり、大桑打が岩屋から躍り出てきた。すると、白鷹が離れて大桑打の十六の顔を掴んだ。それで目鼻から血が流れたので、大桑打は十六の顔をうち振り、暴れた。そこに将軍が征矢（そや）をたくさんはなって、大桑打を射殺（いころ）しなさると、白馬は森吉が嶽にかけのぼり、白鷹は黄金色の光を引きながら同じ峰に飛び去った。田村将軍は「化物を討ち平らげたのはこの峰の薬師仏のお力である」と何度も額ずいて、船で帰陣された。

大桑打が持っていた宝の中に「しもんどう」という袋があった。この袋を持っているために、たくさんの配下の者がなびき従ったという。この「しもんどう」の袋は近い世まで常光院が持ち伝えていたが、常光院が別当の時代に寺が火災にあって、「しもんどう」も失われたという。古い時代は栄えた山で、この薬師仏の神田として本藤土佐守殿から稲千刈を寄附された。

そもそもこの森吉山は秋田山と呼ばれた山で、『好忠集』(29)に〈みちのくの秋田の山は秋霧が立つ立野（たちの）の馬も近づいてしまうらしい〉という歌がある。また、この立野は北野という広野で、琴の湖（八郎潟）のあたりにある。今、北野というため、そこに菅原道真をお祀りしている。この立野の牧で、天正の頃まで馬を飼っていた。慶長の頃までも北野の野飼いの馬はいたのだろうか。その頃、梅津家に九八という名馬がいたが、この馬が北野の牧の馬に追われて空を駆けて逃げ帰った物語がある。また、「みちのくの立野」は、津軽では「滝野沢の牧であろう。立野とたきのは似ている」といっていた。

この森吉が嶽に八つの名前がある。白鷹山、白駒山、鹿草が嶽、黒嶽、秋田山、墓（ひき）が嶽、鶴が嶽、万部が嶽という。また、森吉、森芳、盛吉、守義、杜良、杜葭などとも書く。森吉山大権現本地薬師如来、少彦名命をお祀りしている。

白鷹山は前に由緒を記した。そして時として、白い斑模様のある鷹が棲んでいることがあるという。

白駒山の由緒も前に書いた。また、いずこともなく馬がい

ななくのを聞いた人がいる。

鹿草が嶽は、不思議な鹿を猟師が追って見失った物語がある。

黒嶽は、信濃国の黒姫が嶽のように沖から見ると真黒な嶽なので、船路の目印として船人がそう呼んだ。この黒嶽に笠雲がかかれば日和がよく、帯雲があれば必ず雨が降るというのは、富士と同じである。

秋田山は峰に小田の形をしたところがある。また、稲草といって、稲に似た草が生えて実がなる。やはり前に記している。

蟇が嶽は、山頂がヒキガエルに似ているというのでそう呼び、また、春日大社の鹿、生島の亀、山王山（比叡山）の猿、稲荷神社の狐、白鳥神社の白鳥（くぐい）〔鵠ではない〕の類で、神の使いなので、ヒキガエルが通り過ぎるのを追っても神の祟りがあるという。

鶴が嶽は、春三月の末から四月のはじめ、比内の方からこの山を見れば、鶴が舞う形に雪が消え残る。雪と枯れた草木の色こそ違うが、その形は富士の鶴柴に似ている。

万部が嶽のまぶとは、いちだんと積もった雪が落ちてくるのは怖いものだが、それをまぶともいう。また、鉱山の精錬していない鉱石をまぶいしという。さらに、世を渡る商人のことばで、なんであれよいことをまぶという。

さらに『幽斎道之記（ゆうさいみちのき）』(30)に次のようにある。

二十九日、石見の大浦というところに泊まって、あくる朝、仁間という港まで行くと、「石見の海は波が荒い」という古事にたがわず云々。それからそのまま銀山に向かって越え、山吹という城が村里の上にあるのを見て詠んだ歌。〈城の名ももっともであろうか。まぶから掘る銀を山吹にして（山吹には金貨の意味と、鉱物を種類ごとに吹き分ける意味がある）〉云々。

まぶということがもっぱらいわれている。これは石見国の銀山であるが、この出羽国秋田の阿仁銀山もまた、まぶが嶽の麓にある。

前嶽はもろみ台、またもろみ山ともいう。『古今和歌六帖』(31)に〈岩屋戸に根が伸びているむろの木は、見慣れれば、昔親しかったひとと対面するかのようだ〉という歌がある。もろみは樫檜（むろひ）であってむろのきの類である。むろのきには二種類ある。その木はとても大きく、臼になるものがある。

この山に生えるのはみな大むろのきで、もろみといって、楡（にれ）・樅（もみ）の形をしている。山を詣でる人が、一本の枝を山のみやげに折ってきて、毎朝清めの火としてこのもろみの葉をむしり取って燃やし、身に煙をくゆらせて家を清めるのは、二

見の磯の清め草(32)で家を清め、身も清くなるようなものである。

もう一種類のむろのきは、浜に生えていれば浜松というところがある。また、鼠(ねず)さしともいい、べほうというところもある。さらに、白檀という木に木目が似ているので倭白檀というところもある。

むろのきの名所は備後国の鞆の浦といわれている。〈浦風に吹かれてしおれても磯山に葉を変えないむろは、つれない様子である〉為家卿の歌である。この歌も、浜松、鼠さし、べほうの木のことであろう。

また、盆山石の上に折って挿し木として植えて味わい楽しむ。ひむろという小さな木の葉も、ひじょうに柔らかなものがある。鼠さしの形をしていて、小さなむろの木という意味で、ひむろ(姫むろ)の名があるのだろう。

向嶽は大山祇神でいらっしゃる。本地は阿弥陀如来、薬師仏、観世音菩薩、この三柱であると申し上げている。山はみな、白松(しろもの)という、別の嶽では氷松という木(ゴヨウマツ)の五葉の枝が茂り、絡まりあって垂れていて、岩の峰や深い谷を塞ぎ覆っている。その松を踏みしだいて行くことを「松わたり」という。

こうした高く大きい山には山鬼が棲んでいるといって、人はみな畏れている。後嶽の岩堂といって、とても大きな立石があり、そのそばに森吉の御神がいらっしゃる。また、この岩の上に溜まり水がある。中国でいう半天河水(33)の類だろうか。この水を紙にひたし、あるいは手のひらのくぼみに入れて、目を洗う人がいる。山には色々な薬草が生えている。その中に菊葉黄連(キンポウゲ科の多年草)がある。

この山の別当であり、今は本城(ほんじょう)の村にいる和光院(正しくは和乗院)の先祖は、板垣河内守某であるという。末社の神は三ノ又の稲荷神社、同じく石神で、これを三ノ又の権現石ともいう。また、狭岐(さまた)(様田)神社と申し上げる神社がある。それは群杉山の神社で、森吉山の神の遥拝所である。この群杉山はもろみ山の麓で、佐又(様田)村、あまつば村〔今は天津葉(天津場)という〕に近い。

群杉山に森吉山竜王寺という天台宗の寺の跡がある。この寺は、もとは森吉村の今地蔵岱というところにあったのを、中世にここへほんの少しの間、遷したけれども、それもすぐ壊れてなくなったという。本当の竜王寺の古跡の正しい場所は、その森吉村にある地蔵岱だろう。

また、群杉山の中ほどに、産土杉(うぶすな)であるというとても大きく神聖な杉があり、年を経て立っていたが、麓の者がこの神杉を伐って帆柱とし、高い値で売ろうとした。五六人集まっ

て、ようやくこの杉を伐り、杉が倒れた時、木の根元からさっと血煙が立った。その者たちは斧を投げて体を震わせ、恐れおののいて、悪性の流行病になって死んだ。その者たちの親族もすべて流行病になって、残らず亡くなり、今は絶えてしまっている。寛政の頃だという。おそろしいことである。

昔は東堂群杉といって、二村あったところともいうので、そこに住んでいた昔の人がお祀りして産土杉といったのだろう。伐った時、しきたりの杣祭をして、根本と枝葉を山の神に献上した。そのお供えの杉（枝葉）が切り口に生長して、四尺（約一二一㎝）くらいに枝葉が繁っていた。昔の人はこういうことを理解していて、今も猟師やきこりが枝の末を切株に折り挿すのだろう。「とぶさたて」と古い歌に詠まれているのはこのことをいっているのである。『万葉集』三〔譬喩歌満誓〕〈鳥総（とぶさ）を立てて足柄山で船材を伐り〉云々。同じく十七巻〔家持卿旋頭歌〕〈鳥総を立てて船材を伐り出すという〉云々。宮木や船材などを伐り出して、その枝の末を切株の辺りに立て、山神を祭ることを「とぶさたて」という由縁である。『後拾遺集』〔詞書があって祭主輔親〕〈私が思っている都の花のような女性、そのとぶさ（枝先・下女の意）が恋しくて、私に仕えるお前（従者のこと）も心穏やかではないだろう〉。これらでわかる。

足柄山は相模国にある。『応神紀』（日本書紀）〔三十一年条下〕に「官船の枯野と名付けたのは伊豆国から奉ったものである云々」とあり、『万葉集』十四〔相模歌〕〈百つ島足柄山の杉材で造った小舟、云々〉とある。

『万葉集略解』[34]〔三下〕に次のようにある。

「とぶさたて／あしがらやまにふなききり／きにきりゆきつ／あたらふなぎを」〈とぶさを立てて足柄山で船材を伐り、木として伐って行ってしまった。もったいない船材を〉「とぶさたて」は枕詞である。「あしがら」は相模国足柄郡である。万葉集の中で「足柄小舟（あしがらおぶね）」などと詠んで、もっぱらこの山から船材を伐り出したとわかる。古い時代の訓で「樹尓伐帰都」に「きにきりよせつ」とあるが、宣長は次のようにいっている。

「帰は万葉集の中ではゆくとのみ訓むのがならいである。さて、四の句の『きにきりゆきつ』は、『船木（船材）に』というべきところを、上の句にあるのでそこに譲り、船という言葉を省略している。もったいない船材を、よそへ船材として伐って行ってしまったといっている」。

自分のものだと思い慕っていた女性を、他人に取られてしまったので、惜しんで嘆いている気持ちをたとえてい

る、云々。

私がこれを考えるに、足柄山に合わせて船木をもっぱら詠んでいるのは、船足を軽くして無事であることを祝う言葉からきているのであろう。枯野（かろの）というのも軽乗（かるのり）の省略したものであろう。また、「あしがらおぶね」も足軽（あしから）小舟の意味であろう。

さらに思うに、宣長翁の説ではあるけれども「『きにきりゆきつ』は、『船木（船材）に』というべきところを、上の句にあるのでそこに譲り、船という言葉を省略している」云々といっているが、「きにきりゆきつ」は「伐りに伐りに」という重ね詞（ことば）であろう。重ね詞として見れば、意味も穏当に理解できるようである。

さて、森吉山の古い別当というのは森吉村に中世までいて、その家には古い調度や古い記録もあったという話である。

【12】ひめがたけ

同じ阿仁の金倉川の向こうに姫が嶽という岩山がある。昔、尖り矢(35)を脇に抱え持ち、狩人を一人連れ、この麓で猟をしながら歩く猟師の男がいた。獲物がまったくいなかったので、高い岩に登って、鹿や熊がいないかと四方を見ると、白く大きな犬が太刀をくわえて木々の茂った中を飛ぶように行くのが見えた。

猟師が弓をひいて準備し、木の中に隠れて矢を放つと、放った矢が犬に当たり、犬は暴れながら倒れた。猟師はその犬の落とした太刀を抜き、犬を刺し殺した。猟師は「これはよい太刀だ。本当に今日一番の獲物だろう。さあ登って見よう。俺に続け」と連れの狩人にいって、道もない険しい山中をやっとのことで分け登ることができた。

どんな仔細があるのだろうと見て回ってうろうろしていると、谷に臨む岩屋があった。その岩屋の中から煙が細く立っていた。猟師があやしんでのぞき見ると、美しい姫がひとり柴をくべていた。姫は突然人が来たのを見て驚き、「あなたたちはどうしてこの奥山へ分け入ってこられたのですか」と尋ねた。

猟師は「自分たちは鹿熊を狩りながら麓にいましたが、太刀をくわえた犬がこの嶺を目指して駆け上ったのであやしく思い、その犬を一矢で射て、落とした太刀でその犬を打ち殺しました。なにかいいことがあるのだろうと思って、この嶽に分け登ったのです」と答えた。

それを聞いて姫は笑顔になり、「それは本当ですか。私はその犬にもうすぐ命をとられてしまうところでした。その犬

の妻になって三年を過ごしました。ああうれしいことうれしいこと。その犬を射殺しなさったのが本当なら、私は猟師の妻ともなりましょう。お連れください。しかし、女は疑い深いものなので、その犬をお討ちになった太刀ならば、血に濡れて刃こぼれもあるでしょうから、お見せください」といった。

猟師が「なにを疑うことがあるでしょう。それを抜いて見てください」といって姫に太刀を渡すと、この姫は太刀を抜き放ち、涙をはらはらとこぼした。そして姫は「お聞きください。その犬こそ、私が三年連れ添った夫です。夫の仇を討ちます。思い知りなさい」といって、なんの警戒もなく座っていた猟師の喉を、その太刀で刺し貫いた。

連れの狩人は肝をつぶしてかろうじて麓へ逃げ下り、このことを人に語った。人々はこれを聞いて「さあ行って見よう。その姫も連れて来よう」といって、その狩人を先に立ててよじ登り、姫のいた岩屋に入ったが、姫も太刀も見えず、柴は昨日焚き捨てたままで、火も消えていた。前の晩に姫はこの岩屋を出てしまったのか、行方が知れなかったと語り伝えられている。それからこの山を姫が嶽と呼んでいるという。

これは、北山で道に迷って犬を夫とする女のもとで一夜を過ごした『著聞集』(36)の物語に似ている。また、中国にも犬子国といって、先祖が犬であるという物語がある。さらに、『蒙求』(37)の歌に〈なぜ犬に（異性として）打ち解けるのか〉と詠んでいるのもそのことである。そして、アイヌの集落にも先祖は犬を夫としたというところもあったという昔話がある。いずれもこの姫が嶽の物語と同じである。

この姫が嶽に姫が岩屋、また姫が滝といって、風情がある滝がある。山はきわめて高く、水無銀山の方からは釣不動（つるしふどう）という山道を分けて、蛇腹、牛頸戸などという危ない嶺の細道を経て、手繰（たぐり）杉というのにすがって、やっとのことで姫が嶽の薬師に詣でるのである。帰りはイグチナイ（湯口内）という麓にくだる。山道は平坦で危ないところはない。

【13】てむぐたけ

天狗嶽は姫が嶽の南西にあたり、とても木々の深い高山である。この山で、鼓を打つ音が聞こえることがある。それを「天狗の遊び（音楽）」といったことから、やがて山の名になったという。

【14】かつひらやま

同じ阿仁の一ノ又は森吉山の麓で、鉱山（銅山）である。この山に勝平という山がある。また、雄物川の向こう、寺内のあたりにも勝平山がある。さらに山本郡、上岩川の集落に

も勝平村がある。そしてこの一ノ又の坑道にも勝平の名がある。そのほか、異なる場所にも多い名である。

【15】あまきつゆ

ある年の卯月（陰暦四月）頃、朝早く子どもが大勢集まって、梅の葉や梨の葉を舐めて「ああ美味しい。甘露が降った」といっていた。老人が佇んでいて「三日前も降った。また降ったのだろうか」といった。

『本草啓蒙』天水部に次のようにある。

甘露。アマキツユ。別名、仁沢〔名物法言〕教水〔事物紺珠〕神滋〔同上〕天瑞〔同上〕宝露〔群芳譜〕栄露〔同上〕文露〔卓氏藻林〕日膏〔物理小識〕天油〔同上〕(38)。古来から吉祥のしるしとする理由として、『瑞応図記』(39)を引用し、仁政をほめたたえて降るという。

普段はないものなので、『釈名』でも瑞露といっている。我が国にも『日本書紀』『年代記』等に「甘露が降った」という記述が多くあるが、多くは真の甘露ではなく、杜鎬の説の雀餳である。雀餳は、草木がいまにも枯れようとしている時、真髄を急に外に放出するものだという。しかし、枯れようとしている時だけではない。夏、新しい葉が茂り塞いでアブラムシが発生するが、これは草木の病気である。この虫の味が甘いので、必ず多くのアリが来て舐め、そのアブラムシはいよいよ成長してついに羽化して去る。この虫の多いところには、その下の葉に必ず露が多くたまる。この露はとても甘い。この虫の尿なのである。

人がたまたまこの露を舐めれば誤って甘露だといい、めでたいしるしとする。これは雀餳である。甘露ではない。中国にもこの例がある。『漁隠叢話』(40)に詳しく書いている、云々。

仁明天皇の御代、嘉祥の頃、甘露が降ったので、人寿（人の寿命）を助け守る意味で、文徳天皇の御代に年号がかわり、仁寿といった。甘露寺などもそういった由来がある寺の名なのだろうか。

冷泉為久卿が甘露を詠った歌。〈年号の先例にある「人の寿を添えなさい」と告げ知らせる甘い露だろうか〉〈五穀を甘くする（旨くする）人民にたくさんの恵みの露が与えられる〉。

小野氏の話（小野蘭山『本草綱目啓蒙』のこと）を読むと、甘露にも種類があるということか。

【16】銭幣（たから）のものがたり

古い銭を多く持っている旅人がいた。その旅人が「自分は古い銭をたくさん集めているうちに、隆平永宝、常平通宝、富寿神宝という銭を最近手に入れた。中国の銭だろうか。はっきりわかる人がいない。良い書物を手に入れて銭を調べたい」というので、私は次のように答えた。

延暦十五年に隆平永宝という銭の鋳造を、弘仁八年に富寿神宝という銭の鋳造をお命じになったことが『続紀』に書かれている。また、常平通宝は朝鮮国の銭である。大銭があり、大銭に八卦、二十八宿などの文様があって、穴は小さくて丸い。そして、普段用いる銭は真鍮で、その中にも大中小があって、裏面に「戸一」「戸二」「総五」などの文字がある。八卦銭のほかはみなその真鍮の小銭を使用すると書物に書いている。私は『男鹿の寒風』〔山の名である〕という本に常平通宝の図を描いた。それは、脇本の浦に漂着した空の船の中に常平通宝が二百枚ばかりあって、浦人があちこちで拾ったのを見たものである。朝鮮の銭であることはかねてから知っていたので、そのことを浦人に話したところ、それは朝鮮の船であろうといっていた。

旅人はこれを聞いて、大変喜んでいた。

【17】徳治の彫り石

土崎湊の稲見が岡に近い砂山の中に、御塚といって、その宗門の人が祈願をして、いつも七日籠りする庵がある。昔、塚原山見性寺という寺があったところだという。日蓮上人の石像がある。これは船乗りが積んできた石像であろうか。その国の石の趣きである。これはいつの時代に建てられたのかはっきりしない。

砂に半分ほど埋もれていた頃、津軽の修行者が勤行の日々を送っていて、ある夜ここで寝ていると、枕元で一晩中お経を読む声がした。修行者はそれをあやしく思い、夜が明けてこの石像を見て驚いた。何度も額ずき、妙法蓮華経を唱えて「夕べ法華経をお読みになったのはこの石像の菩薩であろうか」と思い、そこで七夜を明かしてお経を読み、題目を唱えた。

それで人々がこの石像のことを知り、堂を建てようと、砂を払いのけてこの石像を見たところ、この石の四面に法華経の題目を記して「徳治二〔丁未〕暦云々」と彫られていた。これは日持上人(41)がここに安置された石像だという。

日持上人は六老僧の一人で、『仏祖統記』(42)に載っている。日持上人は松前にいたり、福山の東の志海苔浜に庵を作り、日蓮上人自作の自像を安置して勤行をしていたが、ほどなく

朝鮮に渡って、今は法華宗の寺があるという。志海苔浜の庵の跡には石碑を建てて、その由緒を記している。その日蓮上人の木像は松前の法華寺にある。

【18】しろおもてむら

久保田にとても近い広面村は、その昔、城面と呼ばれたところである。この村には赤沼、谷内佐渡、樋口、二ツ屋などの枝村がある。

近い世のことであろう、久保田の大町三丁目にいた良孫四郎という人が、この広面の自分の田屋に移り住んだ。今その子孫は良惣右ヱ門という。この家では琉球産の三重箱、また火鉢など古い調度を所蔵している。

【19】をとひめのかんざし

『五雑俎』(43) 物の部に次のようにある。

呉越の孫妃が龍興寺に物を施した。その形は朽ちた木の箸のようだった。寺の僧はこれを宝とは知らなかった。外国人がいて「これは日本では有名で人気のあるかんざしだ」といって、一万二千緡(44)でこれを買った、云々。

これは相模国江ノ島の海で産出する払子貝、またの名を乙女のかんざしというものに似ている。それだろうか。『五雑俎』の説明ぶりは乙女のかんざしによく似ている。

【20】かうろぎばし

秋田の寺内にこうろぎ橋がある。それは昔流れ寄った大きな沈水香(45)を、香木とも知らず、橋に架け渡していたのを、浪速の船乗りが買って持ち去った。それは伽羅という値段が安くない宝で、香炉でだけ焚く木だと聞いて、そのあたりの者たちが香炉木橋と呼んだのが名となった。そこに住んでいる乞食を「こうろぎ」と今ももっぱら呼んでいる。このことは私が書いた『水の面影』という本に詳しく書いている。

また、越の国にこうろぎ橋がある。それは越後国蒲原郡のことで、柏崎にある寺をこうろぎの御坊という。同じ国の頸城郡高田郷の浄土真宗興行寺を浄興寺といい、柏崎の寺はこの寺の掛所(46)の寺である。そもそも高田の寺は、鳥羽院の第二皇子が出家なさってお建てになった御寺で、浄土真宗寺の名のはじめである。その掛所の御坊である柏崎の浄興寺の前に渡してあるのが高麗木橋という橋なので、その寺をこうろぎの御坊というのである。

さらに武蔵国にもこうろぎ橋がある。『江戸砂子温故名跡

誌』(47) 一巻に「神田の真菰淵の近くにその虫が多かったのだろう、こうろぎ橋という名がある。小さな溝の石橋のことをいう。来歴は不明である」とある。こうろぎはコロコロ、またカロカロと鳴くキリギリスをいう。コロコロ、キリキリという名の通りである。

【21】うぶやのひたき

出羽の山本郡の八森、湯沢、浜村、藻浦、立石などで、産婦がいるとその家に看護に行く女性のことを「火焚きに行く」という。それは、一晩中起きていて火を焚くことを指す。

『西遊記』(48) 後編二巻（正しくは後編五巻）の産婦のくだりに次のようにある。

> 徳の島、小琉球の辺りは、みな女性が出産すれば、その産屋の近辺で昼夜火を焚く。十七日間、昼夜絶えず火を焚く。家が裕福な者は何百束も焚くといって、薪を多く焚くのを手柄とする、云々。

山本郡、藻浦、八森の浦々の習わしに少し似ている。

【22】こばかま

同じ国の雄勝郡に赤袴村がある。別の国に大袴村がある。また、秋田郡出川（いでがわ）の辺りに小袴村がある。この小袴はふんどしのことをいうのだろうか。この辺りでふんどしを小袴といい、さらに世間で越中ふんどしと呼ぶものを、無相小袴ともっぱらいっている。ふんどしからいった村名だろうか。このあたりのふざけたことわざで「小袴破れて陰嚢出川（ふぐりいでがわ）」というのがある。

【23】りりむものかたり

佐竹の御家に名馬がいて、渡辺儀兵衛某という人が乗り、文化十一年の春如月（陰暦二月）の頃、久保田を卯の刻（午前六時頃）すぎに出た。いまだところどころ雪が消え残り、ぬかるんだ道は馬から下りて曳いて行ったりして、能代に巳の刻（午前十時頃）についた。そしてその日暮れになって久保田に帰って来た。能代へは往復三十六里（約百四十㎞）の道なので、この馬の名を鯉鱗（りりん）とおつけになったのは、六六魚（りくりくぎょ）（鯉の異名。鯉の鱗の数が三十六枚前後あることから）にちなんでいる。

この馬は元々角館の鍛冶、五郎右ヱ門が買った馬で、はじめは比内で産まれた馬だという。

【24】いしはなむら

陸奥南部の沼久内郷からとても近いところに石花村という村がある。その村に観音がいらっしゃる。この観音の坂の上と坂の下に黒石がある。上にある石は大きさが五尺（約一五〇㎝）と三尺（約九〇㎝）ほどで、下にある石は高い石で大きさも上の石にやや似ている。

その石に粟粒の大きさで薄紅の花が咲く。この花は五月のはじめのころから咲きはじめて、秋の終わりまでも咲いている。十月になると枯れゆくという。ほかの場所にはない花である。それで石花の観音といい、また村の名を石花という。珍しい花である。

【25】あまちこ

同じく南部毛布郡花輪郷の六日町というところの、本家九右衛門の家で、五月から八月まであまちこという酒を売る。甘酒で、日数が経っても発酵がすすんで泡立つことがなく、黴びることがない。人々はこれを舐めて、とても甘いので甜乳酬（あまちこ）と呼ぶ。

昔、旅人が不意に病気になり、九右衛門の家の門の前で倒れ、死にそうになっていた。それを主人が手を取って助け、家に連れてきて、火を焚いて体を温め、薬を飲ませ、粥をすめていたわった。日が経って旅人がここを出立するとき、主人に施しを受けたお礼として、この濃酒（こざけ）（甘酒）を造って売れと教えて去ったという。

今はあまちこ屋も分家して増えたという。

【26】ゆきのやしろ

同じく南部の毛馬内郷に靭（ゆき）明神という神がいらっしゃる。それは靭(49)をお掛けになった鞍馬の神社の類ではいらっしゃらない。古い時代にここを治めた狭名卿大海の先祖が大己貴神（おおなむちのかみ）で、その神の負われた五百箟（いおのり）入の靭（五百の矢竹がおさまる容量の靭）をおさめて祀っているので、靭の宮とも靭の社とも、また靭明神とも申し上げている。さらに八目の鏑（かぶら）(50)、竜頭御弓もおさめられていると言い伝えられている。

この神社の別当は天台宗で、錦木山観音寺である。大化の年に開山した御寺で、また淳和天皇の御世の天長元年、わけあって再建したとのことである。

さらに靭の宮の四方に末社があって、東に少彦名命、西に稲荷大明神、南に荒神素戔嗚命、北に摩利支天社があったが、みな壊れて失われ、今は稲荷神社だけが残っているという。

大同三年の大坊一位という人の家の柱が、穴がたくさんあって六尺あまり残っている。また坂上田村麻呂将軍の書で諸

仏集会陀羅尼経一巻がある。さらに、大きな板金剛（51）の片足がある。これは古い時代、大嘗会（52）のときに用いられた履物であるとして、陸奥紙（53）に包んで秘められている。

別当の子孫を今は不動院祐歓といって、変わらず続いている。古代の錦木山観音寺の縁起がある。それについては別の場所に詳しく書く予定である。

祐歓法印が「大坊一位の家の柱を包んだ布に何か書きなさい」というので、『万葉集』の中の〈尾花を逆さにして屋根を葺き、黒木で作った建物は、いつまでも続くだろう〉という歌を書いた。

【27】あしな沢のほさち

同じく毛馬内の芦名沢というところに、十一面観音菩薩がいらっしゃる。清和天皇の御世、貞観三年辛巳の八月に、円仁大師が金像の十一面菩薩を法華山の堂のそばの岩屋におさめ、三十七日の修行をした。そのとき、円仁大師は〈みちのくをかきわけて行くと芦名寺の繁栄のしるしに法華（仏道の精華）の山があった〉という歌を詠まれたという。

寛永八年八月辛未の秋、金光明寺の住僧、宥鏡法印が草堂を建立した。また百十三代霊元院の御世、貞享元年、この国の太守重信公の御世、芦名沢の桜庭氏が建立した。それは甲斐国南部の郷人、宇多源氏庶流狭崎四郎高綱の末裔であるという。佐々木と今書いているのは当て字であって、元は狭崎である。佐々木は鈴木などに並べていったのだろうかといっている人がいた。

また南部と字音でもっぱらいっているが、それは甲斐国の地名で、南部というべきだった。西行法師の歌に〈雨をしのぐ身延山の垣柴に巣立ちはじめる鶯の声〉と詠まれた身延山も、元々はみなぶであって、身延も南部に通じていて、同じ甲斐国から領主が転封になられた頃から、もとの国の郷の名を姓のように名づけて呼ばれ、みなぶとは言わず、漢音でなんぶとだけ、その場所をいった。そして甲斐国でもみなぶとは言わず、なんぶと言うので、その国から言い方が移ってきたのだろう。

さらに、芦名沢はそもそも足野沢といったところである。また毛馬内というのもアイヌ語である。そのケマはアイヌ語で足、ナイは沢を意味する言葉である。今でいう毛馬内はこの「足の沢」という意味でアイヌが昔言いはじめた名だろう。この沢に足形の岩でもあるにちがいない。

津軽の浦、母衣月もほろつきと言ったところである。ホロは大きいという意味で、ツツキは特に明確なアイヌ語の発音は文字では表現できないことが多い。ツツキとツキのどちら

なのかはっきりしない発音である。これは盃を指している。大盃のことである。沖に舎利母石という大岩がある。それでほろつきというのだろうか。足沢と呼ぶのもそんな理由からであろう。

【28】さゐ川

さい川は犀川と書いて、信濃、出羽、陸奥、遠江、そのほかの国々あちこちでもこの川の名が世に知られている。犀が出現したなどという俗説が、そのあちこちでもっぱらいわれている。

さい川は古い川の名だろうか。『古事記』神武の巻に「イスキヨリヒメの家は、狭井河のほとりにあった」とある。また『以曽農賀美』(54)という本の「さきくさ」の項に「『古事記』神武のくだりにイスキヨリヒメ云々」とあり、その注釈に「その河をさい河といういわれは、その河辺にさゆり草が多くあるので、そのさゆり草の名を取ってさい河と名づけた、というものである。さゆりの元の名はさいという」などと書かれている。

さい川はさゆり川であって、その神の名のヨリヒメはゆり姫であろう。

【29】よこざといふ事

横座とは、その一間のうち、上の方の場所で客人などを座らせる莚である。『文正物語』(55)の、都の偽商人が来るくだりに「文正は横座に座り『亭主関白ということばがあるので』といって」云々とある。

『十訓抄』(56)上の三の十八には次のようにある。

書写山の性空上人は、生身の普賢菩薩にお目にかかりたいと、寝ても覚めても祈り願っておられたところ、ある夜、転経(57)に疲れて、経を握りながら脇息に寄りかかって、しばしまどろんだ夢の中で「生身の普賢菩薩にお目にかかりたいと思うなら、神崎の遊女屋の女主人を見るとよい」とのことを聞いて夢から醒めた。

奇異な思いでそこへ向かい、女主人の家に到着なさると、ちょうど京からの大番役の人々が来ており、酒席で歌い踊っているところだった。女主人は横座にいて鼓を打ち、乱拍子の次第をとり、その歌詞は〈周防の室積の中にあるみたらいに、風は吹かずともさざ波がたつ〉というものだった。

上人は静かな場所にいて祈りを捧げ、つつしみ敬い、横目で見ることもなく見守っていらっしゃった。このとき、

急に普賢菩薩の形が現れ、六つの牙の白象に乗り、眉間の光を放って、僧侶も俗人も、身分が高い者も低い者も、男も女も照らした。そしてなんともいえない趣深い声を出し、〈真実があり浄らな広い海に煩悩や欲望の荒い風は吹かないが、縁に従って悟りの波がたたない時はない〉とおっしゃった。

感涙をおさえがたく、目を開いて見ると、普賢菩薩はまた元の女性の姿になって、周防室積の歌詞を歌った。

【30】のりの月

甲斐国都留郡の人だという、居士衣(58)のようなものを着ていた人に信濃の小豆坂で会って、名を聞いたところすぐには答えず、しばらくして「鼻口亭法月」だといって、さっと立ち、先にいなくなった。未熟な俳諧師が未熟な禅学で和漢ごちゃまぜのでたらめな奴だろうと、人々は休息しながらずっと笑っていた。今思えば、行基僧正(59)の故事を念頭に置いていた人だったのだろう。

『十訓抄』上の三（正しくは四）第四「人が戒めるべき事」のくだりに、次のようにある。

行基菩薩が菅原寺の東南院で御臨終の際、弟子たちに教え戒めてこうおっしゃった。

「ことばの使い方ひとつで身を滅ぼす。人を傷つけることばのために、命を失うことがある。口を鼻のようにして余計なことをいわなければ、間違いを犯すことはない。虎は死んだ後もその皮が珍重され、偉業を成した人は死後もその名を語り継がれる」。

これを書き留めて「かの遺言」と名づけ、今の世に伝えている。

さて、その時次のような歌をお詠みになった。〈仏法の月が末永く照り続ければなあと思ってきたが、夜が更けてしまったのだろう。月が光を隠してしまった〉。そして安らかにお亡くなりになった、云々。

このような意味から、先の都留郡の旅人は「鼻口亭法月」と名をつけたのだろう。

【31】あさひ川

久保田一円では、みなこの旭川の流れだけを汲んでいる。それを仁別川という人がいる。また泉川などという人もいる。その辺りがはっきりしていなかった。

先年、佐竹義和公が那珂通博をお召しになり、「この川に名をつけよ」とおっしゃった。通博はかしこまり、「仁泉」という名を申し上げたところ、義和公は「それは漢詩であればよい名だろう。和歌にはどうだろう」とおっしゃって、それきりになっていた。年を経て私が水源をたずねて「この川は旭川です。その理由は旭嶽から流れ落ちているからです」と通博を通じて申し上げた。

義和公はこれをお聞きになって「おお素晴らしい。旭川とは漢詩にも和歌にもよいだろう。もっとも美しい名だ」とおおいに感嘆され、お誉めくださったのも、今は昔の話のようで、義和公も通博もみなこの世にいらっしゃらないことが残念で悔しい。

ある年の春、私が泉村に行くと、田に水を引くとのことで、旭川の流れをせき止めて、他の流れへ引き入れていた。垣根のもとに紅梅の枝が突き出て咲いているのを見た際に〈旭川が夕日の色も流れに引き入れて、紅の色が深い梅の物陰を流れる水である〉と詠んだ。それを義和公がお聞きになって、この上なくお誉めになったことを人づてに聞いて、もったいなく思った。

この旭川の源のことはあちこちに書いたが、またここにも書く。『花の出羽路』朝日川(60)の巻に次のように書いた(註・以降、章段末まで同書からの引用)。

藤倉の山道を経て仁別という地になった。横長岑を越えると、旭又川が右手にとても早く流れていて、臨む日陰の淵や石の淵などは特に深いだろう。北方の山をまるど沢、びしやく沢という。その麓あたりも過ぎると、道の左手に高い丘があって、大山祇神、また文殊菩薩を同じ形に彫刻した二柱を安置していた。

七曲坂を下り終わると右は東南で、旭又川を隔てて水麻沢というところがある。また、薬師森といって、急に突き出て高くそびえ立つ山に、薬師如来を作って安置している。猫又沢といって、木々が茂った場所がある。昔はここに猫又の大きいのが棲んでいたという話を道案内の老人がしていた。むつち平というところがあり、また束長嶺というところがある。

この山々に並んで蝦夷の住居跡という崖が旭又川の岸に沿っている。昔、蝦夷がそこに立てこもった古跡で、水城などの跡がある。城とはアイヌ語である。『日本書紀』に城と書かれている。城柵は城に音が似ている。古語であろうか。また『倭訓栞』(61)に「さし。『日本書紀』で城をさしと訓読みしているのは朝鮮語である」とある。

さらに、東に軽沢というところが山の奥にあるという。アイヌ語の造沢からそういうのだろう。カルとは、アイヌがな

んであれ物を作ることであって、畠などがある沢を畠沢（カルナイ）という。

佐久沢の流れの小橋を渡って仁別の村についた。元亀・天正の時代は仁別を荷別と書き、また阿仁山を安荷山、仁鮒も荷舟と書いていたという。それを考えると、ニベツもアイヌ語である。ニは木のことを指し、ベツは川を指す。昔、彼らが住んでいた頃も、良い木材が本当に多く育った山から流れてくるので、木川（ニベツ）ともっぱらいいはじめた名であろう。木川（ニベツ）はアイヌが日常使うことばである。

ここの左右に蝦夷柵（えぞのたて）というところが旭川の岸に二か所ほどある。その蝦夷の住居跡を掘ったところ、紐のついた鏡や陶器の皿などが出土したことがあると、案内人が語った。私が去年の秋、大蛇峯（おろちやま）（太平山）に登った時、山のたおり(62)のようなところに神の鳥居樹というのが二本並んで立っている中を行くというので、「これは何の木でしょう」と人に尋ねると「たつちらです」と答えがあった。これはどんな木なのか、不思議な名だと思った。

この木は樺（カバ）という木で、松前の島をはじめ、陸奥国でかばといい、信濃路、木曽路などではしらかんばといい、この木の皮で紙のようにへぎ(63)、色紙、短冊を作る。アイヌはこの木を樺（カバ）、皮をタツといい、皮を剥いで笠を作り、それをタツ笠という。タツはアイヌ語で、笠は和人の言葉である。アイヌ語と和人の言葉を交ぜていうことが多い。タチとタツは似ていて、アイヌ語の名残りだろう。そういうことを考えると、この辺りはみなアイヌが住んでいた場所だと十分にわかった。

この川の水源は太平山の東の麓あたりで、元の大きな谷沢を朝日の沢、また旭又川を親川といって、激しく流れる。南に弟子還（でしがえり）の沢水が流れ、北には赤倉が嶽の沢水、また南にある薬研沢など、沢ごとの水が流れ出て、ひとつに落ち合い、幅が広くなって流れるが、おしなべて名は旭又川といい、また省略して旭川という。

徐々に日も暮れるだろうと、この仁別村に住む知人の大嶋多治兵衛という人の家に泊まった。今日は一日中空が冴えわたり、小雪が降ってとても寒かったので〈花はいつ咲くのだろう。桜のこずえや梅の園に、また霜や雪が夕方凝り固まっている霜の奥山に〉という和歌を詠んだ。

家の人々とともに囲炉裏のもとに並んで座り、語り合って、翌朝はまだ見ていない隅々を分け入って見たいといって床についた。

鶏が鳴き、夜も白々と明けて、人がみな起き出して火を焚いたので、一緒に起きて出て、体も温まり、手を洗い、食事

を終えた。主人に誘われて蒲の脛まきに雪靴を履いてすっかり身づくろいした。「懸樋（64）の水も思うように進まず、田の表面や小川もみな凍っていた。本当に夜中は寒かった。今はまた冬の心地がする」などと話しながら連れ立って出かけた。

鳴り響きながら流れる旭川の、元の大きな谷沢である金花山という山の中ほどに、八幡宮が祀られている。旭川はその麓の山田の岸を西に流れている。また戸沢という山川は、北東の隅から巡り出て流れ、この元の谷沢に落ちて合流している。仁別川は北東から出て南西に向かって流れ流れて、襷平というところが両方の流れの合流地点になっている。

村は二つの川の中の寄り合う険しい岨で、小高い丘であるにも関わらず、家がひしひしと建ち並んでいる。山の奥の奥である里であるが、平穏で豊かであり、生業も十分あり、家を建てている。男も女もみな身には藤の白布の衣服に、また出立あるいは田耕衣ともいう同じ藤の白袴を着けている。木こりや柴刈、炭焼き、山の田を作るにも、粗末な衣服を着た人や、破れて貧乏くさい裾をまくりあげた人をまったく見かけない。こうした山仕事の人の素の藤衣を見て、世の古い時代の風習がしのばれた。

この仁別川に丸木の長い橋を二つだけ掛けて、里人がいつも往来していた。この橋を渡って向村というところに着いた。向かい合うこの山かげに、長滝といって、とても風情のある滝がある。「ご覧ください、お見せしましょう」といって、他の人も加わって、家の坂から粟畠というところによじ登った。昔作った粟畑の跡であろうか。今は半ば田になっている。

尺沢という場所を左手に見ながら、朝霜を払い、雪を踏み、氷を渡って、山道を上り下りしたり、崖道を通ったりした。谷底に音がして、金壺滝というのがとても低い場所で落ちて流れていた。この尺沢は、まさに桜沢である。作沢、小作沢などとも訛っていうとのことである。

進みながらふりあおぐと、北西の方角に、鬼が倉というたいそう険しい場所があり、頂上に近いところに岩屋があった。また、そのあたりを松倉といって、年を経た松が千本ほども枝を垂れて群れ立っていた。この頂は新城の荘にある湯香派の不動の滝の水源で、そこに深さどのくらいかはかり知れない、峰の大池というのがあった。今は水が涸れに涸れて水深は深くないが、つねに水は絶えない。この池の水も山々のしずくと一緒になって落ちて、ひじょうに高い岩嶺から南東に向き、白絹一束を山から吹く風になびかせるように、なるほど長滝という名の通り、とても長々と落ちている。その様子は、男鹿の嶋山の糸滝を見たときと変わらない。

「花が咲く季節は風情のあるところだが、まだ見どころもない。そう思ってみたけれども、滝はとても素晴らしい」などと人が言ったので、〈山桜がたくさん花咲く岩嶺から見ると、なかなか滝（長滝）の眺めは楽しい〉という歌を詠んだ。

案内をした家の主の大嶋正家は、〈くり返し春の糸遊(65)は、滝の名と同じ長々しい日も絶えずかかっている〉という歌を詠んだ。「この歌は山賤(66)が斧で削ったままの歌です。鉋をかけてください」と言うので、「私はそのような職人ではありません。よい鉋もありません」と言ったが、「この鉋を使って」と言って短い筆を探り出して促すので、断り切れずに「長々しい日も絶えずかかっている」とあった「絶えず」を削って「飽きずに」と書いた。どうであろうか。

この桜沢にはまた、断髪が沢という、あやしいものが棲む小沢があるという。さらに、お月の樋戸というところがある。昔、月山の御神を遷してお祀りしたところではないかという。

その帰り、再び粟畠の平に出て立ち休んでいると、北西の方に戸沢という、木々がとても深く茂った険しい山があった。そこには戸沢桂之介某という武士が住んでいたとのことで、その家の跡があると話していた。東北の方角に、籠滝山と葡萄嶽との間から、馬場嶽の嶺の雪がきらきらと見えて、寒かった。南南東にあたる水麻沢山、蝦夷屋敷、また西南西の方角と思われる八田山の羽黒森などが眺められた。

家の沢というところに下りた。昔、大嶋四郎兵衛某という人が、騒乱の世を遁れてここに隠れた跡があるので、家の沢の名があるのである。その末裔で、新右衛門という人の家が別の場所にあるという。

この村にも蝦夷館という跡がある。そこには大工五郎七が住んでいる。大神宮（神明社）の神杉が深く、神社の階段が高く見えた。五月十六日には祭りを行うという。

この御前を過ぎて、椀砕という坂の中に立って、仁別川の流れに臨むと、五輪淵というのがあった。そこは誰が亡くなった跡のしるしであろうか。鳩岩というのがあった。また立石といって、越後の浦にある根屋の鉾立(67)の形をした高さ二丈（約六m）ほどの大岩の上に、木々が生えて立っていて、蔓がからみついて水の中に立っていたのが変わって見えた。

北に寺沢といって、大披山のこちら側に、普帝山斎勝寺という天台宗の古寺があった跡がある。その寺は祖神〔道祖神を省略していったのを訛ってソウセンなどという〕の杜のこちら側に遷して、十王堂ともっぱら呼んでいて、円仁大師の作として中位の阿弥陀仏を安置し、さらに何柱ともなく阿弥陀仏も安置していた。今は十王堂を庵と呼び、布帝山斎勝庵と呼ぶ。今は添川村の湯沢山乗福寺を本寺として曹洞宗とな

ったのは、古い時代の天台宗の名残りであろう。

仁別川を橋で渡ると、何鷹であろう、小さい鷹が飛びゆく方向に百舌が鳴いていた。人が羽の斑模様について言うのを聞いて、〈お前もさぞ百舌の速贄が罪（雀鷹）深いと思うのだろう。兄鷂や雀鷏が競う山里である[68]〉（「はやにへつみ」に仁別を詠みこんでいる）と詠んだ。

大嶋四郎兵衛の末裔である新左衛門の家に着いた。この家は最近の文化の初めの年、落雷で残らず焼けて、先祖から伝わった記録がみな灰となり、焼け残った槍の穂や挟箱[69]の金具、また駿河国の義助が打った刀身が二尺五寸（約七十五㎝）の刀、また近い世のものもまじって享禄三年二月に関兼貞が打った短刀などを取り出して見せた。

この大嶋新左衛門の先祖はどこの国の人かさだかでないが、由利郡荒屋の浦に住んでいた。しかし、敵が追って来たのだろう。夜更けにそこをこっそり出て、柴の渡り（雄物川を渡ること）をしたところ、夜の嵐が激しく、浮いた柴を沈めてしまった。そこで仕方なく佩刀は水に打ち捨て、かろうじて命だけは助かって、人知れずこの仁別の山かげに隠れ住んでいたと言い伝えられている。その三代あとの子孫が紀州の高野山参りをして、自分の先祖の御霊の法号を記したその文書には、応永などの年号があったことを話していた。

また、佐藤作右衛門という家がある。先祖は大和国奈良の人で、その国にいた時は藤波高利といって、三千貫の土地を領有していたと家の記録に記していた。そして佐藤継益を元祖とするその子孫が、天正の昔、ここに落ちてきて隠れ住んだ。その人が己の変遷を記した古い記録の包み紙に「慶長七年四月吉日、与八郎清久」とあった。この家も中世に火災にあい、古い物は伝わっていないという。

皂角子というところに、八幡橋といって、旭川に大橋をかけていた。見渡すと、山路から落ちてくる水で臼をついて精米していた[70]。太平山の精進潔斎[71]はここからするということで、三十三体の観世音を石に彫って作り、登山道の各所に据えているが、この麓を山の入口としている。このことは『月のおろちね』という日記にも去年記した。ここは一番目で、那智山の菩薩を安置している。

さらに、庚申青面金剛童子の祠がある。左に、太平山に行く道がある。右はこがね山（金花山）の八幡神社の杜に行く道がある。その下の方に小さな池がある。その池の中心に八臂の弁財天を石に彫って祀っている。この杜の八幡宮は、佐藤作左衛門の先祖である誉八郎清久が遷してお祀りし、佐藤の家から四月十五日に祭りを行っているという。

旭川のほとりにいて〈何度もこぼれるたび、朝日の川の光

が寄り添う、そんな金の花の山吹の露であることだ〉（「金の花の山吹」に金花山を詠みこんでいる）という歌を詠んだ。同じ宿に泊まった。

二十二日。早朝、村長の佐藤某とともに川の入り組んだところを巡ると、鶯が鳴いた。〈花が咲いたらどんなにのどかな旭川だっただろうか。流れて匂うような鶯の声である〉という歌を詠んだ。

ここの同じ道に帰ってきて、「はたの沢というところに鬼が岩屋というとても風情のあるところがある。さあ一緒に行きましょう。案内いたします」というので、上の山というところから台所というところに出た。

険しい道をたどり、戸沢の古城の跡を見やると、その古城山はとても高く切り立っていて、木々が一段と深く茂り、谷が深く、染滝という滝が落ちていた。その城に戸沢桂之助を討とうと大勢押し寄せた兵たちをたくさん斬り捨て、投げ落としたので、滝の水が血の色になって流れ落ちた。それを見て、騒乱の時代に、染まる滝と呼んだという。

案内の男が、このあたりは紅葉が特によいところだと言った。桜の話をせず、秋好きな男が秋のことを話すのも変な感じで、さながら秋の心地がした。さぞ素晴らしいのだろうと、その秋のこともまたしのばれて、〈山風が吹いてさらっていくので、何度も濃く染まった紅葉が散り、紅に染まっている滝の水であることだ〉と、自然に秋の歌を詠んだのも、また変な感じだった。

この戸沢桂之助は、戸沢上総之助であろうという人もいた。戸沢は戸沢治部少輔藤原盛安（72）などにゆかりの人だろうか。この水上に砺坡平（砺は砥石の意）といって、砥石の出るところがあるという。この砥沢という意味だろうか。戸沢氏もここ（砥沢）からいいはじめたのだろうか。

このあたりに黄金沢というところがある。昔は黄金を掘ったのだろう。佐藤与八郎清八がお祀りしている八幡宮の杜のあたりが金花山などという名であるのも、黄金を掘っていた時からいいはじめた名であろう。

東北東に戸沢の館跡、北東に白子山といって、まことに白々と雪の残った山がある。南南東の方角に潜岩などがあり、染滝は南に向いて落ち、この水は南東の方にある鴨の坡という杉山の麓で旭川に落ち流れている。

ここを出ると団子長峯というところがある。この団子（長峯）というのは、丹子という女が身を投げたところだという。朴木坂を下って、道すがら立場というのがある。馬場目の山を越え、人足がひとりで荷物をかつぎ、四十貫（一五〇kg）を超える重い炭俵を背負って、とても高い山を何度も何度も

越えてきて、ここで休憩し、一晩寝た。そのために建てた炭小屋だということで、二戸だけ並んでいた。

北北東の方角に山伏森山、北の方角に仁別沢、また蹈鞴山、東南東に大滝沢というところがある。この奥山から馬場目の沢にある打空、また北の股などというところの険しい山里もとても近いという。

山の神沢というところに来ると、大山祇の神社があった。鳥居が二つだけ並び立っているところに、逆茂木(73)の木の枝をところ狭しと引っ掛けていた。これは猟師や木こりなどが人知れず、柴を刈る乙女たちを恋い慕って、こうした小柴の鍵を神の鳥居、あるいは木の枝にも引っ掛ける。これを鍵掛、または神懸ともいって、出羽、陸奥に、この手向けの坂があちこちにある。

あるいは、峠を越えたことに対して幣を手向けるという意味だろうか。〈手向けには私の粗末な着物の袖も切って捧げるべきでしょうが〉と素性法師(74)が詠んでいるが、心をこめたまことの志を神もお聞き入れになるのだろう。この猟師や木こりたちの逆茂木の枝の手向けも、みな同じようなものだろう。

ここを下って仁別川を渡った。大倉山というのが北西の方向に見えた。また、霜胯山などの谷々の水が合流して鳴り響き、その谷川に温泉も流れて混じっていた。駒の頭というとても高い山に、雪が白々といまだに降っていた。左に例の山伏森があった。

この麓には小滝というのが落ちて仁別川の岸にかかっている。また二蓋滝というのがあり、さらに板曳場というところに滝がある。みな趣深く落ちていた。がらという山道を行くと、道の左手の方に舟沢の滝といって、これも特に風情のある様子で落ちていた。

同じ仁別川の十六の淵瀬を行くために、数もわからないくらい柴橋、丸木橋、桟道、崖道を通った。「ああ、疲れた」といって休憩していると、シイタケを採る山仕事の人がさしかかって「どこに行かれる人ですか」というので、しかじかと答えると、「はたの沢の奥は、今年はいつもより雪が深く、今日は日差しで緩んでいます。ことさらぬかるんで、鬼が岩屋のあたりへは、山仕事の者ですら、かんじきを履いても深雪にはまって往き来が出来ません。もしそこを強いてごらんになりたいとすれば、暗いうちに出発して雪が凍った時、朝早く分け入った方がいいですよ」などと言うので、仕方なく止めることにした。

銚子の滝の水源で、伐り出した木材を流すといって、つつみというものを築いている。それに矢来(75)を作り、水を留

めて、さっと切りはなてば、どんな木材でもたちまち里に流れ出るという方法である。〈何度木材の障害が来ただろう〉と詠み、また杣下（そまくだ）しというのもこのことであるという。

そのあたりの近くに一枚平（いちまいひら）といって、高さがはかり知れない岩の嶺の雪に、鶯がさえずっていた。〈お前（鶯）もやって来て、花かと迷うような、消えきれずに残っている雪。そんな雪の高嶺に鶯がさえずっている〉という歌を詠んだ。

この帰り、同じ山道を少しの間来て、朴木坂から下り、西を目指して仁別川を渡り、道すがら、木滝の淵というのがあった。昔ここに杣小屋を建てて、つつみを作り、水を湛えて、木材を伐って集め、流したことからついた名だということである。

山かげに渋民というところがあった。しぶたみは渋溜まりであって、水渋（みしぶ）(76)からいいはじめた名だろうか。陸奥でもあちこちで聞く名である。また、大谷地といって、その昔は大きな池のあった跡だというあたりを過ぎると、鳥越山（とりごえやま）という山がある。鳥越は通り越えであって、古い時代に往き来した古道の跡だろうという。

山葵沢（せんのさわ）（漢字とふりがなの関連不明）などを見ながら行くと、西北西に大披山、また西の方には普帝山斎勝寺があった寺の沢という場所も見ながら過ぎて、仁別川を深い谷の底を見るように臨んだ。山葵沢の滝という、ささやかな滝ながらとても風情のある滝の頭というところを踏み越えて、分け入った谷かげに鶯が鳴いていた。〈暮れてゆく春をも知らずに、深山路はまた谷深く、鶯の声がしている〉という歌を詠んだ。

五輪淵、鳩岩の淵、立石の淵などを再び見つつ、こちらの高岡にかろうじてよじ登り、両大神宮（神明社）に幣も捧げなかった。旭川の向こうにいらっしゃるこがね山の八幡宮もよそに、押田台、長坂、越後落、山の神沢、高経来（たかへくり）、平石、杉沢、倉の沢、小荒沢、大荒沢、真砂子沢、吐出（はきだし）、大両胯（おおふたまた）、大揚台（おおあげだい）、弟子還淵と来て、さらに太平山の御坂になり、みたらしの池、垢離清水、空滝坂と進んだ。

また、から滝のあたりに姫胡蝶花という草が多かった。これを方言であやめというので、そこをあやめ坂ともいう。柳田の沢というところがあった。荒沢の水をさかのぼると、堂が沢というところがあり、大きな石の表面に祠の形を彫り、本当に苔むしたものがあった。これはその昔の太平山の奥の院でありながら、今はそこだと知っている人もおらず、また最近は木々が深く茂って、木こりや猟師すら分け入って見た人はまれであるという。

旭又の源には鶏鳴沢といって、夜更けに鶏の声がするところがあるなどと案内の者が語っていた。この深山幽谷で鶏が

鳴くというのはあちこちにある。中国にもあるのだろうか。『武家俗説弁』(77)という本に書いている。山に、竹鶏(てっけい)、雷の鳥(78)などというのがいる。その鳥などの声だろうか。その声はみな小さな鶏が鳴くような声である。おおよそ三声ずつ鳴く。自分も聞いたことがある。このことも『月のおろちね』の中で十分に書いたので、ここには詳しく書かない。

註

(1) **藤塚式部知章**　藤塚知明(ふじつかともあき)。江戸時代中期の学者で、塩竈神社の神官。復古神道をとなえ、神道専門図書館を作った。

(2) **軽の墓**　阿波国とあるが、正しくは河内国古市郡の軽墓村のことと思われる。同地区にある白鳥陵古墳が木梨軽皇子の墓であるという認識からきた地名という説がある。

(3) **うとう考**　未発見本。

(4) **小山判官**　小山隆政。室町時代の武将で、蝦夷地に渡ってアイヌと戦い、その怖ろしさから、アイヌがカムイ(神)として怖れたという伝説がある。

(5) **斑竹**　幹に斑紋のある竹。

(6) **和漢三才図会**　江戸時代の図入り百科事典。寺島良安著。

(7) **床縁**　床の間の前端の化粧横木。

(8) **唐木**　もとは中国を経て渡来したという、紫檀・黒檀・白檀などの熱帯産の木材。

(9) **譚海**　江戸後期の随筆。津村正恭著。

(10) **舎利石**　瑪瑙。仏舎利の代用品となった。

(11) **舎利母石**　輝石安山岩。これが風化すると、中に含まれていた舎利石(瑪瑙)が分離する。

(12) **石弩**　大型のはじき弓。ここでは石鏃(せきぞく)(石の鏃(やじり))のことを指している。

(13) **三代実録**　六国史の一つ『日本三代実録』。清和・陽成・光孝三天皇の時代の事を記した編年体の史書。

(14) **本草綱目啓蒙**　明の李時珍著『本草綱目』をもとにした、江戸後期の本草書。小野蘭山著。

(15) **天工開物**　中国明代の産業技術書。宋応星著。

(16) **玫瑰**　中国でとれる美石。雲母などの類。

(17) **坑井**　鉱山で、鉱石の揚げ下ろしや通気のために設けられた小さな縦坑。

(18) **典籍便覧**　中国明代の書。范泓編纂。

(19) **輟耕録**　中国元末の随筆。陶宗儀著。

(20) **葡萄石**　鉱物の一種。アルミニウムとカルシウムから

なる。

(21) **物理小識**　中国明末・清初の学者、方以智著の百科全書。

(22) **石榴石**　ガーネット。ケイ酸塩鉱物。

(23) **集解**　李時珍著『本草綱目』の記述の中で本草の産地や形態などを記した項目。

(24) **緒締め**　袋・巾着・印籠などの緒を通して口を締めるもの。

(25) **粗玉**　掘り出したままでまだ磨きをかけていない玉。

(26) **煮酒色**　煮酒は煮て火入した酒。琥珀色になった。

(27) **練物**　薬物を練り固めてサンゴや宝石に似せたもの。

(28) 割註は出典を示す。『**事物異名録**』は中国清代に編纂された書。『**名物法言**』は中国明代に編纂された字書。『**石薬爾雅**』『**薬譜**』は中国唐代の書。『**郷薬本草**』は朝鮮の本草書で特定の書ではないと考えられる。あるいは李朝初期の医書『郷薬集成方』か。

(29) **好忠集**　平安中期の歌人、曾禰好忠の歌集。『曾丹集』ともいう。

(30) **幽斎道之記**　『九州道の記』。安土桃山時代の武将・歌人、細川幽斎の道中記。

(31) **古今和歌六帖**　平安中期の私撰集。

(32) **二見の磯の清め草**　伊勢市の二見興玉神社に、祓具やお守りに使う霊草の無垢塩草を刈り取る「藻刈神事」がある。

(33) **半天河水**　高い木の穴、または竹の切株の中に溜まった雨水で、薬用とするもの。

(34) **万葉集略解**　江戸後期の『万葉集』の注釈書。橘千蔭著。

(35) **尖り矢**　大形で先端を鋭く尖らせた鏃をつけた矢。

(36) **著聞集**　『古今著聞集』。鎌倉中期の説話集。橘成季著。

(37) **蒙求**　中国唐の児童用教科書。

(38) 割註は出典。註（28）参照。『**事物紺珠**』『**群芳譜**』『**卓氏藻林**』は中国明代の書。

(39) **瑞応図記**　孫柔之編。祥瑞を見極めるための書。

(40) **漁隠叢話**　中国南宋の詩論書。胡仔編。

(41) **日持上人**　鎌倉中期の日蓮宗の僧侶で、六老僧の一人。

(42) **仏祖統記**　中国南宋の志盤著。天台宗の相承に基づいた仏教史の集大成。

(43) **五雑俎**　中国明代の随筆。謝肇淛著。

(44) **緡**　銭貨の単位でひもに通した一千文の銅銭。

(45) **沈水香**　ジンチョウゲ科の常緑高木。香木として珍重される。

(46) **掛所**　真宗の寺院で、地方に設けられた別院。ここでは高田にある浄興寺の支院をいう。

(47) **江戸砂子温故名跡誌**　江戸中期の江戸の地誌。菊岡沾涼（せんりょう）著。
(48) **西遊記**　江戸後期の紀行。橘南谿著。
(49) **靭**　武具の一つ。細長い箱型で、中に矢をさして背に負う。
(50) **鏑**　狩矢などの矢の先につける空洞のある球形の作り物。
(51) **板金剛**　板草履。
(52) **大嘗会**　天皇が即位の後、初めて行う新嘗の祭。
(53) **陸奥紙**　奥州から産したこうぞを原料とした上質の紙。
(54) **以曽農賀美**　寛政十年刊。空阿著。万葉集の枕詞を考証した書。
(55) **文正物語**『文正草子』。室町時代成立の御伽草子。
(56) **十訓抄**　鎌倉時代中期の説話集。
(57) **転経**　経題と経文の一部を読んで、全巻の読誦にかえること。
(58) **居士衣**　隠遁者、僧侶などが着る衣服。
(59) **行基僧正**　奈良時代の僧。諸国を巡り、民衆教化や池堤設置などの社会事業を行い、行基菩薩と称された。
(60) **朝日川**　未発見本。文化十年の春に旭川の源をたずねて流域の村々を巡った時の日記。
(61) **倭訓栞**　江戸時代の国語辞書。谷川士清（たにかわことすが）著。
(62) **たおり**　山の尾根の低く凹んだ所。
(63) **へぎ**　木材を薄くはいで作った板。
(64) **懸樋**　地上にかけ渡して水を導く樋。
(65) **糸遊**　春の晴れた日に蜘蛛の子が糸に乗じて空を浮遊する現象。
(66) **山賤**　猟師・きこりなど、山中で生活する人。身分が低く、情趣や条理を解さないとされた人。
(67) **根屋の鉾立**　新潟県村上市寝屋にある、海に突き出た巨岩。
(68) **百舌の速贄**は、モズが秋に虫などを捕らえて木の枝に貫いておくもの。ツミはタカ科の鳥。雌雄で大きさや羽色が異なるため、雌を**雀鷹**（つみ）、雄を**雀鷂**（えつさい）と呼んでいた。**兄鷂**はハイタカの雄。
(69) **挟箱**　外出に際し、具足や着替え用の衣服などを中に入れ、棒を通して従者にかつがせた箱。
(70) 水車の動力による精米のことと思われる。
(71) **精進潔斎**　霊山にのぼること。
(72) **戸沢治部少輔藤原盛安**　安土桃山時代の出羽角館の大名。
(73) **逆茂木**　ここでは葉の茂った木の枝を逆さにすること

を指している。

(74) **素性法師**　平安時代中期の歌人。三十六歌仙の一人。

(75) **矢来**　竹や丸太を縦横に粗く組んだ仮の囲い。

(76) **水渋**　水の上に浮かぶ赤黒いかす。水垢。

(77) **武家俗説弁**　享保二年刊。神田白龍子編。武家の間に伝わるさまざまな俗説について述べたもの。

(78) **竹鶏**はキジ科の鳥。**雷の鳥**は雷鳥(ライチョウ)の異名。

【付記】全集において誤りと思われる箇所について、本稿では次のように修正の上、現代語訳している（記事番号・全集の頁と行でその箇所を示した）

【2】128頁7行目　としの名→はしの名。

【3】128頁18行目　戦→我。

【4】129頁7行目　鹿脛纏→麁脛纏。翻刻の誤り。

【9】132頁13行目　鷓鴣丹→鷓鴣丹。翻刻の誤り。

【9】132頁16行目　ほふう→ほふし。

【10】132頁18行目　名薬爾雅→石薬爾雅。

【10】134頁1行目　その名を、はな嵐→その名をば、な(何)嵐。

【11】135頁18行目　しかなひ→しかよひ。

【11】136頁1行目　白亀社→白鳥社。

【11】138頁7行目　きて→さて。

【21】144頁1行目　みな産せし跡にて→みな産すれば。

【27】146頁10行目　鹿流→庶流。翻刻の誤り。

【30】148頁11行目　皮遺言→彼遺言。

【31】149頁10行目　原刻→彫刻。

【31】150頁13行目　大雨湾→大両胯。

【31】151頁1行目　鶏鳴きひま→鶏鳴きてよ。

【31】151頁6行目　よりはぶ→よりあふ。

【31】155頁9行目　こはやりことは→こはたんことは。

※全集の底本が写本であるため、誤りの原因は真澄自身の誤記、引用書の誤り、書写者の誤記、全集の翻刻の誤りなど、さまざまに考えられる。翻刻の誤り以外は原因の特定が難しいため、ここでは翻刻の誤りのみ、その旨明記した。

菅江真澄資料センター所蔵の柳田国男書簡

松山　修

令和七年（二〇二五）は、明治八年（一八七五）七月三十一日生まれである柳田国男の生誕百五十年に当たる。それを記念する出版や記念事業が数多く企画されていることだろう。

筆者は、勉誠社『柳田国男大事典』（二〇二五年八月刊行予定）で、県立博物館在職中から携わってきた「内田武志」「深沢多市」および「赤川菊村」「奈良環之助」の執筆を担当した。特に前者二人については、柳田国男との交流を考える根拠として、菅江真澄資料センターが所蔵する柳田国男書簡をまとめてみることにした。

柳田国男は、昭和初期に発表した真澄関係の論考に、年譜などを加えた『菅江真澄』（昭和十七年、創元選書）を出版したことでも知られる。「明治の末年頃に、始めて故人山方香峰君から真澄遊覧記のことを聞きました」（「秋田県と菅江真澄」）とする柳田は、自身が内閣書記官記録課長になる以前から内閣文庫（現国立公文書館蔵内閣文庫）に親しみ、同文庫にある真澄遊覧記の写本を読んだ。柳田が日本民俗学を形成していく過程で、菅江真澄遊覧記を高く評価したことはよく知られている。

昭和初期に菅江真澄全集とも呼べる『秋田叢書』『秋田叢書別集　菅江真澄集』を刊行した深澤多市、それに、戦後に秋田に移り住み、『菅江真澄遊覧記』（平凡社東洋文庫の現代語訳）や『菅江真澄全集』（未来社）の主たる編者となるなどして真澄研究を発展させた内田武志と柳田との交流は深い。

本稿は、深澤多市と内田武志をはじめとする菅江真澄資料センター所蔵の柳田国男書簡を紹介するものである。

【1】～【10】　内田武志宛て
【11】・【12】　内田ハチ宛て
【13】～【20】　深澤多市宛て
【21】（参考）深澤多市宛て大和田楳之助書簡
【22】　深澤登子宛て
【23】　奈良環之助宛て

凡例

・本稿タイトルにも使った「菅江真澄資料センター」と解説文中にある「秋田県立博物館」とは同義である。

・書簡は書かれた日付を優先し、その場合を「付け」とした。日付がない場合は消印の日付とした。
・書簡内容の理解のため、宛先住所をそのまま掲載する。
・内田武志宛て及び内田ハチ宛て書簡の翻刻については、ハチ自身が翻刻した原稿（第3期内田文庫）を参考にした。
・翻刻では、基本的に新字を用いる。深澤多市については、柳田が「深沢」と表記する場合のみそのまま用いる。
・適宜、句読点を付けた。

（元秋田県立博物館学芸職員）

【1】内田武志宛て（第3期内田文庫：F2―2―1―①）

昭和五年十月十九日付け書簡（封書）
静岡市西草深町七十三　内田武志殿
（封書裏）東京市外砧村　柳田国男

二度目の蒐集二落手、何れも有用の資料に候。さて、「いつかそめたす」のこと。ソメタシは文語又は古語といふものにて久しく我々の会話には使はず、「染屋どの」に向つてさういふ筈は無しと存じ候。東北人がシをスと語ることは誰でも知つてをり申候。わざ〳〵御注意には及ばず。ヲサメを末女の意に使ふ実例あらば近世の変化としておもしろきも、ヲサは「長」の字の日本語かと解せられをり候。かやうな論弁は今後返答いたさず候に付、言ひ勝ちたりと思はぬやうにせられ度候。十月十九日　内田君　柳田
将来は成るべく読書と考察の方へ心を傾けたまふべく候。

【解説】内田武志は民俗学を志してから、本名の「武」を筆名の「武志」に変えた。そして初めに取り組んだのが、生まれ故郷である鹿角地方の方言や童謡、昔話などを民俗学雑誌に発表することであった。その一つの結実が、昭和十一年（一九三六）九月発行の『鹿角方言集』（言語誌叢刊）になるが、昭和八年二月二十一日付けですでに自序が書かれている。本書簡からは、昭和五年の時点で柳田国男に原稿を見てもらっていたことが知られる。柳田国男が本書簡で指摘した「ソメタシ」「ヲサメ」は、結局、刊行本での掲出は見送られた。

【2】内田武志宛て（第3期内田文庫：F2―3―1―①）

昭和六年八月十九日付け書簡（封書）
静岡市西草深町七十二　内田武志殿　侍史
（封書裏）東京市外砧村　柳田国男

貴稿「鹿角方言」は先日来広島の東條氏に一見を乞居り候処、送り返し来り候に付、其書翰を共に一度御覧に入れ申候。此は非常な労作にて単に語数の多きのみならず我々にも新しく

又珍しき知識、殊に民俗語彙の多きを感謝いたし候。目下御郷里の教育者団にても折角蒐集し居るよしなれども、もう是だけあれば其には関係無く公表しても可なりと存じ候が、たゞもし貴君にその根気あらばもつと完全なるものとし後悔無きものといたし度候。就ては東條君の意見を御参考とせられ候他に尚二三小生の心付きを申すべく候。

一、特殊なる方言と、一定の法則に由つて現はるる訛音とを一列にならべることは重要なる言葉の印象を薄くし、且不必要に分量を多くするが、この中にて単に発音のやゝ特異だといふのみのものは別に掲げ分類し、且つ例示せらるゝが便と存じ候。「秋田方言」は訛音を別にしながら、又之を方言表に列記し、たゞ徒らに語数の多きをよろこぶ嫌有之候。乱雑な五十音順は値少なく候。

二、解釈の文字に若干の改良の余地あり。あるものは精確ならず、或ものはやゝ余分の文字あり、文字にも我々に解しかぬるもの少し見え申候。

三、ヲ°といふ新字は趣旨もわかり必要も御同意ながら、活字版にて之を要求すると、その一点にても大なる故障を生じ候。字母を新たに作ることは大層なり。木字にすると非常に見にくゝ候。殊に人によりては是に賛成せぬ人もあるべく、第一他日此書を引用せんとする者が此字が無い為にいつも苦しみ可申候。何とか今ある活字にて間に合せる工夫をなされては如何。是は総論的に訛音の法則を説明さへしておけば、各条にこんな手数をかけるにも及ぶまじき事と存候。符号は多人数の承認を条件とし、貴君はまだ若い人なれば是を人に押付けるやうに見えてはまづく候。

但し此等は此集をもつと改良せんといふ時に参考とし給ふべきものにて、是だけでも相応の価値あることは小生も之を認め申候。尚蒲原先生ともよく相談し給ふべく候。二三抜刷此序に御目にかけ候。八月十九日夜　柳田国男　内田武志殿

【解説】　内田武志著『鹿角方言集』は、昭和十一年九月に言語誌叢刊の一冊として刀江書院から発行された。本書簡からは、昭和六年八月以前にあらかたの原稿ができていて、それが柳田国男から東條操（方言に詳しい国語学者）に送られて意見を求められたことがわかる。東條から柳田への返書の内容を含めて、配慮すべき点を指摘している。「三」に述べる新字とは、片仮名の「エ」と「ア」を上下に重ねてそれをつぶした字のことで、発音は「æ」に近いものとしている。柳田からの指摘ではあったが、刊行本ではそのまま使われている。なお、東條操の序文と内田武志の自序はともに昭和八年に書かれているから、その年には完成稿ができていたことになる。

「蒲原先生」とは静岡市に住んでいた詩人の蒲原有明を指す。内田武志に民俗学に進むよう助言をし、柳田国男を紹介した人物である。

【3】内田武志宛て（第3期内田文庫：F2―3―1―②）

昭和六年十二月十四日付け書簡（封書）

静岡市西草深町七十二　内田武志殿　親展

（封書裏）東京市外砧村　柳田国男

先日御話を致し候長門俵山の温泉はどうも貴兄の病気にはきくらしく考へ申候。五十円だけ金を御用立可申に付、一度試みに療治なされては如何。此金は南鹿角郡方言集が公にせられた時、多分君の手に入るべき金なれば、自分のものゝ気で使つて差支なく候。往復に二十五円、残りで十日位は居られ申候。十日も居て少しも結果が無ければ帰つて来てもよく、いよ〳〵効ありとわかれば、後二十日位の金はどうともなり可申候。仮に全く無だであつても、新しい風土を見、事物に接し且つ静かに原稿を整理すれば、それだけは獲物に可有之、幸ひによくなれば今のやうに気ぜはしなく勉強する必要も無く、快活悠長に学問に一生を捧げることも可能なるべく候。仍て親たちとも相談し、且つ風など引かぬやうに十分用心しつゝ、春にもなつたら行つて見ては如何に哉。但し湯はやゝぬるく候が、気候は南だけにひどく寒からず、或は梅などの咲く頃になつてからでもよし。俵山郵便局長の藤井氏は立派な人にて自分も古風な旅館を経営す。いよ〳〵行くことにならば、此人に小生よりよく頼み世話してもらひ可申候。十二月十四日　柳田国男　内田君

【解説】柳田国男は、内田武志が患っていた血友病の療養のために俵山温泉（現山口県長門市）に行くよう勧めており、費用はいずれ出版される『鹿角方言集』の原稿料を充てるとしている。しかし、この提案は実現することはなかった。妹ハチが書き残すには、「お断りしようと上京し親類の家に着いた夜、出血がおこった。武（武志の本名）に代りにハチが柳田邸をお訪ねし、兄の病症と御辞退の理由を申し上げると、…「けふのせばのの」が収められた『南部叢書』第六巻を貸してくれた」（内田ハチ「菅江真澄への歩み」の一部を要約）としている。

【4】内田武志宛て（第3期内田文庫：F3―5―2）

昭和八年九月五日付け書簡（封書）

静岡市西草深町七十二　内田武志殿　侍史

（封書裏）東京市外砧村　柳田国男

本日旅行よりかへり先月二十二日の御手紙を拝見しました。

御令兄長逝の悲報には深く胸を拊ち嗟歎して居ります。御両親の御歎き御同情に堪へません。君は早く丈夫になつて御一同を安心させなければならぬ。方言集はいつもの通り四冊一緒に出す計画なのに、その一つがどうしても出来ず、それでおくれて居るのです。又君の単語集は東條君始一同拝見して刊行を賛成したが、御令兄の著は誰も見て居らぬ故、それで合載を私が拒んだのです。後藤君の意見ではありません故に、是を一所に出さうといふならば、十分に整理して東條君等の批評を求めるが順序です。それが出来なければ、後藤君より原稿を取戻し文章を訂正したらよいでしよう。我々の責任で世の中へ送る書物だから、内容が本として遺すに足るか否かを吟味しなければならぬ。私情に動かされて何でも出すといふことは出来ません。「旅と伝説」に出て居る墓地の地名は誤つて居る。あれはあの地名のある所に新たに墓地を設けたのだから埋葬と関係のある筈は無い。中村協平君も死なれたときいて、逢つて見ない人だが惜くてたまりません。若い人の死ぬのは誠に淋しい。九月五日　柳田国男　内田武志君

【解説】 昭和八年八月十日に兄の寛が逝去した。武志が鹿角方言をまとめるに当たって兄の力添えもあったことから、八月二十二日付け柳田宛書簡で、『鹿角方言集』に寛の遺稿である「音韻篇」「語法篇」を入れてくれるよう懇願した。それに対して、柳田は、責任を持って出す書物だから、東條操に見せるなどの手順を踏むように諭している。結局、兄の原稿は『鹿角方言集』に合載されることはなかったが、同書追記に、兄と同日に亡くなった中村協平（静岡住の民俗学研究者）への謝辞を述べ、いずれ「音韻篇」「語法篇」を出版したいとしている。しかし、その希望は叶えられることはなかった。柳田が「墓地の地名は誤つて居る」とするのは、武志が発表した「墓地の地名」（『旅と伝説』六巻七号（昭和八年九月号））についてのことである。

【5】内田武志宛て（第3期内田文庫：F1―3―2―③）

昭和二十一年一月七日付け書簡（ハガキ）

秋田県鹿角郡毛馬内町高橋正三氏方　内田武志君

（通信面印刷）東京市世田谷区成城三七七　柳田国男（小田原急行・成城学園前下車）

内田君はどうしたらうと毎度気にしてゐました。先づ〳〵安堵、御一家中も皆御無事と存じ候。小生何とかして焼のこりの御礼に世の中の為に働きたく疲労を忍びつゝ文章を書いてゐます。もう外部との文通は怠ることにしてゐます。丈夫にくらし給へ。一月七日。

【解説】昭和二十年（一九四五）五月、内田家は東京の空襲が激しくなったことから秋田市内に疎開し、その後、八月には武志と母親が毛馬内町（現鹿角市）の親類宅（母親の伯母宅）に再度疎開した。本書簡は、内田家の無事を聞いた柳田からの通信である。東京を出るときは、渋沢敬三の手配で武志は仰臥したままで汽車に乗り込み（渋沢敬三「仰臥四十年の所産」）、その疎開時、武志の手許にあったのが柳田国男著『菅江真澄』だけだったとは、武志・妹ハチがともに書き残す有名なエピソードである（内田武志「菅江真澄未刊文献集一あとがき」、内田ハチ「菅江真澄への歩み」）。

【6】内田武志宛て（第3期内田文庫：F1—4—3—②）

昭和二十一年五月三十日付け書簡（ハガキ）

秋田市亀ノ町東土手町四十二小林三郎氏方　内田武志殿

（通信面印刷）東京市世田谷区成城三七七　柳田国男（小田原急行・成城学園前下車）

御手紙検閲の為本よりおくれ到着。本日拝見し、索引事業御骨折の至と存候。しかし御健康が之を許し其をよろこび申候。発起人連名のことは勿論さし支なく候も、たゞ其為にどれだけ利用者が増すか、損をしなければよいがと存候。真澄の二著年代は貴君の判定の方正しさうなれども、斯ういふことは前以て書信にて此方の同意を求め、余計な論弁を費さずもつと直截に訂正する方がよろしく候。病人とはいひながらあゝいふ功名心の如きものは好ましからず候。五月三十日発。

【解説】内田武志は、昭和二十一年五月十五日に謄写版で『菅江真澄遊覧記総索引・歳時編』を発行し、その「あとがき」で菅江真澄の著作年次を明らかにしようとした。基本的に柳田国男著『菅江真澄』に拠ることを明らかにしながら、『霞む駒形』と『栖家の山』については、柳田の示した年次を「不審である」とした。柳田はその物言いについて、不快感を示して注意している。なお、内田は同書の発行と同時に一枚の謄写版を発行し、菅江真澄研究会の創設を述べた。その賛助員として「東京　柳田国男先生　渋沢敬三先生」としているが、少なくとも柳田に関しては事後承諾であり、柳田は、そのことについて「発起人連名のことは勿論さし支なく候」としている。

【7】内田武志宛て（第3期内田文庫：F18—1—1—③）

昭和二十三年九月十四日付け書簡（ハガキ）

秋田市東根小屋町女子師範寮　内田武志殿

（通信面印刷）東京市世田谷区成城三七七　柳田国男（小田原急行・成城学園前下車）

続秋田之刈寝のことは全くハチ子さんのきゝちがへにて、其写本をもたぬは勿論、果してさういふ名の日記が存すべきやをも小生はうたがひ居候。たゞ年譜に同じ書名が二所に出て居たのを不審と申せしのみに候。九月十四日。

【解説】内田武志著『秋田の山水』（昭和二十三年一月）には年譜が付けられ、その天明四年の著書に〔秋田の仮寝〕がある。さらに、天明五年に〔秋田の仮寝×〕（×印は未発見著書）が記されている。八月に上京して柳田に面会した内田ハチが、柳田が天明五年の〔秋田の仮寝〕について不審に思って指摘したことを、「続秋田之刈寝」の写本を柳田が持っていると聞き違いをしたものだと、柳田は述べている。武志が柳田に問い合わせたことへの柳田の返書であろう。

【8】内田武志宛て（第3期内田文庫：F1—3—4—⑤）

昭和二十四年五月十四日付け書簡（ハガキ）

「秋田市東根小屋町秋田師範学校女子部　秋田文化史研究会」【「　」内は他筆】内田武志殿

（通信面印刷）東京市世田谷区成城三七七　柳田国男（小田原急行・成城学園前下車）

松前と菅江真澄。今朝落手、早速一読候。御骨折と存じ候。かたゐ袋、蝦夷の手ぶり残篇いづれも興味を以て拝見いたし候。五月十四日。

【解説】内田武志著『松前と菅江真澄』（昭和二十四年四月一日発行）の献本に対する礼状である。同書は、札幌市の北方書院から発行された。真澄が蝦夷地にいた四年間を概観するとともに、日記類の抄録を掲載した。『秋田叢書別集　菅江真澄集』には収録されなかった『かたゐ袋』や「愛瀰詩歌合」（『風の落葉』第六巻所収）、それに後年の未来社『菅江真澄全集』に「えぞのてぶり続」として収録されることになる資料が紹介されている。それらは、柳田国男にとって初めて知る資料であったと考えられる。

【9】内田武志宛て（第1期内田文庫：大型封筒1—2）

昭和二十九年四月十五日消印書簡（封書）

秋田市「東根小屋町秋田大学女子部寮内」【「　」内は他筆】内田武志殿（原稿のみ）

（封書裏）東京世田谷区成城　柳田国男

【本文省略】

【解説】 封書の中身は、四百字詰原稿用紙五枚に亘る資料の書写で、他筆によるものである。資料は、現在、国立国会図書館蔵である『蝦夷考』（原稿には「帝国図書館名」とある）の写しで、武志は後年の著作である平凡社東洋文庫『菅江真澄遊覧記1』五十四頁（昭和四十年）、さらには、『菅江真澄全集』別巻一・五三八頁（昭和五十二年）で引用している。資料の書写であり、他筆でもあるため、ここでの翻刻紹介はおこなわない。

【10】内田武志宛て（第3期内田文庫：F18—1—1—⑦）

昭和二十九年十二月六日付け書簡（ハガキ）

秋田市「東根小屋町秋田大学女子部寮内」【「　」内は他筆】　内田武志様

（通信面印刷）東京都世田ケ谷区成城町三七七　柳田国男

真澄翁未刊文集二、先日よりぽつ〳〵拝見。未了の為に御礼もおくれ申候。永い間の御辛苦感謝に不堪候。冬中そちらは中々御暮しにくいことゝ存候。何かと御不自由御いたはしく候。小生も冬は相応よわり申候。ハチ子さんにもよろしく御伝へ被下度。根気よき御援助、外の者も感動申をり候。十二月六日。

画多くよくわかり候故、多くの人も拝見すべく候。

【解説】 昭和二十九年十月十五日に発行された『菅江真澄未刊文献集二』（日本常民文化研究所）の贈本に対する礼状である。本書（第二集）発行は、前年十二月の第一集に続くものである。昭和二十一年の菅江真澄研究会設立時に謳った「第二、未刊本の発行」の完成であったことに併せ、いわゆる大館本の翻刻作業に妹ハチたちの助力があったことなどから、柳田からの労いの文面となっている。第二集には、口絵に六十八図にも及ぶ図絵があることから、第一集にくらべて画（図絵）が多いことにも触れている。なお、当時、大館の栗盛家が所蔵し、門外不出の扱いがされていた大館本の閲覧に道を開いたのは、柳田からハチに手渡された柳田手沢本の『菅江真澄』であった（内田ハチ「菅江真澄への歩み」）。

【11】内田ハチ宛て（第3期内田文庫：F18—1—1—④）

昭和二十九年二月十六日付け書簡（封書）

秋田市東根小屋町秋田大学学芸学部明和寮にて　内田ハチ子様　御許

（封書裏）東京世田谷区成城町三七七　柳田国男

内田はち子様おまへに　柳田　暮から自分も病気の療養に

かゝつてゐたので、まだ兄さまの手紙にも御返事をさし上げずにゐました。いよ〳〵時が来て日頃の骨折が実を結び、世に残る本が出てあなたも嘸御よろこびでしよう。私も旅中にすつかり拝見し、今研究所の人々によませてをります。どうか秋田県内にも是を学問に利用する人が多かれかしと念じてゐます。あなた方の御苦労御骨折は私も知りすぎるほど知つて居るのですが、世の中に本(コレ)が出て行けば、是からはそれも追々にわかりましよう。たゞあなた御自分の生活をあまりにも浸食してゐるのが何としても御気の毒です。此序に一つの御相談は、一昨年か其前かに、内田さんからの御預り品として写真複写集が四冊あつたのを、もう私は忘れかけてゐました。是はすぐにも御返しゝた方がよいのですが、或はもう一組そちらにもあつて今まで御催促もなかつたのでは無いかとおもひます。御返事次第ですぐにも書留小包で御返送の用意はしてゐますが、もし幸ひにして是が置き処を別にしてもよい副本でしたら、忘れつぽい人に預けて置くよりもむしろ民俗学研究所へ譲つて下さつては如何。此点を兄君へ一つ相談して下さい。無論御示しの経費は御返しするのみか、拡大鏡で見てあの説明の細字を誰にも見られるやうに書込み、又金の都合がついたら之を複写しても見ましよう。或はさうせられることを病人がうれしがらぬかも知れぬと思ひ、あなたまで御相談します。「否」の場合にはたゞ返すやうにとだけの御答へを下さい。二月十六日

【解説】『菅江真澄未刊文献集』第一集（日本常民文化研究所、昭和二十八年十二月三十日発行）の献本への礼状で、内田兄妹が秋田に行ってからの八年間の成果に対し、労いの言葉を伝えている。本書簡の文言は、次の書簡で示すことになる「出版案内」にも一部使われている。柳田が、ハチを介して武志に相談しているのは、一昨年かに送られた写真複写集四冊が、もし副本であったならば民俗学研究所に譲ってほしいとの依頼である。四日後の次の書簡にあるように、武志からの許諾を得て、その四冊は女性民俗学研究会に寄贈されることになった。『菅江真澄未刊文献集』第一集「あとがき」によると、渋沢敬三から贈られたキャビネ型乾板を使い、「栗盛家の未刊資料の図絵の部分をあらかた写し終わった」とあることに加え、第二集口絵に栗盛家蔵本をはじめとする六十八図が掲載されていることから、その原版となった写真である。写真複写集は、現在、成城大学・民俗学研究所で所蔵している。

【12】内田ハチ宛て（第3期内田文庫：F18―1―1―⑤）

昭和二十九年二月二十日付け書簡（速達封書）

「秋田市東根小屋町秋田大学学芸学部明和寮　内田ハチ」子様　速達【「　」内は内田ハチの筆。住所と「内田ハチ行き」と書かれた封書に、「（内田ハチ）子様」と上書きしていることから、封書は【10】の返書の際に内田ハチから返信用として送られたものであろう。】

（封書裏）東京世田谷区成城町三七七　柳田国男

内田ハチ様　柳　御手紙を拝見しました。あなた方の芳意を保存するやうにこの写真集を製本して女子（ママ）民俗学研究会の人たちに特別に保存させるやうにいたしました。奈良豊沢等諸君に呼応する為、どうか次のやうな意味の短文を書きつけ御印刷ねがひます。

秋田県の若い有識者らが菅江真澄の遺稿を愛読するのと同じやうな熱意を以て、もしも他の多くの都府県の人たちが自分々々の昔の生活に注意しようとしたならば、其結果は多分一度は少なくとも日本の文化は興隆し、もう少し多数の同胞の前途が明るくなるでしよう。真澄は外から来た人です。時には同情のあまり親切なる早合点をして居ることもあり、小さい誤りも稀にはありましようが、ともかくも前後数百年にわたつて是だけ細密な常民の生活の観察をした人はありませんでした。秋田津軽南部にかけては、たつた一つ斯んな稀有な記録が保存せられゐました。他の地方にも果して之にやゝ近い文献が伝はつてゐるだらうかどうか、それもおぼつかなく、第一真澄翁の日記のやうに、四十何年の永きにわたり一貫して農村の現実を語らうとしたものは多分他にはあるまいと思ひます。前には深澤多市翁の辛苦なる蒐集校訂にも多くの東北人は共鳴しました。今度の内田武志君の事業は言はゞそれに印象づけられた者の回想であり認識であり追慕であり同時に変りはてた其後の国情に対する今一回の反省でもあります。さういふことの容易に出来る地域といふものは自分の知る限り決してさう広くはないといふことを、或は東北にはまだ心づかぬ人があるかもしれませぬ。昭和二十九年二月十八日　柳田国男誌

【解説】『菅江真澄未刊文献集』第一集はすでに昭和二十八年十二月三十日に発行されていたが、その「出版案内」を作成するため、特に柳田国男からの推薦文を求めたことへの返事である。本書簡にある「秋田県の若い有識者らが～」を、「出版案内」の「柳田国男先生の言葉」に引用することになる。また、「出版案内」の一部の文言は前書簡の冒頭部分を使っている。なお、この「出版案内」は、特に秋田県内の頒布を促進するために作成されたもので、推薦の言葉（「私（ママ）だちの言葉」）が、秋田銀

行頭取鈴木直吉・秋田県教育長尾見鐐次郎・奈良環之助の連名で書かれ、申込先が奈良となっている。なお、本書簡にある「豊沢」とは、昭和三十一年から九年間、秋田県立図書館館長となる豊沢武（たける）で、昭和二十一年に武志が出した「菅江真澄研究会の趣旨」（謄写版）に賛助員として名を連ねた人物である。

【13】深澤多市宛て（深澤資料：絵T24―2）

大正十四年十一月十九日消印書簡（絵ハガキ）

秋田県後三年駅前　深沢多市様

めづらしい原稿有がたく御礼を申します。なるべく一月号にのせたいと思つてゐます。尚あとから追加して下されば結構です。東京牛込区加賀町　柳田国男

【解説】　送付された原稿とは、大正十五年一月一日発行の『民族』第一巻第二号に掲載された「羽後仙北郡に於ける祭石一斑」を指す。多市がいう祭石とは、俗信や地方神など民間信仰で祀られた石碑を指す。仙北郡内にある庚申や庄内（ママ）三山など十五種について、形態や紀年、信仰内容などを記している。多市が「目下猶資料蒐集中である」とすることから、本書簡で柳田が「尚あとから追加して下されば結構です」と記すのである。

【14】深澤多市宛て（深澤資料：T34―2―1）

大正十五年五月二十八日付け書簡（封書）

秋田県横手町　深澤多市様　御返

（封書裏）東京牛込加賀町　柳田国男

深沢様。五月二十八日。久々御寄稿を給はり御礼申上候。但此秋田県の山立由来記は六七年前既に小生の著書「神を助けた話」の附録として公表いたしをりに付、民族には掲載し得ず候。御承知下度。尚マタギの事は少しばかり此頃出すべき「山の人生」の中に出し可申に付、御覧を乞度。又木即ちこんな木を持ちあるきし故の名かと小生も考をり候。

【解説】　柳田国男が主宰した雑誌『民族』は、大正十四年（一九二五）十一月を第一巻第一号にして隔月で発行され、昭和四年（一九二九）三月を最後に休刊した。多市は大正十五年に二本の論考を発表するだけであるが、本書簡からは、マタギが持つ「山立由来記」に関する報告も寄稿していたことがわかる。マタギのシカリが持つ由来記には二つの流派があるとされる。「山立根本巻」の日光派と「山立由来記」の高野派である。柳田の『神を助けた話』にあるのはタイトルが「山立由来之事」であるが、内容は「山立根本巻」である。多市が寄稿した

のがどちらであったか。仮に同じであったにしても、解釈による句読点の打ち方や文言の異同があるはずで、また同じ秋田県内の資料でも地域による違いもあるだろう。多市に、マタギに関する他の論考・報告はないだけに、掲載見送りは残念である。

【15】深澤多市宛て（深澤資料：絵T49―1）

昭和二年六月三十日付け書簡（絵ハガキ）

秋田県横手町　深沢多市様

（絵ハガキ宛名部分）東京牛込　柳田国男

御手紙ありがたく存候。真澄御研究は先づ書翰蒐集伝写より御著に千望万節に存候。梅鉢の紋所は御示しの如き事情も可有之候も、三河渥美郡の白井氏も大抵皆梅鉢に有之候よし承り候。六月三十。

郷土誌料各号拝見。御骨折と存じ給候。大山君にもよろしく御礼申給はり度候。

【解説】　仙台叢書や南部叢書の刊行に刺激を受けた深澤多市は、秋田考古会を共に立ち上げた武藤一郎に秋田叢書刊行の決心を語っていたが、昭和二年五月十五日の秋田考古会における柳田国男の講演を聴き、秋田叢書に菅江真澄の著作を入れたいと柳田に伝えたのであろう。それに対し、書簡の収集など、真澄の人物像につながる資料の収集や転写などを真澄研究に入れてほしいと柳田は希望した。なお、「大山」とは、多市とともに横手郷土史編纂会に加わっていた大山順造のことである。

【16】深澤多市宛て（深澤資料：F2―17）

昭和二年十二月二十六日消印書簡（封書）

秋田県平鹿郡横手町　深澤多市様　親展

（封書裏）東京市外砧村成城学園前　柳田国男

雪中御様子如何御伺申上候。さて真澄翁記念事業の事、来年の命日頃にとの吉村氏の御話も有之。小生一個の役としては小さな伝記でも刊行し度、あの後引続き労苦いたし候も今以て新資料を得がたく候。幸ひ栗盛財団の方は大和田氏武石氏の尽力にて、二三相応に有力なる好資料を見出し申候も、三河の方は今以て生家知れ不申。と申は、白井姓の紋梅鉢なる家十数ケ部落に有之。其間にも転変ありしかと考候上に、元々若い頃に出てしまつた伯叔なれば外姪孫となりては忘れうるも無理ならず候。此上は個々の白井団に陳て過去帳によつて白井幾代二秀軌（父らしき人）の俗名を求むる他無之。それが果して間に合ふや否、頗心元なくなり申候。大阪朝日の豊橋通信主任小湊君などは興味を以て新に捜索に参加しくれ候

故、近々には少しづゝわかり可申と為候。尚、此前御上京の折中道君に一寸御話有之候、武州忍の寺に居る僧の真澄翁自伝を蔵すといふこと非常に耳よりに存じ、早川孝太郎君を煩して出向調査を乞ひ候処、忍及付近には之に相当する寺（住職、秋田県より来てゐるといふ寺）無之候に付、何か今少し手掛と可成ことは無之哉と重ねて御伺申候。尤も忍から三里、鴻ノ巣と申駅に近き安養寺村の安福寺は住職柴田智常師、横手人にて久しく大慈寺の松井智門師の下に在りし人の由なれども、今より二箇月前四十四歳にて物故いたし、跡は未亡人にて一向様子わかり不申候。十年ばかりも郷里の方とは交通なかりしやう申候。土地はちがひをり候へ共もしは此人にては無之哉。一応御返書を給はり度、もし果して此人ならば、又今一応(度)早川君に行つて貰ひ遺書なども捜して貰ふべく候。自伝がもし見つかつたとすれば、独り小生のみならず、豊橋方面の人々も大悦びなるべく存候。彼地にては今やかなり大なる問題となり、学者はよるとさはると此事を話しをり候よし。大山君に御逢の折はよろしく願上候。柳田国男。深澤様。二月には「雪国の春」といふ一著を刊行し、大に奥羽を誌くつもりに候。

【解説】 昭和二年五月十五日、秋田考古会春季総会は秋田城址で開催予定であったが、雨天のために秋田図書館で開催された。ここで、男鹿への途上に臨席した柳田国男が、菅江真澄について講演をおこなった。その内容は、「菅江真澄百年祭」と題し、赤川菊村によって四回に亘って「仙北新報」に掲載された（青柳信勝・小田島道雄編『郷土史の先覚深澤多市』で新聞切り抜きを掲載）。その講演で柳田は、来年（昭和三年）の菅江真澄没後百年祭は、東京でも計画するが、秋田でも是非開いてほしく、そこに自分も臨席したいと語った。本書簡ではまず、その百年祭に向けて真澄の伝記をまとめたいが、生家をはじめ、新資料が得がたい状況にあるとしている。本書簡に先立ち、柳田は多市から「秋田魁新報」掲載の「菅江真澄翁の遺著に就て」の切り抜きを見せてもらった。そこに、「埼玉県忍町某寺に真澄翁の遺書を刊行しあり」と書いてあったことから、柳田はさっそく早川孝太郎にその調査を頼んだ。その結果について早川は、「還らぬ人」（昭和五年八月一日発行の『旅と伝説』）の附記として、「昭和二年十二月の末に、柳田先生から命ぜられて、自分は埼玉県北足立郡忍町に、禅宗の僧で真澄自筆の自叙伝を所持するという噂を確かめる為にでかけた」と、その報告を書いている。柳田は、早川から聞いたことを昭和二年の末の時点で、多市に伝えたことが本書簡から知られ

る。なお、本書簡文末にある『雪国の春』は、昭和三年二月に岡書院から刊行された。

【17】深澤多市宛て（深澤資料：絵T54―1）

昭和三年□（剥離）月一日消印書簡（絵ハガキ）

秋田県横手町　□□（剥離）多市様

切抜御見せ被下有難候。拝見の上速かに御返し可申上候。忍の寺云々といふこと今少し詳しく出所承度候。秋田叢書の中に御入を乞ひ度は、能代寺尊閑法師（のち里鶯）の埋れ水、日かげ草の二書に候。能代の人【表面剥離のために一部不読】被下度候。柳田国男

【解説】昭和二年（一九二七）十一月十六日と十七日の二回に亘って、深澤多市の「菅江真澄翁の遺著に就て」が「秋田魁新報」に掲載された。その「下」の末に、「因に記す埼玉県忍町某寺に真澄翁の遺書を刊行しありと聞きしも真否未だ知るべからず暫く疑ひを存じて後考を俟つ」と記している。その寄稿文を貼り付けた用紙（深澤資料F2―31、秋田県立博物館蔵）には、多市の筆跡で「秋田魁新報所載。若し此の原稿のまゝ雑誌などに御転載の必要あるならば快諾します。その用なきに於ては御返しを願ます。私の処に原稿がないから」とある。この切抜が柳田の元に送られ、返送されたものであろう。この年九月から『秋田叢書』の刊行が始まったが、柳田が収録を希望した『埋れ水』と『日かげ草』の両書は『秋田叢書』に収録されなかった。両書は、真澄が『雪の道奥雪の出羽路』と『男鹿の春風』に書名を挙げたことで知られる。

【18】深澤多市宛て（深澤資料：絵T55―1）

昭和三年一月五日消印書簡（絵ハガキ）

秋田県横手町　深澤多市様

八沢木大友家の古体の歌は御推察の通り万葉九巻の長歌を写したるものに有之候。東京市外砧村成城学園前　柳田国男

【解説】八沢木（現横手市大森町）にある波宇志別（はうしわけ）神社社家の大友家には万葉仮名で書かれた和歌の軸装があった。昭和三年五月六日におこなわれた角館史考会主催の菅江真澄翁百年祭で配布されたパンフレット（「角館時報」第1面及び第2面を兼ねる）に掲載されている。歌は、『万葉集』巻第九にある歌番号一七四七の長歌で、『秋田叢書別集　菅江真澄集』第一巻（昭和五年七月十日発行）の口絵でも紹介された。なお、大友家の資料については、昭和三十三年五月十九日の家屋火災で焼失したも

のが多い。この軸装も焼失資料の一点と考えられる。

【19】深澤多市宛て（深澤資料：T57―1―1）

昭和三年三月二十日付け書簡（封書）

秋田県横手町　深澤多市殿　御答

（封書裏）東京市外砧村成城学園前　柳田国男

拝答　五月七日には愈々角館にて真澄翁百年祭御挙行のことに決し候よし結構に候。但し御仰越の儀は少し所存有之候。御断り申上候に、然先方へ御伝声被下度候。恐々不一。三月二十日　柳田国男　深澤多市殿　御許。

【解説】書面には「五月七日」とあるが、昭和三年五月六日に角館でおこなわれることになった菅江真澄翁百年祭に関する依頼を断る内容である。同会は角館史考会の主催によっておこなわれたが、同会顧問であった深澤多市が、柳田国男への講師依頼と記念碑揮毫依頼の仲介をおこなったものである。結果としては、講演会講師は多市と旧知の間柄であった喜田貞吉（歴史学者）がおこなうことになった。経緯に関する資料は、『菅江真澄没後記念祭資料集』（二〇二一年三月、東京学芸大学）に掲載されている。柳田国男は同年九月二十三日に秋田県立図書館でおこなわれた菅江真澄翁百年祭（角館と同称）で講演している。本書簡の時点で、すでに秋田での講演を想定していたことから断ったものであろう。

【20】深澤多市宛て（深澤資料：叢17―1―1）

昭和六年十二月十二日付け書簡（封書）

秋田県横手町　深澤多市様　侍史

（封書裏）東京市外砧村　柳田国男

寒さの折柄御容子其後如何伺上候。先日は御懇書を忝く候ところ不在中御無音仕候。真澄集三冊頂戴する理由は無之候も、そのうち金を得候はゞ寄附の御心持にと拝受仕候。御礼申上候。早速勉強三巻とも二三日前に読終り候。挿画無彩は致し方は無之、校正の精確には推服いたし候。是ならば利用せぬ者の方が罪ありと可申候。著者誤筆以外或は写し損じかと思ふ点少し有之。是は幸に他日追刷の折もあらば、是非とも御検討を乞ふべく国本君にも話しおくつもりに候。同君は誠に忠実なる御助手にてこの事業の為には最も好都合のことゝ存上候。何か今後も同君の長処を利用する仕事あれかしと念ずるのみに候。齶田仮寝小野古里二書は一ケ月の約なりしにより昨日大和田翁を介して大館へ返送いたし置候。但し最早全集の為には用も無之ことゝ信じをり候。尚刊行会の役員は多少にても御役に立つなら名前ばかり御使ひ下されてもよろし

く候へ共小生としては甚だ望ましからず（に＝脱）候。草々。
十二月十二日。柳田国男。深澤殿。

【解説】「秋田叢書刊行会会報」には、第十二号から菅江真澄集監修として柳田国男の名前が入っている。この第十二号は、『別集菅江真澄集』第四巻と同送されたものである。柳田の名を入れるに当たって、それまで刊行していた別集の三冊を寄贈したことがわかる。柳田はその三冊を読み、校正が精確であることに感心するとともに、自分が大和田楳之助を通じて大館栗盛教育団の原本を借用していた『齶田刈寝（秋田のかりね）』と『小野古里（小野のふるさと）』について、それらが公刊されるのなら、もう直接借用する必要もあるまいとする。両書は『別集菅江真澄集』第四巻に収録されることになる。深澤多市宛て国本善治書簡（ハガキ、秋田県立博物館蔵）によると、特に『別集菅江真澄集』第六巻の津軽編を編集するに当たって、国本が柳田邸に行き、配列（年代順）に関する相談をしたことがわかる。

【21】参考：深澤多市宛て大和田楳之助書簡（深澤資料：F2—21）

昭和三年五月二十三日付け（封緘葉書）

平鹿郡横手町　深澤多市様
（封緘葉書宛名面）大館町　大和田楳之助

復啓御懇書難有存候。魁紙を拝見仕候。小生の発見のやう御吹聴にあづかり恐縮仕候。あのことを柳田氏へ御通報致候処、同氏は既に同地を調べ候由にて、次の通り御教被下候。
「殖田義方と申人は三河吉田在とて今も子孫立派に暮し居り少しの文書ども持伝へ、かの後十数年尚津軽より音信をつゞけをりしこと迚も明かになり申候が、それにしても真澄翁の生家はまだ頓と知れ不申。先月も自身三河へ参り諸所の白井と申旧家聞合せ申候も、手掛り無之候。街道近くにも白井苗字の多き村里六七ケ所も有之。何れも家紋は梅鉢にて所謂「いづれあやめ」に有之候。それと申すも家の方から申せば若い時家出したる旁系の人なれば、四代五代と云つては忘れてしまふものと相見え申にて豊橋の学者の間にも目下研究問題となり居り、分り次第報導しくれることと相成居候」云々。
其後小生は三河の乙見のことを申上げ候へ共、御便り無之候。真澄全集のことは栗盛家の方に話し置申候。兼て御心労の御事と存候。御自愛の程奉祈上候。御返事旁右申上候。□□（不読）。

【解説】大和田楳之助の略歴については詳らかにできないが、現在の大館市立桂城小学校の校長を大正五年（一九一六）～昭和元年（一二六）に務めている。その後

間もなく大和田が中心となって、栗盛教育団の真崎文庫（現大館市立栗盛記念図書館蔵）の資料整理がおこなわれ、『文献目録』が昭和三年（一九二八）に発行された。秋田県立博物館が所蔵する書簡類からは、『秋田叢書』でいわゆる大館本を翻刻するに当たり、大和田が貸借の窓口（仲介役）になっていたことがわかる。昭和七年になると、東京で柳田邸の近くに住まいしていた（深澤資料：F3―18―②、秋田県立博物館蔵）。本書簡は、大和田楳之助からの深澤多市宛て書簡ではあるが、この中に柳田国男書簡の内容をそのまま写していることからここに紹介するものである。植田義方については、真崎文庫にある『はしわのわか葉』に名が出てくる。柳田国男が植田義方について初めて触れるのは「白井秀雄と其著述」（昭和四年一月、『紙魚』二十六号、『菅江真澄』所収）である。前年には大和田楳之助から柳田へ植田義方についての問い合わせがあり、その返書の内容を多市に知らせたものであろう。

【22】深澤登子宛て（深澤資料：叢23―1―1）

昭和十六年九月二十六日消印（ハガキ）

秋田県横手町上島崎　深澤登子様

（通信面印刷）東京市世田谷成城三七七　柳田国男（小田原急行・成城学園前下車）

拝啓　近頃御障りもなくよろ（こ＝脱）ばしく候。国本君へ御願申候秋田叢書まだ御手元に有之候よし、しあはせに存候。代金振替にて届き候はゞ御送付被下度、小田原急行線「成城学園前」駅着と御指定被下度候。なほ御序にまだ揃ひのものどの位有之候哉、御報被下度。書店に割引にて御売払被成てはどうかと存候。ほしがつて居る者もあると存候。九月二十六日。

【解説】　深澤多市未亡人の登子（本名はキサ）に対し、『秋田叢書』の送付に関する依頼と、在庫本処分について書店での割引頒布を提言している。書面にある「国本君」は、多市の甥（妹の子）の国本善治のことで、『秋田叢書』の印刷責任者として、『秋田叢書』（『別集菅江真澄集』を含む）に収録された書冊の出版管理と多くの書冊の翻刻をおこなった人物である。多市が亡くなった昭和九年十二月以降、国本の動向がつかみにくいが、その能力を高く評価していた柳田国男とは交流があったことが知られる。

【23】奈良環之助宛て（収蔵番号315）

昭和十七年十月二十四日付け書簡（ハガキ）

秋田県南秋田郡金足村　奈良環之助様

（宛名面印刷）東京市世田ケ谷区成城町三七七　柳田国男

真澄記のことに付ては赤川菊村を通じて魁の井上社長にも愚意申置候。万一金高のことゝで話不成立に候はゞ、小生一旦金を工面ししばらく預り置、やがて秋田県の公益機関の管理にうつすやう致すべく候。内々御心得置被下度候。山本郡下岩川村宮ノ目の板倉勝純氏より通信有之。自筆日記（断片）三冊と遺墨二つをもち伝へ居るよしに候。御承知の人かもしくは有名な人か御聞合被下度。此方よりは取敢ず礼状さし出し置候。三日記のうち河辺郡のものは他ではきかず。十月二十四日。

【解説】　柳田は、菅江真澄遊覧記を所蔵していた旧藩主佐竹家（佐竹侯爵家）が同書を手放すことを知り、旧知の赤川菊村（秋田魁新報社調査主任）を通じて同社社長・井上広居に購入の話を持ちかけていた。もし秋田でお金を工面できなければ、自らがお金を立て替えて一時的に預かるが、いずれは秋田の公的機関で管理すべきだとの考えと、奈良環之助（民俗研究者）にそのことを心得ておいてほしいと伝えている。下岩川村板倉家の「自筆日記（断片）」とは、山本郡・秋田郡・河辺郡の地誌草稿のことで、三種町指定文化財として現存する。この葉書が書かれた昭和十七年は、真澄研究にとって大きな意味を持つ年であった。この年の三月、柳田国男が、昭和四・五年に書いた真澄に関する論考に、書き下ろしの「序文」と「菅江真澄の旅」を加えて一冊にまとめ、『菅江真澄』として創元社から上梓したからである。

資料『蝦夷錦』の現代語訳

松山　修

一、現代語訳の意義

ここに現代語訳を施す『蝦夷錦』は、『菅江真澄全集』別巻一「第六章」で紹介されている資料である。

同章は、菅江真澄が蝦夷地に渡海して滞在することになった経緯を解明するため、「松風夷談」（資料は函館市立中央図書館蔵）と「蝦夷錦」（資料は岩手県奥州市個人蔵）の二節に分けて、それぞれの資料翻刻と内容を紹介している。

後者は、菅江真澄（当時の名乗は白井秀雄）及び松前の歌人と、胆沢郡の大肝入で歌人でもある鈴木常雄との間で交わされた書簡を、常雄自身が書き写して一冊にまとめたものである。後年になって書き写されたものであるためか、書簡が年代順でなかったり、重複も若干見られたりする。

全集別巻一を執筆した内田武志は、それらの文章を内容によって二十五に分け、それぞれの年代の推定をおこなうなどの解説を施している。

はじめにも述べたように、本資料からは真澄の松前への渡海当時の事柄がわかることにとどまらず、真澄が、常雄を雅（が）人（じん）として松前藩の歌人たちに紹介したことから始まる、寛政年間における文人の交流を知ることができる。また、書簡の遣り取りの中には、クナシリ・メナシの戦い（寛政元年）とラクスマン来航（寛政四年）による松前藩内の混乱、真澄が蝦夷地を離れてからの松前歌壇の状況、真澄の消息の推測などについての興味深い内容も含まれていることから、真澄研究にとっては極めて重要な資料となっている。一方で、原文が擬古文や漢文であるために、全体像や細部をつかむのに時間がかかるのもまた事実であろう。そのため、本稿で現代語訳を施すものである。

本稿は原文と対照しやすいように、翻刻掲載された順序のままに現代語訳を施すが、全集別巻一に示された年代順にしたがって、整理しながら読むことをお勧めしたい。これまで点と点であった人物や事柄が線で結ばれ、真澄研究に新たな視点が生まれるように思う。それが『蝦夷錦』を読み解く魅力となるだろう。

各書簡の執筆年代については、基本的に全集別巻一にある

解題にしたがうが、現代語訳をおこなって初めて、いくつかの疑義が出てきた。

具体的には、【19】の年代は寛政七年から寛政八年への変更が必要であり、その関わりから【21】は寛政九年になると考える。また、【11】については、寛政三年初冬とする全集の見解から同年晩春（三月）頃のものと改めたい。いずれの理由についても、当該番号の箇所に「注」としてその理由を示すことにする。

右に述べたことから、全集別巻一・156頁に示された年代順を、日付も考慮して、次に示すとおりに組み替えた。

まえがき相当　【1】（寛政元年秋）【3】（寛政四年）
寛政元年【2】【4】【5】【6】【22】【7】【9】【8】
同　二年【10】【12】【13】【14】【16】【23】
同　三年【11】
同　四年【15】【17】
同　五年【18】（※注…寛政六年・寛政七年はなし。）
同　八年【19】【20】
同　九年【21】
あとがき相当【24】【25】

二、現代語訳の凡例

①底本は『菅江真澄全集』別巻一（未来社）に掲載された翻刻である。

②原文の趣旨を損なわないように意訳をおこなった部分もあるため、すべてが逐語訳にはなっていない。

③詠歌の現代語訳は基本的におこなわないが、松前藩滞在許可の経緯を書いた【4】と、文章中に部分的に引用された歌については現代語訳をおこなった。

④和歌の読み方において、濁音とすべき所には濁点を施した。また、脱字や誤字を示した。

⑤【23】は詠歌だけのため、現代語訳をおこなっていない。内容の概要と年代推定については該当箇所に明記した。

⑥次のように括弧を使い分けた。

・《　》…枕詞や序詞を示す。序詞については、文章を損なわないように現代語訳を施した。
・〈　〉…書簡を読むに当たっての補足の語句などを示した。
・（　）…語句の説明や言い換え、和歌の詠者を示すなど、主に解説に用いた。
・【　】…『蝦夷錦』では、常雄の文章と松前からの手紙の内容が入り交じっている場合がある。特に注意を要する文章が続く場合、解説のために用いた。

・［　］…原文の割註。
⑦現代語訳に際し、次のようにして文章表記をした。
・読みにくい漢字などに、適宜、平仮名ルビを施した。ただし、詠歌には歴史的仮名遣いでルビを用いた。片仮名ルビは、『蝦夷錦』の原文によるものである。
・行頭は下げずに、文章のまとまりによって適宜改行した。
・本稿の解説では「書簡」、現代語訳では「手紙」「便り」を使っている。
・「松前」と「蝦夷地」は、多くの場合、同義で用いている。
・相手の敬称を表す「ぬし」は、そのまま「～のぬし」として現代語訳に用いた。

（元秋田県立博物館学芸職員）

蝦夷錦　寛政元年

【1】

三河国生まれの秀雄のぬしが、みちのくの千島（蝦夷地）においでになり、旅の日数（ひかず）を重ねて、去年（天明八年）も過ぎ、今年（寛政元年）も秋になった。仲間と集まるたびごとに、和歌を詠み合ったり語り合ったりして、あれこれととりとめもなくお詠みになった三十一文字の言葉（和歌）を、同じみちのくの胆沢郡に住む常雄のもとに、秀雄のぬしから書き送ってきた。秀雄のぬしから、

世に高き梢のはなもことの葉のかぜのたよりにけふこそはみれ

とたいへん仰々しく詠っていただいたうれしさに、この返歌として何事をか詠もうと、《羽束師森（はつかしのもり）の木々が紅葉となるような》恥ずかしい思いをして、秀雄のぬしのもとまで、表立たずに告げ知らせた。

吹かぜのなどたぐえけむ奥の海のめかり汐やくあまの言の葉　（常雄）

そうではあるが、本当にこのように都合のよい風（秀雄からの便り）が吹いてこなければ、常雄が心深く月雪にあこがれた言葉の花の色（和歌を深く愛する心）を、どのようにして自覚することができたのであろうかと思うと、それがたいへんにうれしくて、

人伝にあらずばしらじ松嶋や渡嶋の磯の友づるの声　（常雄）

また、常雄のもとからとして、宮城野の萩、末の松山の松を柄とした筆が贈られたので、

とるたびに色こそ匂へ宮城野の木萩がふでの露（ぞ＝脱）

えならぬ　（秀雄）
友がきの心かはらずまつ山のふでにかたらん千世の言の葉　（秀雄）

世間で蝦夷の錦と呼ばれる、たいへん見苦しいものであるが、蝦夷地よりも遠い島人（樺太アイヌなど）が折りを見て持って来た小さな衣を、常雄のもとへ贈るといって、〈次の歌を添えてきた。〉

露時雨そめなで風のまかすればにしきにあらぬくち葉とぞしれ　（秀雄）

【2】

【松前からの手紙】

胆沢郡の長である鈴木常雄のぬしが和歌の道に志が深いということを、秀雄のぬしがこまごまと語ってくれます。遠い海山を隔ててはいても〈和歌を〉好む心は同じです。《玉鉾の》道（和歌の道）を楽しもうとすることは、中国の書物にもその道理をみることができるとか言います。今後はともに〈和歌の遣り取りを〉交わしてほしいと、よい機会のお手紙に添えてこのように申し込んでおります。季豊、

蝦夷の海の波かけてまつこの里にはつ音（意＝誤）忍ぶの山ほとゝぎす

鈴木常雄のぬしは、まだ対面もしない方ではありますが、和歌の道に志が浅からぬことを、この度、秀雄のぬしがこの土地に来て話してくれるのを聞きました。私も好きなことですので、見苦しくはありますが一首を詠んで急な船便に（届けるよう）頼んでおります。一貫、

言のはの匂ひ吹こせみぬ人をいはでしのぶの山のはるかぜ

季豊のぬしより、（前掲と同歌だが、文字遣いが異なる。）

蝦夷の海のなみかけてまつこの里にはつ音しのぶの山郭公

【常雄の返書】

右のような詠歌を贈られたのに加え、梅や桜の花などを添えていただいたありがたさを、海よりも深く山よりも高い〈感謝の〉気持ちをそのままに、返書を人に託して送った。常雄、

めづらしな幾関こえてこの宿にことゝひなるゝ山ほとゝぎす

とりの趾かよふにつけて奥の海のふかきこ（こ＝脱）ろもくみぞしらるゝ

いまだに会うことができない一貫のぬしから、「言のはの匂ひ吹こせ（和歌の魅力を送っておくれ）」という和歌をいた

だいたので、たいへんうれしく思い、この度のお手紙に添えて送った。常雄、

春かぜのさそふにつけてみぬ人のことばの花ぞまづ匂ひぬる

再び詠ったのは、

ことのはの色しかはらで幾春もとはれんことを松がうらしま（常雄）

【松前からの手紙】

三月の末ごろ、桜もまだ咲かないので、〈花をまだ見ることができない〉つらさなどを、同じく和歌の道を志す仙台藩領胆沢郡の長である常雄のぬしのもとに伝えました。秀雄、

花みんと去年（こぞ）よりまちてみちのくの蝦夷が千島の春もくれぬる

わすれずに日（ひ）にこゝろ（こ＝誤）をうつしてしながめんものといひしことの葉（常雄）

と常雄のぬしが詠ってくれたことの返しを、秀雄、

ことの葉の露のなさけに袖ぬれて月にぞしのぶ人のおもかげ

常雄のぬしが返歌として「春かぜのさそふにつけて」と詠ってくれた嬉しさが限りなく、〈返歌を〉詠いました。

みてぞしるひとのことばの花に咲匂ひもふかき水くきのあと（秀雄）

今度は、「こととのはの色（かぜ＝誤）しかはらで幾春もとはれんことをまつが浦しま」とあった、その返歌です。

今よりは幾春秋にことゝはん千世もかはらぬ松がうらしま（秀雄）

〈常雄の〉ぬしを想うこころを、〈次のような歌にしてみました。〉

道とをくちしま松しまへだてゝもゆめにかよはぬ夜なくぞなき　右一貫

【3】

三年ばかり前に、言葉をかけ合って（文通）から難しい事情が続き、手紙の遣り取りも絶えて過ごしてしまったことを残念につらくお思いになり、「おくに絶てたよりもなみの朝なゆふな音信（おとづれ）をのみまつよしな（お手紙を置くことも絶えてしまった朝夕に、お手紙だけを待つのはつまらないものですね）」の和歌をお書きになっている返しとして、〈次の返歌をします。〉

音信をまつと聞よりこゝろにもあらで絶にしことのくやしさ（以下五首、季豊）

くる雁の便に告し言の葉をみるになぐさむ絶しおもひも
便さへなみ路をとをくへだてゝもかはらぬ色をまつがう
らしま

又、有名な信夫摺りのみちのく紙を与えていただき、「みるたびにおもひ出でよとこと（の＝脱）はに君をしのぶの萩のはなずり」と詠われたのには、特に本格的な美しさがありますので、返歌もどことなく劣る気がしますが書いてみます。

思ふをばおもふならひの色とみてたゞす忍ぶの萩の花ずり

この度は〈常雄のぬしに手紙を出すことができるという〉よい知らせではありますが、たいへんに急なことですので、海士が刈り取ったひろめ〈の類〉でしょうか、あるいは、えびすめ〈の類〉でしょうか、少し趣きのある名が付いた〈その趣きのある名称が〉難しげなものを贈るのに添えて、〈次の歌を詠んでみました。〉

霜雪のおりにもかれなこんふゆの便にみせよ言のはのいろ　右　季豊

【「かれなこんぶ」の隠題であろうが、「かれなこんぶ」については不明】

【鈴木常雄の覚え書き】

世に名高いとされる和歌集を差し上げたところ、「汐やくあまのことのはの」などという歌をはじめ、たくさんの歌に加えて、蝦夷錦として名の知られる衣を、秀雄のぬしを通じてお与えくださったことは世の中に比べようもなく、その恐れ多いことは富士の嶺よりも高く、奥の海よりも深いように、同じぬし（秀雄）を通じて、〈お礼の歌を季豊に〉お贈りした。常雄、

露ふかくかゝるめぐみのおほけなく夫（それ）ぞといはんことの葉もなし　（以下の九首は常雄）

このように報い申し上げるとともに、世間でいう信夫摺を添えて捧げた。これは刈田（かった）郡の白石庄という土地の紙を使い、折った布にすり込んだものである。

里の名にめでゝもしばしみそなはせ賤が手わざのしのぶもじすり

三年目になり手紙を送ってくれた秀雄のぬしの元へ歌を贈った。

わかれにしその秋のよの雲かげをしたふにかすむ春の月かげ

重ねて贈った歌。

立かへりまた来てかたれ衣川淵瀬かはらで君をまつ身に

二年の移りゆきは矢よりもはやく、手紙の遣り取りをしてい

た年は過ぎ、次の年も昔となって、三年目の夏になった。以前の春にはたくさんの和歌に、たいへん深い奥の海に棲むナマコというものなどを添えてお贈りくださったことはたいへんに恐れ多く、三年目となった今になってもその嬉しさに言葉もない。『続耳底記』という書物は、その秋頃に〈季豊へ〉お送りした。さぞや愛読されていることだろう。そのわずかばかりのことを秀雄のぬしの元へ申し伝えようと思い、そこで（歌を）添えた。

打たえて便もなみの朝夕におとづれをのみまつがうらしま

信夫摺の料紙を贈るのに添えて、〈次の歌を詠んでみた。〉

みるたびに思ひ出でよとこと（の＝脱）はに君を忍ぶのはぎの花ずり

戌の年（寛政二年）の一月あたりに、歌に添えて青玉（青色のアイヌ玉）、アイヌがつくったという道具などをいただいた。その年の秋に秀雄のぬしの元へ申し述べただけで、それから早くも三年が過ぎ、この度また手紙が送られてきて、そこに書かれていた言葉はたいへんに心がこもったものであった。そのうれしさは特に大きかった。

何とまた云出してん玉をなすことばの露のかゝるこの身は

いつまでも契ることばのかはるべき幾春秋のすゑのまつ山

再び松の木を軸にした筆などを贈ろうとして、〈次の歌を詠んでみた。〉

命毛も尚もろともにながるらんためしやすゑの松山のふで

【4】

玉章（手紙）

初春の祝いの言葉をお送りするところでしたが、駅馬の使い（飛脚）が早く出てしまい、そのこともできませんでした。長らく御消息をうかがうこともできませんでしたが、お変わりなくいらっしゃったでしょうか。

私（わたくし）めは、去年の夏にあのように〈蝦夷地に行くことを〉人に打ち明け、夢に見たり現実に思ったりして、（及川胤修が村長の）柧木田（はのきだ）（現北上市）に寝起きし、（医者の伊藤修が住む）花巻に宿り、盛岡では浪速に住む男（おにきち）と相談し、宇鉄（現外ヶ浜町三厩）の四郎左衛門という、アイヌの〈子孫の〉家に寝泊まりして、山背という風を待っては船にいろいろお願いして、こがね一つを出して乗せてもらいました。竜飛、白神、中の潮（潮流の名称）も過ぎて、無事に

福山城の下の小松前という所に、（天明八年）七月十四日の夜明け頃に着きました。いつもは川舟でも乗り物酔いの心地がするのに、前沢でクルミをたくさんもらい船中で舐めていたため、一向にそのような気配もありませんでした。

夜が明けて、船問屋や役人がやって来て調べたところ、私は氏江（氏家か？）某の家まで前沢宿の長の紹介状を持って来たと言いましたが、それだけでは松前藩への入国は難しいからと、宿に申しつけられ、〈入国は〉容易ではありませんでした。

一方、難波男（おにきち）は今流行の今様めいたことが得意で、それを唄うことが知られたため、将軍家からの巡見使一行を迎える慌ただしさが過ぎたならば、この島（蝦夷地）を治められている藩主様（松前道広）もお聞きになるなどと、人びとがもてはやしたので、この難波男のおかげで私も滞在していたのですが、役人の眼があるので、少しも外出できなかったため、〈却って〉風邪を治していました。

ところが、この難波男が本当に今様を唄う者ではなく、嘘をついていることがわかりました。早々に来たときと同じ船に乗せて帰せと、以前よりも厳しい監視の眼だと思っているうちに、船切手も発行されたので、明日は良い風があるだろうと待っていましたが、そのような風も吹いてきません。別の日に風を待っていましたが、その機会もなかったので、以前に少しだけ知り合っていた吉田直江一元（かずもと）という医者に伝えたいことがあったので、〈いずれ〉また会うこともあるでしょうなどと、〈次の歌を詠んで送りました。〉

おもひやれ（り＝誤）たよりも波の捨小船沖にたゆとふこゝろづくしを

（思いやってください。頼るものもない波の上の捨て小船のようなものです。沖で揺れているこの心労を。）

この歌を見て、一元は私ひとりが留まるように言い、身の施し方は自分が工夫しましょうと勧めてくれたので、難波男と別れてこの地で年を越すことができました。

たくさんの人びとにも出会って歌や物語をしました。この島の藩主様の母君（実際は継母）である綾子とおっしゃる方は、今は二の丸と呼び、法名を自照院殿とおっしゃり、私めをたいへん大事にしてくれています。同じように、松前鉄五郎広英、下国武季豊、蠣崎弥次良広年は、いずれも高貴な方です。蠣崎三弥広虎も合わせて、「広」という字が付くのは藩主家の血筋です。下国家は由緒のある御家老家です。谷梯（ヤナハシ）升蔵茂亮、その他、佐々木豊前一貫と下国武季豊、吉田一元、二の丸公が特に和歌に志が深くいらっしゃいます。この下国氏は、身分が高く名声のある方です。あなた様のことを折りに付け

てお話ししていますので、いつか御対面したいとお話しなさっています。御文通をなさってください。
アイヌの踊りの浄瑠璃、これをユウカリ（ユーカラ）と言います。そこには、今様のような調子もあり、熊のことも登場します。
○ニシンとカドとは違って、ここではニシンだけが獲れて、カドは一向に稀なものです。大漁とはいっても十年ほど松前城下ではクキ（群来）ることがありません。ニシンが集まることをクキルと言います。
○この二十一日に寛政改元の知らせがありました。（改元は一月二十五日）
○この十六日に佐渡島で大地震があったと、二十日に松前に着いた船人の話として聞きました。
○この冬は、城下は雪があまり積もらなかったものの、山では深かったのでしょうか。アイヌ二人が鹿を追っていき、一頭を射殺したところで、この鹿を守っているようにと言い、また鹿狩りにと山深く一人が出かけて行きました。帰ってきてみると、雪が深くて待っていたはずのアイヌがいません。どうしたのであろうか、おおかた運上屋の方にでも行ったのであろうと思って戻って来てみると、そのようなことはないという。再びその所に行って二日ばかりも捜したところ、陽が照って弓の上部が少しばかり見えたのを目印にして掘り起こしてみると、ああ退屈だったと答えたと、武士（ニシバ）が笑って話してくれました。
○霊桃寺さま、徳岡御一家（徳岡の村上良知家）、前沢の正保新右衛門、畑中先生並びに順治殿（畑中太冲（盛雄）と嫡子忠雄）、山目専左衛門殿御一家（山目（やまのめ）の大槻清雄家）、金成の清浄院、蜂屋御一家さま方、その他のどちら様にも宜しくお伝えくださるようお願い申し上げます。
○私め、この春に早速〈松前を〉出帆したいと思っていましたが、人びとに留められ、おおかた四月五月でなくては出帆は適わないため、何とも残念に思っています。
○仲之翁（小川仲之）が南部で源氏物語の講談をしているとの話を聞いていますが、おそらく松前にも渡りたいのでしょう。

寛政元酉年　三月二十三日　昨日から雨が降っています。
常雄主　　早々　頓首
秀雄

【5】【佐々木一貫の挨拶状への秀雄による添書】
この手紙を書いたのは佐々木氏（佐々木一貫）で、稲荷神社の神主です。あなた様のお話をしたところ、文通のために手紙を出しているものです。この扇子は、ある方からいただい

たもので、書は谷梯（やなはし）升蔵という松前道広公の家臣の茂亮の書です。素扇（地模様がなく文字だけの扇子ヵ）ではありますが、差し上げることにします。句、また和歌で源義経公の御事跡をしのんでみましたので、お受け取りください。近々、この歌集を差し上げたいと思います。早々

月日同じ

【6】【秀雄の書簡】

扇一本を差し上げたく、そのことを手紙に書いたのですが、〈持っていくはずの〉この飛脚が一人飛脚（通飛脚）であるとの事情を説明され、こちらで保管して後日に運ぶと申し残しています。大勢の方からの和歌をたくさんお寄せください。また、『水茎集』（鈴木常雄の歌集）をさっと写していただけないでしょうか。殿様（松前道広）と御母公様（文子の方）にもお願い申し上げ、一首の和歌を差し上げたく思っています。仙台の歌人の方々にもお目にかけたいと思います。

松前御城下には男女三十人余りの歌人がいますが、その中で秀でているのは、綾子の君（文子の方）、（下国）季豊、（佐々木）一貫、（吉田）一元、祐昌、計美女、きゆ、いよ、たけ、よし、やを、まさ、とみ、里ゆ、と多くいます。あなた様も御承知置きください。お母様はお達者でいらっしゃるかどうかをお聞きしたく、また、よろしくお伝えください。〈松前に滞在してから〉いろいろな産物や酒肴を見るたびに、あなた様を思い出します。お察しください。不備。

月日前に同じ、名も同じ

【7】

秀雄のぬしのお話で聞いていた歌人の中でも、あなた様のことは特にこの道に秀でていると聞いています。いまだお目にかかることもできませんので、お手紙で申し上げることに致します。ますます御健勝にお過ごしか、ようすを承りたく存じます。ほんとうに昨年秋に秀雄のぬしがここ（松前）に来てから、今では少しの病気もなく壮健に過ごされ、和歌の道にいそしんでいます。

ことさら、（吉田）一元、文子（文子の方）、（谷梯）茂亮、（佐々木）一貫などをはじめ、三十人余りの人々も秀雄のぬしに導かれて、和歌の道が盛んになったことはたいへんにうれしく思います。そのため、今年もここに〈秀雄のぬしを〉留めたいと話し合っています。

さて、この地の産物も贈りたいと思っていますが、この度の飛脚は藩主様の急用で仕立てているため、思うようになりません。もう一度考えておきます。遠路の土地ですので、一通

の手紙さえもかろうじて頼んで寄ってもらいますので、何事も思い通りにならないものと御推察ください。
〈飛脚の準備も整い、〉明日からは船出の風待ちとするという今日ですから、居合わせた歌仲間の和歌をいくらかお目にかけようと、秀雄のぬしの提案のままにつたない筆ながら書き送ります。
またいつかのお手紙に、御地のあなた様の歌をはじめ、人々の歌の数々をお送りくださることをお待ちしています。
なお、特に珍しい歌書などがありましたら、よい折りにお貸しください。秀雄のぬしがそちらに帰る際に、お返し致します。申し上げたいことがたくさんあり、紙筆に尽くしがたいものがあります。重ねての通信の機会にと思い、この度のつたない筆は止めることにしましょう。
初めての方へのお手紙が乱筆となり、たいへん無礼なこととお許しください。あまりにも急なことであると御推察いただき、お許しいただきたく存じます。あなかしこ〳〵

三月二十五日夜　　佐々木豊前

鈴木養作様　玉机下

【8】

夏もようやく卯月（四月）半ばを過ぎ、空の景色〈もよく〉、周辺の山々にも青葉が出はじめるようになり、郭公（ホトトギス）の初音を「ああうるさい」と聞いていることでしょうね。この蝦夷地の住まいでは、そのような景色もないため、今も昔もそのように想像しているようです。
寛文年間（一六六一～七三）の頃でしたか、花山院某卿という方がこの蝦夷地に流罪となられ、「都にてかたらば人の偽といはむうづきのむめの盛を（京都で語ったならば人は嘘だと言うでしょう。ここでは四月に梅が盛りであることを）」と詠われました。なるほど、垣根にある梅も今咲き出て初春であるとの思いがしましたので、見たことのない昔ではありますが、その卿の身の上までが思われて、旅衣の袖を濡らしていました。
昨日今日咲き始めた桜があります。小平太桜、次郎吉桜などという似つかわしくない花の名ではありますが、出羽国では種まき桜と呼ぶ桜で、この花を見て苗代に種を蒔く時期を知るのだと言います。ホトトギスが鳴くのを聞いて種を蒔くためか、ホトトギスを「四手の田長」とも呼んだそうです。桜が咲くのに時を知るというのは、田舎と都の区別もありません。このような桜に少しも違わないで情趣のあるものを、この蝦夷地で人名のように呼ぶのは、そのような〈名の〉男たちが土産に持ち込んだためでしょう。

○二の丸にお住まいになる綾子（文子）の君とおっしゃる方から、児（ちご）と呼ばれる桜の枝に歌を書いた紙が結ばれてきました。

袖せばくおぼしたてにしちござくら人にみすべきいろかともなし

返歌として差し上げたのは、

かぞいろの思ひならましちござくらはぐゝみたてしはなのおもかげ

又、きのう詠い申し上げたのは、

初声をまたん思ひも夏にさく花によそなる山ほとゝぎすいかがでしょうか。あなかしこ〳〵

（高橋）久武のぬし

（鈴木）常雄のぬしのもとへ　　秀雄

【9】

下国武（季豊）様の許から歌一首〈を預かり〉、あなた様までと送られました。歌道への志が篤い方だと、かねてよりお話をしていましたので、御親交を賜りたいと、〈あなた様と〉懇意にしている私からお話しくださいと頼まれました。「これからは〈歌の〉御贈答をたびたびしてくださるようお願いします。また、何事かの御用事、あるいは〈蝦夷地の〉産物などの御用があれば心置きなくお申し越しください」との御伝言がありました。いつもながらの急な飛脚の為に、急いで申し上げます。母上様、奥様、蓮治様、おやそ様にもよろしくお伝えください。早々頓首

四月十八日　常雄のぬし　　秀雄

【10】

今年の春（寛政二年正月）もいつもと変わりなく、神代（かみよ）からのままに〈家族・親類・地域の人々と〉仲良くお迎えになったものとお祝い申し上げます。こちらも秀雄のぬしはじめ、わたくしめも何ごともなく年を重ねました。青玉（ガラス玉）一つ、蝦夷細工一つ［マキリ（小刀）の鞘］を差し上げますので、お受け取りください。

さて、去年（寛政元年）の正月、秀雄のぬしが語ってくれたことから、愚かな心で恥ずかしいと思いながら、下手な歌を詠ってお送りしたところ、たいへんに丁寧な返書をいただきました。〈中でも〉返歌をいただいたうれしさは限りがなく、返歌を眺めては、知り合った方の言葉に匂いも深くかぐわしい筆の跡がありました。また、めずらしい筆跡で〈鈴木常雄家に伝わった源義家の〉感状の写しを送っていただいたのにも歌を添えていただきました。

言のはの色しかはらでいく春もとはれんことを松がうら
しま（常雄）
とあるのに、返歌を差し上げようと、
今よりはいく春秋にことゝはんちよもかはらぬまつがう
らしま（一貫）
と詠んでみました。
このような機会があってから、この蝦夷地の荒ぶるアイヌが自分勝手に争うことがあり（クナシリ・メナシの戦いのこと）、国中（松前藩内）が穏やかでなかったため、〈お返事を出すことを〉怠っていた罪は少なくありません。そのことをお許しください。
この度、秀雄のぬしも藩主様から〈松前に残るよう〉留められたため、今年も松前に留まるものと思われます。さて、〈手紙の遣り取りに〉関係することではありますが、（高橋）久武のぬしにもついでの折りにお話しいただきたくお願い申し上げます。去年（寛政元年）の春には鶴を詠った歌に返歌をいただき、うれしさは限りないものと思いました。その歌にあった、
春風は花のことのはさそひ来てえぞがちしまにまづ匂ひ
ぬる（久武）
にふたたび返歌をします。
俤はまだしら川の関の外に言のは風はふきもへだてず
（一貫）
このように詠ってみたとお伝えください。
わたくしめは神官ですので、松前藩での例年のことで、年末、正月元日から二月までは、一日たりとも暇もない時期でもありますので、詠んだ歌については秀雄のぬしに見せもしないで、思いが言葉になるままに詠んでいるだけです。その恥ずかしさは言葉にもなりません。詳しいことは秀雄のぬしからお伝えになっているものと〈歌仲間と〉語り合っています。是非とものお願いは、神道の道標になるような書物をお貸しください。書物について知らずに過ごしていることを不本意に思っています。蝦夷地に住むのは井の中の蛙のようなものですので、哀れんでください。
お手紙でお伝えできることは少しですが、お許しくださるものと祈っています。ただあなた様を思う心を、
道とをしちしま松嶋へだてゝもゆめにかよはぬ夜なゝ
ぞなき（一貫）
重ねてのお手紙に〈歌を〉書きますので、ここでは残しておくことにします。あなかしこ〳〵
正月十七日
鈴木養作様　　佐々木豊前（一貫）

あまりに無理なお願いが多いのですが、「貧しい者は礼儀をも持ち合わせることができない」と古人の言葉もありますのでお許しください。

【11】

《松の葉の》二年近くもお便りしなかったことを、不審に思われたであろうことをつらく思います。この国（蝦夷地）に異常なことが起こりましたので、よその土地にまで少しだけ知られてしまいました。

吹たえて言のはさそふ風もなくとはぬをうすしとおもはんぞうき

このように詠んでお詫びします。この頃は春霜も降りなくなり、《葦間の小舟のような》〈他国からの〉小さな船も支障なく入港しています。

思ったままを次のような歌にしてみました。

澄月の雲のさはりもはれのきて見ぬ君にだに逢ふこゝろなる

それとだにいはての山の嶺のくもたえずこゝろにかゝるとぞしれ

送っていただいた歌の返歌として、〈次の歌もお送りします。〉

松のみどり萩のにしきのとしへても心のいろぞかはらずもがな

ゑぞが嶋はものうからんと人はいへど花の都もおもはでぞすむ

こゝろあらば言のは誘ふ秋風を露なへだてそしら川の関

鈴木常雄主御もと　　佐々木一貫

※注　原文にある「このごろは霜かれはてゝ」について、全集解題（別巻一・165頁）で「寛政三年の初冬とみられる」とある。しかし、「あしまのをふねさはりなく音信侍る」は、本州と松前を結ぶ航路が再開されたことを示していることから、「霜かれはてゝ」を春霜が降りなくなった時季と解釈し、寛政三年晩春と考える。このことは、北前船が厳冬の時季には運航されなかったことに合致する。

【12】

新しい春の光がのどやかになり、蝦夷が千島の波路のようにはるばるとめでたいと眺めています。さぞかし、黄金色の花が咲くような春を迎えて、御母堂様をはじめ皆様方、松の葉の色が永遠に栄えるようにお過ごしのことと御推察申し上げます。この度は、急な飛脚を松前藩主様がお出しになるのに

お願いして、去年の夏にいただいたお手紙の返しをお出ししようと、筆のすすむにまかせて、まず私が無事であることをお知らせ致します。

さて、その頃は、東（『えみしのさえき』の旅を指すため「西」とすべき）のアイヌが住む境近くまで島めぐりをするため、田植月十日（四月十日）（全集別巻一・161頁解題では「五月」とする）にお書きいただいたお手紙を、閏六月二十一日にたいへんにうれしく、対面するわけでもないのに繰り返し読みました。

下国季豊のぬし、佐々木一貫のぬし、文子の君にそのことをお話ししていましたが、松前から三百里余りも離れ、海上をはるばると行ったところだと聞く、ある島の荒蝦夷（あらえみし）らが荒れた心で集まっていた頃だった（クナシリ・メナシの戦い）ために、函館という、ここから三日四日行った浦に滞在していて、去年の冬十一月の末になってこの福山に帰ってきました。この春は早く準備をして海を渡ろうと思っていましたが、和歌の友に遮られて、また、この地にやって来る遠い土地のアイヌも見たいと思いましたし、あるいは藩主様の治める土地の境近くで、千歳も生きるという丹頂鶴のたくさんの声が聞こえるような土地を、この度見ても良いとの仰せを内々にいただいたので、これがまた断ちがたい理由となりました。

〈アイヌが〉宝を収めた倉には、遠い上代からの宝があります。シトギといって、アイヌの女性が首に下げる鏡のようなものがあります。これは、「あめなるや乙棚機のうながせる（たまのみずまろ）」（古事記歌謡）と詠われたものです。これはみな視界にも入らない倉に秘めているのを、私の切実な願いを言えば、みな取り出して見せるようにとの〈藩主様からの〉ありがたい仰せごとがありましたので、今年も海を渡るのは（松前を離れるのは）、秋風が身に浸みるころになるのでしょうか。

近くの境となっている村や前沢の駅（うまや）の方々、同じ郡内の水沢に住む方々にもよろしくお伝えください。こちらでは、歌を詠む人がいるとあちらこちらで聞いていますが、よい詠み手は文子の方、下国季豊のぬし、佐々木一貫です。

○この正月三日は神明社に円座を敷いて集い、まず「初春祝」の歌題で詠いました。また、探題（たんだい）で詠ったのは、広英のぬし、季豊のぬし、神明社のあるじである神司の白鳥信武、神司の白鳥敬武（よしたけ）、くすしの吉田一元のぬし、それに私で、他の人々もいましたが省略します。

○六日は稲荷神社にて、「梅花久薫」という歌題で、右と同じように歌会をすすめました。十日は八幡神社で、「松有春色」という歌題でした。十三日は、文子の方の御館での歌会の初

めでした。他の方々の歌の力量はまだ及びもつきません。
○この度、藩主様より私が書いた冊子の数々を皆見せるようにとの仰せが下りました。この手紙の内容を、皆、久武にお伝えください。私が住んでいた家に置いていたあれこれの物は、江戸から訪ねるであろう〈松前藩の〉御使いの者に持たせてください。
○私が書き上げた十数冊の冊子（日記）というのは久武の家に残しています。これを文子の方、また藩主様が御覧になるとの仰せですので、それらを取り集め、良いように整理して、準備が整い次第送ってください。つづらの中にある石、道具類などは皆、ひとつひとつを包んでください。長い旅路に壊れてはいけません。特に蛇躰石は割れやすいものです。
○冊子類は一つにまとめて、つづらをさらに薦づつみとして、人足に持たせてください。
○切手（割符）を送りますので、その割判を持ってくる者がいましたら、そのつづらを渡してください。
○文子の方からの賜わり物として蝦夷錦というものを送ります。これは、今、中国人が着る馬蹄袖（ばていしゅう）の服の布片です。珍しい物ではありませんが、お手紙を書いていただいたお礼です。文子の方が詠った歌の出来がはなはだ悪いということで、〈歌を送ってくれるなと〉使いの者が来ましたが、そのまま送ります。武（下国季豊）さまからも賜わり物がありますが、詳しいことは後でお伝えします。
○ほかは略します。早々あなかしこ〳〵

寛政二年正月十七日　　秀雄

鈴木常雄ぬしへ

なお、〈貴家でお持ちの〉源義家公御感状を十二三枚、うまく摺って送ってくださるようお願いします。印肉を使わないで〈墨で〉摺るのがいいかと思います。
○この度は、〈藩主様などが〉私めの日記をわざわざお使い（お読み）になりたいとのことです。内心は喜ばしい知らせですので、この手紙に添える久武宛別書を出したいところですが、日暮れとなりせわしくなってきましたので、それもできません。小平太さまにお願いして、長作殿へ貸している各地の図（図絵）もありますので同様に送ってください。

【13】

再びお手紙を差し上げます。この飛脚の使いは武蔵国（江戸）へ急行いたします。また、江戸からは誰になるでしょうか、〈そちらに〉お尋ねする者があったならば、割符という証拠のものを持っていきますので、〈私の〉あれこれの調度を残りなく背負わせて持たせてください。いやしくも藩主様たちの仰

せですので、恐れ多く感じました。（佐々木）一貫のぬしがいくらかの物を贈りたいと話していました。そのことは、神職の仕事に忙しくて暇もなくむなしく取り止めることになったなどと語っていましたが、少しだけでもお返事を差し上げたいものと聞いています。繰り返して述べることになりますが、〈私が書いた〉日記や調度などを送ってくださることに手違いのないようお願いします。あなかしこ〳〵

正月十八日　　前にひとし（常雄宛て秀雄書簡）

【14】

この千島の殿（松前藩主）の菩提寺である法幢寺（ほうどうじ）という大寺があります。ここに五百羅漢を建立しようとする即心という僧がおります。年を取ってから僧になった者で、最近になって雄元を切り、俗世間を離れて、五百羅漢建立のための勧進をしています。そちらにも錫杖をついて修行しながら、仏道結縁を求めたいと申しております。また、〈そちらに〉よい仏工がいると聞いております。あなた様の館を目指して今年十月頃に行かせる予定ですので、村々にもよろしくお口添えくださるよう、ひとえにお願い申し上げます。

正月十八日　　姓名は前に同じ（秀雄）

※注　僧の即心については、『ちしまのいそ』寛政四年二月三日の条に詳しい（全集第二巻183頁）。

【15】

一筆啓達致します。秋の冷ややかさがますます増してくる季節になりましたが、いよいよ御清福のことと存じ、お慶び申し上げます。ついては、尾見山興のぬしにお渡しの品は、確かに手元に届きました。ありがたく思っております。この三年来音信が不通になったことをお恨みにお思いでしょうが、鷹匠の岡江彦兵衛に預けられたお手紙が、その者が紛失したとの旨を先頃ようやく聞きました。お返事がないと思い、文子の方などとお恨み申しておりました。そのために、手紙を送ることもせず本当に残念に思います。こちら側の落ち度であったことは、御容赦願います。この度は、私の親どもが江戸に行き、そのついでもありますので、こちらの土産の品々もお目に掛ける所存でございます。ただ、御目付の朝比奈作左衛門殿が帰りの御出帆をし、二日ばかり後に続いて藩主様が出立なさる予定でしたが、その翌々日から船が日和待ちとなりました。甚だ急な折りですので、十分な準備もできませんがそのままにしています。後でお送りする手紙の折には、皆さまに御寛容くださるようお願い致します。恐惶謹言

九月二十五日　　下国武季豊　判

鈴木養作（鈴木常雄）様はじめ皆さまへ

さらに加えて、秀雄のぬしも今月初め頃から故郷に帰ると言っています。いろいろ引き止めていましたが、やむを得ない事でもあるのか、船の日和待ちをしています。こちらは、船の行き交いが難しく、いまだに出航できずにいます。そしてまた、思いの外急なことですので、他の方々へのお手紙をお出ししませんので、（高橋）久武のぬしに□□□□（原文四字不明）宜しくお伝えいただきますようお願い致します。

※注　日記『牧の冬枯』の冒頭部分で、寛政四年十月一日に松前藩主が船出をし、七日には真澄が下北に向けて船出をする記述に呼応する。

【16】

去年の夏ごろに返書のお手紙をいただき、すぐに拝見すると、

　めづらしないく里越てこの宿にことゝひなるゝ山ほととぎす

とあり、〈ちょうどこちらでもホトトギスが鳴く時期であったために〉言葉の縁を興味深く思っていると、手紙の奥にまた、

　鳥の跡かよふにつけて奥の海のふかきこゝろもくみぞしらるゝ

と詠われていたので、嬉しさはいっそうはなはだしいものです。軽率にお出しした手紙に書いた和歌ははずかしく、今はたいへんに悔いています。早々に御返書をお出ししようと思っていましたが、同じ年（寛政元年）の六月頃から、蝦夷地東の奥に住むアイヌが自分勝手に争い（クナシリ・メナシの戦いのこと）、〈松前藩の〉教えに背くことがありましたので、戦いのための出陣などで好きなこと（歌道）も疎遠になっていました。

秀雄のぬしもここから二十余りの里を隔てた箱館という港町近くに移って、漁師が住む磯屋に食事の煙を立て、柴の戸口を閉めるように住まいしていましたが、〈近くであっても〉手紙の遣り取りも風の便りもなく過ごすようなにわかな出来事でした。〈そのような事情のため、あなた様に手紙も出さずに〉無礼なこととお思いでしょうが、先の手紙で、これから長く手紙の遣り取りをさせてくださいとこちらから言い出したのをたなに上げて、忘れてお返事を出しませんでした。ようやくこの頃になって〈状況が〉あらたまり、昔にたち返るように波風もおさまって長閑で、周りの草木も春雨の恵みにうちなびくように静かになりましたので、この度お返事を

出すことにしました。無作法な間違いは、幾重にもお許しください。

いただいていた二首のお返し（返歌）をしようと、ここに、

めづらしと人や聞らん一こゑをもらすはあさきやまほとゝぎす

奥の海の波の千ひろの底までもくみしる人のこゝろぶかさよ

と詠ってみました。

また、《なみなみならぬ》末の松山という所の松、それに宮城野の有名なもの（萩）で作られた筆をお贈りくださいました。萩の錦の色のように深い情けは、越え行く波やこぼれ落ちる露のごとくに袖に余るようでうれしく思います。

○今年は、冬に立春がきましたので（寛政二年は、前年十二月二十二日に立春となった。いわゆる「年内立春」である）、この里の定めとして固まるように積もる雪も、例年よりも深くなく、去年の冬の空から続く長閑さは老いた人々でさえも経験がないと語っています。野路も山路も一月末頃までには〈雪が〉消え果ててしまうだろうと思っていますので、桜の梢が満開になるのも今から待たれます。お住まいになるお国の空は、吹く風もしなやかにゆったりとしているものと推測しておりますので、風情のあるさまざまなお言葉（和歌）を添えてくださるものと願っております。

○秀雄のぬしも、私がお仕えしている殿様の城内に住む文子の方の館へもたびたびお訪ねできるように今年からなりましたので、文子の方もこの上なくお喜びになっていました。〈秀雄のぬしに〉殿様からも、折に触れて、文章を書き歌を詠むようにとのお言葉をいただいていましたので、帰郷の思いもいつの頃からか欲せられていましたが、《千島の磯の波のように》引き留められていました。それでも帰ろうとしていましたが、少しの間は留まっております。気になって、ご心配なさったでしょう。

この度の飛脚便は江戸に上りますので、五月の頃に帰ることになるでしょう。それよりも以前に、江戸から〈松前へ〉下る人が何度もありますので、その者たちに持たせて、秀雄がそちらに留め置いている旅日記、あるいは手回りの道具の数々を、早い便でお送りください。文子の方などからもその旨を言い伝えるようにとありましたので、くれぐれもお願いします。詳しくは、秀雄のほうからも便りがあることでしょう。

○『続耳底記』（歌書）という書物をいつもお読みになっていると伺いました。この書物は世にも優れたものだと秀雄も語っておられます。書物は、日本であっても中国であっても、疑いもなくめでたい宝物です。特に、世に数が少ない書物で

あれば、秘蔵して大事になさるのが道理です。秀雄のぬしも〈『続耳底記』が優れた書物であることを〉文子の方へ申し上げていますので、〈文子の方も〉御覧になりたいと念じていらっしゃいます。私めも何度も入手したいものだと願っていました。秀雄のぬしも、「書物は世の中の宝であり、たくさんの人に〈物事を〉教え知らせようと、昔の人が書き残したものだ。このこと（『続耳底記』を借りること）をこの便りでお願いして、少しの間借りることにしよう」と言い、私めにも手紙に書くようにとのことでした。そのため、このようにお願いするものです。もしよろしければ、《よしあし垣の》間近い飛脚便でお送りいただき、少しの間お貸しいただくことをお願い致します。

○また、《蝦夷地の凪いだ波が寄せる海の藻屑のような》取るに足らない歌、去年の冬の終わり頃から今年の春の初めにかけて詠んだ歌、あるいはこの頃になって人々が集まって詠んだ歌などを、お腹を抱えてお笑いになるようにとお送り致します。心おきなく至らない点を指摘してください。また、そちらの里の春の梢や谷から出て、軒端をつたう鶯に加えられた趣のある和歌の断片でも送っていただき、我が島（蝦夷地）の春雨に物寂しさを覚える憂さも払っていただきたく、〈次の歌を贈ります。〉

花どりに色香をそへし言のはのにほひをおくれ春のやま
かぜ

この千島の荒磯に波が運んできて掛けた苔むしろ（海苔のこと）を摘み取り、同じ海の広い海底に沈んでいるナマコというものを軽くし（干しナマコのこと）、取るに足らないものですが、身近にあるものをまとめてお贈りします。《みしめ縄のように》長くお付き合いいただければうれしく思います。あなかしこ

正月十八日　　季豊

常雄ぬしのみもとへ

【17】

一筆啓上致します。寒冷の時節ではありますが、そちらの皆様もあなた様もますます健やかにお過ごしのことと伺い、とても喜んでおります。また、私めも無事に過ごしております。恐縮ではありますが、あなた様も御安心ください。

○先だって、私の方へお送りいただいた箱物一つが届きました。仰せの通り、英治殿、文子君、季豊のぬしへもそれぞれ届けましたので、きっとその挨拶状がそれぞれあるでしょう。なおまた、私めにも数々の贈り物をお送りくださり、その御懇情をかたじけなくお受けします。加えてまた、箱物を届け

てくださった御仁の尾見蔵多殿と申される方に、受取証だけを届けさせました。その後、神社のことで甚だ多忙でしたので、御礼を失して過ごしてしまいました。

さてまた、白井秀雄氏もこの夏から帰郷の気持ちを持っていましたが、ようやくこの十月下旬にこの地を出帆しました。佐渡方面に行く話でしたが、また、仙台や江戸などへも行きたいとの話をしていました。もし御地へ行きましたならば、お世話など万端おこなって下さるようひとえにお願い致します。私どもも白井氏が当地（松前）にお越しになったことから、少しばかり和歌の風流を理解するようにもなり、はなはだ大慶の至りです。四五年来歌道のことだけを習っていましたが、元来が愚鈍の性分で一向に埒があかずに恥ずかしく思っていました。

なおまた、（高橋）久武公、畑中（盛雄）氏などその他の雅な方々の和歌をよくよく拝見すると、甚だ感動を覚えます。さらに、末筆ながら、あなた様の親孝行のことは〈仙台〉藩主様にも伝わり、賞賛された上で御下賜の品などまであったことを英治殿がお話しになっています。ついては、諸君子さま（学識のある方々）が和歌でお祝いしていることは、まことにもって恭賀な事と存じます。わたくしどもの二三人も申し合わせてお祝いの和歌を献上できるよう心がけます。それは次の船便の折りと申し残しておきましょう。

武（下国季豊）公の先日のお話では、次の船便の折りに御挨拶を申し上げたいと承っております。その際、お土産を何なりとも進上申したいと聞いておりましたが、その品物を預かっておりませんので、やむを得ず、お手紙ばかり差し上げますので、そのようにお考えください。

寒冷の時期をなんとかお凌ぎになられ、めでたく来春をお迎えください。今後のことは、後ほどのお手紙に致します。恐々謹言

霜月（十一月）十七日　　佐々木豊前（一貫）

鈴木養作様

さらに、お手紙を一通差し上げますので、高橋久武氏へお届けくだされたくお願いします。なおまた、神道者という深沢要人七十九歳が、このごろ当地（松前）に渡ってきて、この間、中臣祓と神代巻などを講談なされ、それをお聞きしました。まことに神国の古道であると近年になく感心致しました。なおまた、歌道の極秘伝などをいろいろと伝えていたところの秘伝中の秘伝であるということです。白井（秀雄）氏も門弟となって、何か秘伝を受けたとのことです。

また、『続耳底記』を白井氏が帰帆の折りに私の元に置くよう頼まれましたので、初めて拝見致しました。承るには、一

昨年中に〈あなた様から〉お借りしたものとのこと。まことに秘書と呼べるものです。そのため、私が筆写したく思いますので、今年も差し留めて置き、来春の船便で必ず間違いなくお送りします。そのようにお考えください。草々以上

【18】

一筆啓上致します。大暑の時節、いよいよお母様をはじめ、あなた様もお揃いで御壮健にお過ごしのことと恭しくお慶び申し上げます。私めも幸いに無事ですので、御安心ください。一昨年は御懇書をくださり、ありがたく拝見いたしました。加えて、いろいろお贈りくださり、御厚志は忘れがたく存じます。その節は、文子君、季豊氏への御進物なども間違いなくお届けしました。きっとその後、お礼の挨拶があったものと思います。

白井氏は去年、帰帆しました。先日うかがったところでは、南部領の野辺地に居られるとのことです。

○昨年冬からロシア人が来朝しており、当国（松前藩）の騒動は文章に書き表すことも難しいほどです。南部と津軽御両家から御加勢として千人余り（千人ずつ）、当国の士卒およそ千人ばかりで、〈ロシア人の〉行列は〈合わせて〉三千人余りの警固となりました。

六月二十一日、二十四日、二十七日の三度、〈ロシア人への〉応対がありましたが、無事に終わりました。毛夷人（ロシア人）も大いに神国（日本）の王法に感服しましたので、〈ロシア人からの〉了解を得られたことは大慶と存じます。ロシア人に申し渡された内容について、世間の虚説はわかりませんが、〈次のように〉まず一通りお伝えします。

〈幕府の〉御目付様は衣冠を付けた御装束で、漆塗りの筐に脇差しを入れました。ヲロシヤ人は役人アダム（アダム・ラクスマン）、次に大船頭、次に通詞ワシレイと申す三人が、立ちながら御政談を受けたのは、かの国の最高の儀礼だとのことです。〈松前藩の〉家老や用人、諸役人など百人余りが並んで座り、立った者は素袍に掛烏帽子を身につけていました。異国人に申し渡したのは古川(石)将監様（宣諭使の石川左近将監忠房）で、〈通詞に渡すための〉仮名書き文の御草稿を控えにしながら申し渡されました。

日本の公方、淳和奨学両院別当である源氏長者の征夷大将軍源朝臣何某がロシアの国王へ申し遣わす事柄を慎んで承るように、〈次のことを読み上げました。〉

さて、日本人が漂着したところ、十二年もの間、介抱して命を助けてくれた仁愛の御心の深さには大きな慶びを感じます。なおさら〈漂流民が〉病苦のために〈ロシア

正教に〉改宗して祈念などをしたい（ロシアに留まりたい）との考えはもっともなことです。また、帰郷したいとの気持ちを切々に持っている者たちを〈連れて〉、よく数千里の海上のざわめく波風と困難な苦労をしのいで、この地まで送り届けてくれた御仁政には、これまた感動しました。これによって、いささかの品とはなりますが、米百俵、麦百俵、七尺余りの太刀二振を御礼の験として差し上げます。

かつまた、日本までの海路を開いて交易することなどを願い出たいのであれば、長崎へ行って申し出をすべきです。日本国の王法として、長崎は異国船が出入りする港です。わが国では海辺に着いた異国船はことごとく打ち砕き、一人も助けないことは神代からの国法です。この度のそなたらは、幸い〈松前藩領外の〉蝦夷国へ到着しましたし、もちろん日本人を救って来たのですから、この度はそのまま留めておきます。これ以後は同じようなことであれば（交易を求めるのであれば）、長崎への切手（通行証）を謹んで受け取りたい旨〈を申し出てもらい〉、それによって〈入港の〉許可を下す時期を申し渡します。たとえ切手を持参したにしても〈長崎以外の〉他の海岸へ到着したのならば、是非を問わずに船を打ち砕くのは国法であると申し知らせるので、決して先々〈他の海岸に〉近寄ることがないようにして、大海原をいそいで長崎港へ到着すべきです。

かつまた、日本は他国に求めることは何もないのだから、数年引き続いての交易などは許されず、来年あるいは再来年までは〈漂流民送還の〉謝恩としてただ一度だけはそのように（船の打ち払い）はしないので、大いに感服して退去しなさい。

この度聞くところによると、〈風貌などが〉オランダ人に大同小異の人物ということです。これらの事については〈松前藩では〉珍しくそれぞれの役目を申しつけられて相務めましたので、〈和歌を詠ったりする〉風流なことどもも一向に廃れてしまい、煩わしくしていたことを恥ずかしく思っています。昨年、芝山宰相持豊卿（公卿、歌人）に入門しました。藩主様から銅雀台瓦硯（現松前町指定文化財）を拝見するよう仰せつけられたのは大きな慶びでした。日本の文禄三年甲午（一五九四）、春蘭軒という医者が大明国へ行き、日本に帰るときの送別の贈り物であるとの林学士の証文、併せて寛文九年同じく林家之記、享保三年同じく林家禹玉先生記、併せて（伊藤）東涯先生の漢詩、大善院風早参議公長卿、その外の諸君子の漢詩による賛などがあります。その瓦硯で〈私

が〉墨をするのを〈藩主様が〉御覧になっていました。
蝦夷地産の飛子（トビウオの卵の塩漬け）を一袋差し上げます。御笑納ください。
高橋御（高橋久武）氏への別の手紙を差し上げていますが、〈ラクスマン来航の一件についての〉詳細はあなた様に述べていますので、お会いになった折りに御笑談くださるようお願いします。次の船便の折りには、和歌もお送りします。まずはこの度の船便は甚だ急な機会ですので、乱筆になっていることをどうかお許しください。ほかのことは後のお手紙の時にします。恐々頓首

六月二十八日　　佐々木豊前

鈴木養作様　お仲間の方々御中

さて、ヲロシヤ人も七月上旬には帰国するとのことで、この間、六月晦日には松前城下を出立したといいます。蝦夷地のネモロ（根室）と申すところまでは三百里余り、しかし、船で箱館の港まで来ていましたので、場合によっては〈根室に寄らずにそのまま〉箱館港から帰帆のこともあるとの御沙汰もありました。
二伸　あなた様からの問い合わせのあった白井氏については、帰帆の折り、私めは、〈白井氏に〉預けられていた御秘書をようやく拝見し、その上写すこともできて万代の家伝書にできますことは大きな慶びであります。この度、お返し致します。長々の貸与の御恩情に、却って恥ずかしく思います。また、珍書をお借りしたいと思っています。遠路のところ送られるのは心配なことでしょう。極北の辺鄙なところで、一向に風流な趣きのない土地です。ただ、〈辺境への従軍行の気持ちを込めた王昌齢の漢詩〉「出塞」（従軍行）のような雅な気持ちが味わえるように思います。右の御秘書をお借りしていたお礼と、あなた様のお許しを得るべくこのようなことを書いています。頓首

六月二十八日　　一貫

鈴木常雄の君

【19】

《斧の柄も朽ちるほどの（僅かな時間と思っているうちに長い年月が過ぎてしまうことのたとえ）》長い年月の間にお手紙も絶えてしまい、どのようにお過ごしかと知りたく過ごしていましたが、この度、そちらに近い里から島畑兵作のぬしがやって来たので、思いがけなく面会し、そちらの話などを聞き、嬉しさに心も打ち解けました。お手紙が絶えてしまったことの面目なさに、今更になって連絡するのも心苦しいのですが、そのように止むべくもありません。やはり馴れ馴れ

しく〈お手紙を〉書き送ることになりました。
白井秀雄のぬしも五年六年ばかり前にこの島を出て帰りました。津軽、南部のあたりを旅していると、三度四度と便りを交換しましたが、もはやそのあたりには居ないのか便りも絶えてしまい、たいへんに恋しく、仲間の集まりでは、機会あるごとに語り合ってばかりいます。もしもそちらに着いたならば、くれぐれも宜しくお伝えください。
この度は都から大原某のぬし（大原左金吾、号は呑響。磐井郡大原出身の文人）が〈松前藩に〉来て、「武士にかかわる出来事が何度もあったので、風流な事柄もどこかにいってしまったのだろうか。以前から聞こえていたように、今は梅や椿の盛りの時期になって、ようやく春の気配になったと思えたが、和歌にして詠む柳〈の若葉〉を見ることもなく暮らしている。今年は桜も腹立たしいほどに遅いと恨んでいたところ、今年の桜は浦回（うらみ）に咲くのが早いのだろうかと思い、仲間たちと馬を並べて花見に行くといって誘っているが、風情のある歌を詠むこともできずに過ごしている」〈と書いています〉。
そのお方（大原左金吾）がいう「春のいろ」「ほととぎすのはつ音」とは、風情のある句を添えて〈そちらで〉お詠いになったと推察していますので、次の船便の時には伺いたいものと念じております。
また、申し上げにくいことですが、名取川の名で有名な埋もれ木の蝕んだ板を、文台（ぶんだい）を作るほどの分量を求めたいものだと長年思っておりました。これは得がたいものであると世間では知られており、先の仙台藩主様から我が藩主様へ香道の道具にその埋もれ木で作ったものを贈っていただきました。その香りを嗅いだことがあります。埋もれ木の類は世に稀なものでもありますので、手に入れることはとても難しいことではありましょうが、それに類した埋もれ木は時として折りとして入手することもあると聞きますので、そのような幸運がありましたならば、手に入れたいと思いますので、見つかりましたならば恩恵をかけてください。無作法なことではありますが、思いの丈を言わないで諦めるよりは、言った方がいいと思い申し上げています。
さて、先にも申したように、〈和歌については〉元来未熟であったものを、物事に忙しくして〈和歌を詠むことを〉止めていましたので、なかなかすぐには詠うこともできないのですが、以前に詠んでいて芝山持豊卿に添削いただいたのを、三つか四つ書いて送ります。笑いのたねにでもなれば、それもうれしく思います。

水辺杜若　みづ島の鴨の青羽の色になどへだてもなみの

かきつばたぞも
原照射　はらの名のあだちのまゆみ引そばめよりこと
　鹿をまつのかゞり火
浦月　たちのぼる雲もけぶりも澄る夜の月に消ゆく
　塩がまのうら
野雪　ふりそひて深さ雪にはをのづからおなじ趾ふ
　む野べのかり人
思　うきにそふおもひはむねにみちのおくのゑぞ
　がいはやの煙にもしれ
野辺夜嘶　月かげも更るまとのべ遠近に友よぶこまの声
　ぞ聞ゆる
御一笑〳〵　四月五日　季豊
常雄のぬしのみもとへ

※注　本書簡の年代について、全集別巻一・167頁にある解題で、「(大原) 呑響の渡道は寛政六年夏であるから、その翌年四月の書面と思われる」としている。しかし、中村真一郎『蠣崎波響の生涯』(新潮社、一九八九年) にある年譜によると、寛政六年七月に「広年 (波響)、道広 (藩主) の命を受け藩正使として上洛し、大原左金吾を藩に招聘」したとあり、さらに左金吾が実際に松前に向かったのは、寛政七年五月下旬とある。そのことから、本書簡は寛政八年四月五日付けと考えられる。

【20】

六月二日にお出しになったお手紙は七月十六日にこちらに届き、ありがたく読ませていただきました。ますますご無事にお過ごしとのこと、めでたいことをお慶び申し上げます。私めも無事に過ごしています。

さて、この度は出雲国からのお客である木穂左輔殿が添え状を持って来られたことから、私めの家に滞留いただいております。

この日本を興隆しようとのお心がけはまことに感服致し、下国季豊殿と申し合わせて次第次第に〈日本書紀神代巻の〉講談を始めて、だいぶ進んだところです。

しかしながら、仏教を廃して儒学を退ける巧みな説には大抵の人々は戸惑っています。君子 (天皇) が持つ賢い心の美点、国から受ける恩が篤いと思う人は増えています。この頃門弟もたくさん増えているのは、天皇の尊いおこないを知りたいとのことでしょう。

また、御添え状には、あなた様の家にある大事な記録や古蹟の刷り物を送ってくださり、毎度の御厚情にはありがたく思

っております。
近ごろは家の務め（神職）に慌ただしく、一向に和歌のことはおろそかになって恥ずかしく思います。この手紙の最後になりますが、高橋（久武）氏が御同席の折りには、ここまでのことをお伝えくださるようお願いします。
六月下旬に広東人があなた様の住む領地に着岸したと聞いています（寛政八年六月、仙台藩領本吉郡大室浜（現石巻市北上町）への広東漁船の漂着）。次のお手紙でようすを教えてくださるよう御承諾ください。
当地にも八月十七日にアンゲリヤともエンケレスとも呼ばれる土地の蛮人百十一人乗りの船がやって来ました（イギリス船プロビデンス号の来航）。大きさは、長さが三十間（約五四メートル）余り、幅が七間（約一二・六メートル）余りとのことで、蝦夷地（和人地以北の狭義の「蝦夷地」）のヲシヤマンベ（長万部）の湊近くに〈一時上陸の〉小屋がけをして、水や薪の用意をしました。松前藩もこのためにたいへんなさわぎになっています。さっそく〈この手紙を乗せる船が〉出帆することは大きな慶びです。続きは次の手紙にしたいと思います。一貫。恐惶謹言

十月朔日　　佐々木大和（一貫）

鈴木養作様

なお、〈アイヌの〉悪習（特に葬送の習俗だろう）はなかなかやめることはできないようです。辺土の民の教化は難しいものです。あなた様が住む土地（仙台藩）は大国ですので、おおかた賢者も多数おいでしょうからうらやましく思います。

【21】

しらずしらずのうちに手紙の遣り取りも絶えてしまい、音信もなく過ごしてしまいました。そのように不本意にも暮らしているところへ、先ごろ、どうして音信が絶えてしまったのかと（《絶えることのなかった信夫の萩の花摺りというものがどこに移ってしまったのかと》、《葛の裏葉の》恨みだけが募っていたところに、昨年の秋、満はた（人物名）がやって来て詳しく事情を話してくれたので、少しの間心おだやかになり、無関係な事柄を恨んでいたことを幾度も繰り返して後悔して思い返していました。
一方、秀雄ぬしは未だにそちらには着いていないのでしょうか。亡くなってしまったとも言い、また、そちらの近くまで行ったとも聞きます。南部という所から音信があってから（本資料【18】【19】参照）絶えてしまい、手紙もありませんので、どうしたのだろうと知りたい気持ちで暮らしています。

また、去年の夏に島畑兵作という方が来たので、思いがけなくお会いし、〈南部の〉その辺りのこともお聞きし、その帰りに言伝てをしたのですが、その後は音信もないために恨んでいるところです。かのぬし（島畑兵作）へも機会があったら、よろしく伝えてください。

さて、満はたのことも去年から二百余りほどの人々を教え諭して、二三四六八九の付く日（月に十八日）に集う日を設定して、中臣氏の『日本書紀』神代巻と神武天皇巻とを休むことなく講義をし尽くし、この度は故郷が恋しいとして、《綱手縄を引くように》引き止めようとしても《こゆるぎの》急いで船出をしてしまいました。

【以下は、秀雄に関すること】

ほんの一時の契りもたいへんに名残惜しく、そちらをまた訪ねると聞いていましたので、音信を求めて《もしほ草》書き重ねてお送りします。その後にでも満はたの消息を告げ知らせてください。こちらのほうに門弟もたくさんいますので、関係する人々はその縁を欲していますが、誰からも行方を告げてくる手がかりもないので、私めにこの事を言って、あなた様に伝えてこれまでの消息を聞きたいものだというのです。春にもこのことを伝えようと思っていました。あるいは、詳しいことは満はたからもお聞きになるでしょうから、まずは粗々お知らせします。あなかしこ

それとゑぞいはやのけむりむすぼれてそなたの風になびくとぞしれ

四月三日　　季豊上

常雄のぬしのみもとへ

※注　本資料にある【19】が寛政八年四月五日付けとすると、【19】にある「この度、そちらに近い里から島畑兵作のぬしがやって来たので」とする記述と、この【21】にある「去年の夏に島畑兵作という方が来たので」が呼応するので、本書簡は寛政九年四月三日付けとなる。

【22】

秀雄のもとより扇子一本が贈られてきた。画はない（【5】にある素扇）。その扇面に、〈次のように書かれている〉。

【漢詩＝『文選』巻第二十九にある曹攄の「思友人詩」】

寛政元年三月二十四日　　春宵館主人（谷梯茂亮）書

【現代仮名遣いによる読み下し…版本『文選正文』巻之七を底本とする】

密雲は陽景を翳い、霖潦は庭除を淹す。厳霜は翠草を彫み、

寒風は纖枯を振う。凜凜として天気清く、落落として卉木疎なり。時を感じて蟋蟀を歌いて、賢を思いて白駒を詠ず。情は玄陰に随いて滞り、心は廻飆と倶なり。思心何の所懐ぞ。我、欧陽子を懐う。精義は神奥を測り、清機は妙理に発す。我別るること旬朔なる自り、微言は耳に絶たり。褰裳難しとするに足らず。清楊は未だ俟つべからず。首を延べて階檐に出で、佇立してますます似たるを想う。

【解釈】

厚く重なった雲は陽光を覆い、大水は庭園を浸す。厳しい霜は緑の草をしぼませ、寒い風は細く枯れた草をふるわせる。寒々とした天気は澄んでいて、寂しく草木はまばらになっている。その時期であることを感じて（弱って家の戸口や寝床にやってくる）コオロギの詩を作り、賢者がいう白い馬の喩え（荘子にある「人の一生は、白い馬が壁のすきまを通り過ぎるくらいの長さにすぎない」とする喩え）のことを詠う。感情は冬の深まりに従って滞り、心はまるでつむじ風と共にある。友を恋しく思うこころはどんな感慨なのだろうか。私は欧陽君を想っている。（欧陽君の）詳しい解釈は神秘的で奥深いことを測り、清らかな心の働きは不思議な道理から発する。私たちが別れてからしばらく過ぎて、かすかなつぶやきも聞こえなくなってしまった。服のすそをからげること（再び逢うこと）は難しいことはないが、眉目の美しい友をまだ俟つべき時期ではない。〈そうはいいながら〉首を伸ばしながら軒下の階段に出て、佇んでいるとますます似た面影を考えてしまう。

【23】

【松前歌人十三人の詠歌が三十七首、秀雄の詠歌が七首ある。そのうち、詞書のある詠歌が一首、歌題による詠歌が四十三首（歌題は四十一種類）である。詠歌のみのため本稿での掲出はしない。下国季豊に「年内立春」を歌題とする二首があることから、秀雄（真澄）が蝦夷地滞在中の寛政二年（寛政元年十二月二十二日が立春）のものと断定できる。】

【24】

胆沢という名の郡があるが、その長である常雄のぬしのもとへ、この度、遠い辺境の地から、和歌の道に志があるとの徳が聞こえて、高貴な方から和歌の返歌をお贈りいただいた。そのことを、親しくしている法師（智春自身のこと）に伝えたのであろうか。出家してしまった私などはものの数にもならないが、一首の歌の言葉に心がひかれ、漁師でもない身ではあるが磯辺の藻屑の中からかき集めるようにして、和歌三

首を詠んで喜びの心を言い送るとして、智春、

敷しまの道の光りも顕れて藻に埋もれぬ玉のことの葉

今ぞ世にかくれぬ和歌の浦人やとしへて磨く玉の光は

千里までしられ初てや咲匂ふこと葉の花のひかりをぞみる

下胆沢の長である鈴木常雄という方は、浮世の仕事が忙しい中でも、和歌の道に深く心を寄せている。むかし親しくしていた三河国生まれの秀雄という人のもとから、松前城主の御母君である自照院文子とかいう方が、御歌どもを書き連ねて見せられると、〈秀雄だけが〉見たままにしておくことも思慮のないことだとして、「世に高き梢の花の」（【1】にある歌）を添えて常雄のぬし（原文に「秀雄のぬし」とあるのは誤りだろう）まで贈られてきた。その返歌として、また二首三首と詠まれた一巻を、私めにも見るべきであると、石川定覧の元へも言い伝えるといって、とりあえず見せてくれた。まことに「目に見えない鬼や神でさえも感動させ、勇ましい武士の心をもなごやかにすることができるのは歌である」（『古今和歌集』仮名序）というのだろうかと、〈そのような〉古人の言葉も今思い出される。かくして、おろそかに見過ごすことも本意ではないので、へたな言葉を綴って、その一巻に添えて返送をした。みだりにかき集めたような漁師の藻屑であると見捨ててほしい。咢辰、

思ふにもたぐひなからん枝かはす梢もたかき花の言の葉

常雄のぬしが和歌の道を好んでいることは世間に聞こえ、松前という遠い所から、たくさんの歌が梅や桜の花に添えて送られてきたのを見て、〈次の歌を〉詠んだ。有隣、

春風のいかにさそひて梅の花とをきさかひの香ににほらん

常雄の君には縁があって、松前の高貴な方から珍しい品物を和歌に添えていただいた。その名誉は世間中の感動のしるしとなるだろう。灯籠を取り下げて、多くの星の明かりがここにその徳を及ぼす、そのような祥瑞（よろこばしい前兆）をお祝い申し上げて、

北辰の□（不明）を通ふすひかりかな　見耳

鈴木氏が好きな道として、和歌の浦でお拾いになったような言葉の珠の光は、蝦夷が千島まで輝き、松前藩主様から蝦夷錦をいただいたと聞いて、歌の冠（頭）に〈「ゑそにしき」を〉置いてお祝いをした。

ゑんあれば支那もろこしも遠からずきたもみごとのからにしき哉
それ和歌の徳はまつ身もうるほふす錦まできた君のたまもの
にしきにもつゝむにあまるたまものは家をうるほふす(ママ)ものとみました
しきしまのみちひろければほど遠きからにしきさへやすくときる
君の徳は松前までも千世かけてたけ高き歌の道をひろむる　　右　保俵

常雄のぬしがお詠みになった歌、また人々が詠った歌をも集められて〈松前に〉送られたことを、たいへんに珍しいものとして、〈次の歌を詠んでみた。〉　信包、

我君もあかぬ心に見はやさん色香えならぬはなのことのは

幾世代にもめでたく敬われる文子の君のもとから、和歌をいただいた常雄のぬしへ〈次の歌を〉詠んで贈った。正保、

しきしまの道しならずば世に高き人になさけをいかでかはさん

【全集にある次の七行は、智春による「伊沢といへる名の郡ありけるが」から始まる文章と歌三首に重複している。そのため、ここでは再度の現代語訳を略す。】

かたじけなくも、天子の徳の感化が行き届かない所はなく、《都から遠い陸奥(みちのく)のように》深い心を種として、いつも和歌の道を好むことから、《うばたまの》夜の橘がむかしに匂っていたことや、《あしびきの》山吹の花がひっそりと咲き出るのについてさえ、それらの色や香をも知る人がどうして句や詩を追い払うことができようか。この度、下胆沢郡の大肝入鈴木常雄のために、辺境の地よりたくさんの和歌が贈られてきたことは、まことに恐れ多くも和歌の道に志の深い甲斐があるからであろう。常雄から、私めにも和歌を詠むように、あるいは漢詩を作るようにと何度も言ってくる。もとより《浅香山の》浅はかな心であるから、《朧(おぼろ)の清水の》たいへんおぼつかなく思う。そうであれば〈言の葉を〉一つながりにして、《どこであろうかと思ってはきたが、岩出(いわで)の森の》言わないで過ごすのもまた本意ではないので、《難波の》善し悪し〈の言葉〉を継いではみたが、《世間のもの笑いの種である浮き草がいつまで草であるように》いつまでも朽ちない筆の跡の

長い恥を残すことになってしまった。定矩、

言の葉の玉かともみむ和かの浦によせてかひある波のもくづを

自照院の君のもとへ鈴木（常雄）のぬしが献上した歌だといって、佐々木某（一貫）が写して〈私に〉授けてくれたのを見て、また佐々木のぬしの元へ歌を贈った。藤時英、

時しありて寄る玉藻は和歌の浦の浪にみがけるかひは有けり

常雄のぬしが松前から玉（アイヌ玉）を贈られたと聞いて、〈次の歌を詠った。〉 邇高、

幾千世も限りはあらじ松前のみどり色そふたまの光りは

【漢詩の読み下し】

平常雄才子に答を寄す。

千里の文章、時に一に看る。高歌六月寒を生むに似たり。共に憐れむ海内詞客多きことを。是に対して何ぞ愁う楚調の難しきことを。桃華崦が識す。

【漢詩の解釈】

平常雄という才能のある方に返事を寄せて。

千里もの遠い土地の文章を、あたかも同じ時を共有しているかのように読んだ。大きな声で暑さ真っ盛りの六月に歌うのは、かえって寒を生むのに似ている。共にいとしく思うのは、世の中に文人が多いことだ。これを思うと、どうして愁うのだろうか楚歌が難しいことを（詩文を作ることを）。桃華崦

【25】

この一巻は白井秀雄のぬしが松前に渡海して、松前藩主の母君へ申し上げ、歌をくださったことから始まり、歌の贈答を書きしるしたものである。長く伝えて、子孫が見ることを願ってこのように書いたものである。常雄

真澄研究　二十九号

令和七年（二〇二五）三月十九日発行

編集・発行　秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇―〇二二四

秋田市金足鳥崎字後山五二